
私立彩桜学園の日常的な日々

NOTE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立彩桜学園の日常的な日々

【Nコード】

N1614I

【作者名】

NOTE

【あらすじ】

私立彩桜学園はどこにでもある普通の高等学校。特別な能力者を集めた高校でもなければ、魔法学校でもなければ、偏差値もそこそこの私立高校。そこでは、なんでもない普通の生徒たちが学問を享受し、なんでもない普通の学校生活を過ごしている。この物語は、なんでもない普通の主人公が過ごす、なんでもない普通の物語です。

1話・兄弟

「お兄ちゃん！ めーるだによん」

うーん…………。

暗い^{まぶた}瞼の裏を眺め続けながら、俺はまだまだ冴えない頭をかきむしる。目に力を入れ、未だ冷めない目を、いやいやながらもほんのり開いた。

キツネのような薄目で周囲を見回してみても、まだまだ暗いまままだ。

「なんだよお…………アラームなんか設定してないぞ…………」

人肌（俺の）であつたかい布団を、いやいやめくりながら、枕元にある携帯をいやいやとると、

「お兄ちゃん！ めーるだによん」

急に携帯がしゃべり出す。

あ、メールか…………。

やっぱり俺、寝起き悪いな。ろくに思考回路が作動しないよ…………。自分の育ちの悪さ、どうしようもない寝癖に悪態をついてみても、もう今更直らないんだから仕方がないか…………とうとう自分自身に見切りをつけ、お気に入りの声を出す携帯を開ける。

「ん？ なんだ、彩^{さや}からじゃないか…………。あいつ、こんな遅くまで起きてやがるのかよ…………」

言いながら、暗がりの奥にうつすらと見える壁掛け時計を見ている。

んー見づらい…………。やっぱり蛍光式の方がいいかな。文字と針が光るやつ。

目をギューっと細くして…………壁掛け式の丸い物体、微妙に力チコチと機械仕掛けの音を出す、数字が刻まれた、大きいのとちっちゃいのがくるくる回つて…………見えた！ 7時だ！ すげえ！ なん

か目が進化した気分！

………まだ7時かよ。

そういえばそうだった。今日は、春休みの真ただ中。補習もないし部活動にも参加していない人間からすれば、暇を持て余すこと間違いなし。と、ゆーわけで、日も落ちない夕方から不貞寝すること……。

なんだろう、おかしな時間に寝たからか、微妙に頭痛いな……。自分の行いに後悔を覚えつつ、携帯画面に目をやる——と、あることに気がついた。

……あれ！？ この画面の左上にある表示！！

それは、先ほど俺が確認したはずの時刻が正確に点灯している。見てくれ、とでも言わんばかりに。

くそ……。

これ見りゃ一発だったのか……俺のさっきの苦労は一体……。

自分のあほさ加減がほんと嫌になった瞬間だった。

まあ、いいか……。

と、再び携帯の画面に目を向け、彩から届いた文章を読むことにする。

『陽兄ちゃん、また寝てるでしょ？ 何度電話しても出ないし、大体、2人して着信に気づかないなんておかしくない？ もしかして、彩の事無視してる？』

まあ俺は寝てたわけだけど、あいつの事までは知らないよ。

そう、俺は両親が借りてくれたアパートに2人暮らしをしている。同棲ではない。相手は男なのだから。

………。

いや、だからと言って同性愛者でもないけどな。

俺の兄だ。

竜崎 賢。

それが、あいつの名前。それなりのアパートを借りて2人で住んでいる、同じ年の、俺の兄。

そう、俺と賢の間に、大した時間の差なんかなかった。ただほんの少しだけ、賢の方が先に生まれただけ。

俺たちは、双子なんだ――。

「それにしても……」

俺は今まで自分が寝息を立てていた布団の隣を見る。隣接まではしていないが、近い位置にある賢の布団。敷いてはあるものの、そこにはまだ入った形跡がない。まだ寝てはいないということだろう。ということは……飯でも食ってんのかな？

しょぼしょぼした目で背後を見てみると、すりガラスの戸からは明るい光が漏れていた。奥の部屋は台所。やはり夕飯でも食べているのだろう。

俺は腹は減っていないが、あいつの性格だ、俺が起きていることを知ったら「ちゃんと三食食べないとだめだよ」とか言いながら、俺に夕飯をせがんでくるに違いない。

この家での夕飯作りは俺が担当（本当は当番制なんだが）している。賢はまったくと言っていいほど作れない。

前に作ってもらった卵焼き……何を入れたのか、焦げてもいなかったのに苦辛かった……。

そのため、あいつは腹が減ったら俺に「夕飯作って」とねだってくる。同じ顔からねだられることほど気持ちの悪いシーンはない。兄が苦勞してカップ麺でも作っていることを思いつつ、俺の方は、面倒事に巻き込まれる前にさっさと寝たふりでもしようか。

布団を被った。

「……………」

思ったとおり、台所の方からはジョボボォー、とカップ麺にお湯を注いでる音がする。

「……………」

正直不安だな。

あいつはどこかぬけている。

たかがカップ麺なのに全身火傷でも負いそうなほどのドジっぷり

だ。

「……………」

急に怖くなってきたな。ちょっと様子を見てみよう。

布団を軽くめくり、俺は台所との境にある戸口へと移動。そして、そおつと戸を開く。

直接に蛍光灯の光を浴びてしまったせいか、急に目が痛くなったのだが、キッチンの方にはやはり見覚えのある後姿が。どうやら、カップ焼きそばでも作っているようで、今はお湯を捨てている最中、といったところだろうか。まあ、湯切りで火傷するバカはいないだろうしな……大丈夫か。

兄の安否を確認した俺は、そおつと戸を締め切り、俺の布団へととんぼ返りを決め込もうとする——が、やはりただではおさまってくれないようで……

「うわあああああああああ！！！」

台所の方から悲鳴が聞こえた。もはや断末魔の叫びとも思えるその声に驚き、慌てて戸をがばっと開き切り、台所エリアへと侵入した。

「どうした賢！ 火傷でもしたのか！？」

賢は、キッチンの方へと体を預けてぶるぶると震えている。そして、うわごとのように何かをつぶやき続けていた。

「あ……あうあわ……。ぼ、僕は……。僕は、だめなんだあ……」

「け、賢……？」

やっと自力で立った賢が振り向く。その顔からはまるで噴水のように涙がだらだらと流れていた。

「よう……僕は、僕はあ……。僕は……。僕は、どうせだめなんだあ……」

「だ、だからどうしたんだよ？ どこだ？ どこを火傷したんだよ……？」

賢は首を横に振る。

「うう……えぐっ、うっ……えうっ……」

「そんなに泣いてちゃわかんないだろ？ どうしたんだよ賢？」

賢は、小学生みたいに泣き続けながら、力のこもらない手を懸命にあげ、控え目にシンクの方へと指をさしていた。

なんだ？

彼の示唆通り、俺はキッチンのシンク……排水口の辺りを見ることにした。

視線を送ると、そこには……まだ色もつけられていない麺が無残にも散らばっている。どうやら、湯切りに失敗したみたいだ。

……ん？

「賢、もしかして……それで泣いてんの？」

「……………」

涙を流しながらうなずく賢。

呆れてものも言えない俺。

「ここまで慌てさせといてなんじゃこのオチはあつ!？」

くわつと目をひんむいて叱った……………。

はあああああああああつつつつ。

俺らの毎日って、こんな風に続いていくのかな……………。

1話・兄弟（後書き）

「他の作品はどうしたあ!？」

……などというつつこみを自分自身に投げかけながら、しばらくはこの話を進めていこうという作者です。

ついに壊れました。

最近まで忙しい日々を過ごしていたもので、やっと緊張状態から解放された気分で……。

ほんの軽い気持ちで、こんなばかばかしい作品を投稿してしまった
ている次第です。

さて、作者も本気でこの作品に取り組む気はありません。

皆さんが勝手に楽しんでいただければ幸いです。

感想や評価をくだされば、なお嬉しい限りですので、どうぞこれからよろしくお願いいたします。

P・S・ 時計や焼きそばの話などは、私も本気で悲しんだ実体験
のひとつです……。

共感などいただけたら……いいお友達になりましょう。

2話・学園&幼馴染

春休み——なんていい響きなんだろう……。

新たな生命が誕生し、太陽は優しく微笑み、花々は可憐に咲き誇り、人々はレム睡眠からノンレム睡眠へと誘われる。

そんな、高貴で優美なお嬢様のような——。

まるで、都会から離れた所の無邪気な少女のようにまぶしい——。そう、もう最高の季節ではないかあつ！

この朝から燦々ときらめく陽光を浴びただけで、俺の気持ちは、まるで雪解け水のようにさらさらと宙を漂って——

「おい。おい竜崎^{りゅうさき}！ 竜崎陽^{よう}！ 人の話を聞いているのかお前は！？」

「……んあ？」

「『んあ？』じゃあないだろ！ 私の授業がそんなにつまらないか？ 寝てる方がマシつか！？」

見てみると、教壇の上で俺の方へとどなり散らす担任がいた。あまりに恐ろしい剣幕なので、俺は誰が怒られているのか気になって周囲を見回す。

「いや、周囲を見るな。お前だ、お前に言ってるんだよ私は！」

「は……？ 俺ですか？」

「他に誰が寝ているというんだ！？」

担任は相変わらず憤怒の炎を背中に背負っている。

まるで不動明王みたいだな……。

そんなこんなで、今日は春休み……のはずなのだが、俺の学年ばかりはそうはいかなかった。

いつもなら学校行事が目白押しのウチの高校——市立彩桜学園^{さいおう}は、校風も成績もゆるゆるなお遊び高校だ。

しかし、いや、『だから』なのかもしれないが、ここ（特に俺た

ちの学年)では春休みにも補習がある。別に成績がまずいのではなく、それどころか中の中——なかなかとれない最難関ラインを突っ走っている理想的な高校だ。

だが、先程も言ったとおり、そこは行事もりだくさんのお遊び高校。

普段の授業日数が間に合わなくて、このままでは単位が危ない。下手を打てば留年の危機！

そんな感じ。

と、いうわけで、昨日までの和やかな春期休業はグッバイ。

今日から三日間程度、俺は午前中のみを再び授業という大海の荒波、異国の戦火に身を投じる日々を送る羽目に陥っている。

「キーンコーンカーンコーン……………」

1時限目終了。

朝から大目玉をくらいながらも、俺はなんとか担任の目をかいくぐって惰眠^{だみんむさほ}を貪ることに成功したのであった。

「あまり自慢できることじゃないね、それは……………」

俺の情けなさMAXなモノローグを察したのか、俺と同居中で双子の兄の賢^{けん}が溜息をつく。

俺ってそんなにわかりやすいのかな？

賢は肩をすくめながら続ける。

「昨日だって昼からずっと寝てたじゃないか。なんでそんなにも眠いものなのさ？」

「俺はな、1日に12時間以上は寝ないと身体に異常をきたすんだよ」

「人生の半分を損している計算だね……………」

「それに、昨日の夜は賢のせいで眠れなかったんだろ？ 焼きそばこぼすわ、夕飯ねだるわ、格闘ゲームの挑戦してくるわ、深夜番組見まくるわで、結局、日にちまたいじまったじゃないかよ」

「うう……………」

「それに、賢だって昼から寝ちまってたから、昨日はあんなに遅く

まで目が覚めたんだろ？ 俺にとやかく言えた義理じゃないじゃんか」

「うっ、うううっ……」

……………。

……………あれ？

なんか、賢の様子がおかしい。

肩をプルプルと震わせて、両手を胸の前に持ってきてぎゅっと握っている。心なしか、目にもなんだか表面張力が見えるような……。

「や、やっぱり、僕は誰かに迷惑をかける運命なんだあ……………」

あゝあゝ……………涙声になってる。

なんだか目から輝くひとしずくが流れ出た気がしたし……………。

「うっうううっ……………」

なんか、マジになってきたな……………。やばいこれ。マジだこれ。これ以上泣かれた方が迷惑だよこれ！！

「け、賢。別に責めてるわけじゃないし、俺だってもともと夕飯食べようと思ってたし、ゲームだって最近やってなかったし、深夜番組だって笑えて楽しかったんだからさあ……………」

俺が慌てて取り繕うと、賢は幾分か落ち着いてきた様子だ。

「ほ、ほんとあ……………」

「ほ、ほんとだよ……………」

つか、男相手にこの展開はないだろ……………。

2話目からBL混じりってどんな話だこれ……………早くも主人公の俺に暗雲差し掛かってる（語り手の俺の発言はなんでもありだったりして）。

「あ、あれ？ なんか、いやそうな顔してない？」

俺がことの顛末に呆れていたのが顔に出たのか、賢は訝しげな顔で尋ねてきた。

「や、やっぱり僕って……………僕って、いるだけで迷惑な存在なんだあ……………」

心情のレベルがはねすぎだろ！

賢がいよいよ本格的に泣き始めようとしたその時、俺の背後から甲高い声で、

「あなたたち、またケンカしてんの？」

振り返ると、そこには明るいブラウンの髪を冠した、ショートカツトの同級生がいた。

目はきりつとし、輪郭も細く、細い腰に手を当てて仁王立ちを決め込む幼馴染がそこにはいた。

「これのどこがケンカの構図に見えるんだよ、智里」

幼馴染の存在をその目に認めると、俺は彼女へとつつこんだ。

彼女の名前は篠森^{しのもり}智里。

俺（たち）の幼馴染だ。

小さい頃から近所に住んでいたのだが、俺と賢がこの私立校に入學すると宣言した時、急に進路をこの学園に変えた意味不明女である。

その件に関して意味不問と言い張る彼女だが、俺にはなんとなく予想がついている。

「そうね、どちらかといえば陽が賢をいじめている風に見えるわ」

「それも事実からずれてるんだけどな。まあ、そう見られても仕方がないか」

「賢は気の弱い方なんだから、気を払ってあげるくらいのことをしなさい」

「お前は本当に賢には甘いよな」

単なるお節介女。

なのである。

いつも俺と賢の間に入ってきたり、俺たちの横にひついたり、俺たちの後をついてきたり……。一番多いのは、いつの間にか俺たちの前を先導していたり……。

だから、たぶんそうなのだ。

彼女が急にこの彩桜学園に通おうと思ったのは、単に俺たちがい

るから。

自意識過剰でも自惚れでもない。

ただの事実だ。

智里が俺たちのことをよくわかってくれていることは、俺たちもよくわかる。

智里が俺たちを友達としてよく思ってくれていることは、俺たちもよく思っている。

だから、彼女は俺たちの後を追ってきてくれたんだと思う。

中学の時——このまま離ればなれになっちゃうのかな——なんて言い出したのはこいつだ。正直なところ、俺はわからなかった。このまま離ればなれになったところで、俺たちの友情が崩れることはないだろう。

でも、智里が心配しているのは、友情云々ではなく離ればなれになることそのものだったのだから……それはわからない。

就きたい職業が違うなら、職場は離れるだろうし。

行きたい場所が違うなら、住居も離れるだろうし。

どのみち、物理的にも精神的にも離れたくないという彼女の気持ちには分かる。

俺たちは生まれてこのかた兄妹のように育ってきたのだから。

いや、遊びの主導権はどうしても智里にあつたから、姉弟……だろうか。

自分よりも精神年齢が低いと思っていた俺たちが、いわば自立したいと言ってしまったのだから……姉的立場としては見過ごせなかったのかもしれない。

まあ、結果的にいい迷惑ではあるけど。

「悪かったわね、いい迷惑で」

「は？ お前、俺の心情を察知することができるのか？」

「私を誰だと思ってるの？」

「ありがた迷惑女」

「いえ、私が起こす迷惑すらありがたいと言ってくれるのは嬉しい

んだけど」

「そんな言葉のとらえ方があるか！」

「それとも、人生の上では有り難い^{がた}迷惑が、私なら起こせると言う尊敬？」

「俺が奇跡体験者として名乗り出たとでも言うのかお前！？」

迷惑に希少価値なんて付けるな！

本当に、うるさい女だ。

かれこれ16年間、俺はこいつにこんな風に構われている。いや、本当は「俺たち」なのだが……いかんせん賢はこんな会話に参加したいタイプではないので、いつも横で笑っているのだ。第三者として。

「ぶつ、つくく……」

ほら、こんな風に。

……………。

って、あれ？

賢はいつの間にか笑っていた。俺と智里のやり取りを聞いて、それが面白かったのだろうか。声を押し殺して、腹を押さえて笑っている。

「つくくく……」

なんか、賢の中では爆笑しているらしい。

これくらい笑われると、当事者としてはしけてしまうもので。

「……………」

俺と智里は俯いていた。

気のせいかな、彼女の頬が紅潮しているように見える。俺もあんな感じになっているのだと思うと、それはそれでまた恥ずかしいものがあった。

しばしの沈黙の後、

「そ、それよりもさ……」

俺が声を発した。

「春休みの真っ最中に、なんでこんなことしなきゃいけないんだよ」

と、話を切り替える。

いや、正確には、俺の中では話を戻した形になるのだが。

智里は答える。

「留年までは言いすぎだって話だけど、卒業が危ぶまれるくらいの噂は立つてるって話だから……まあ仕方がないんじゃない？」

「それにしても、なんで俺たちの学年だけ？」

「私たちの学年だけ、やけにレクリエーションが多かったのよ、今年は」

なんだよそれ。

「でも、またなんでそんな事になってんだ？ 俺はもうこうして学校に来る事に、今更何の意味があるのか分からないけど」

「私たちの入学当時の成績が、そこらの公立よりもずば抜けて良かったせいか、先生たちも気を良くしちゃったんだって」

「で、気を抜いた結果がこれか……。なんて言うか、一番の被害者は俺たちだよな」

「そうだよな。陽なんてただでさえ出席日数が危ないのに」

「俺、ほとんど休んだ事ねえよ……」

「あれ？ いたの？」

「単に影が薄いのか俺は！？」

「だって、いつも二人いるから。二人じゃないと一人じゃない気がして」

「俺たちは半人前かよ！」

「賢は一人前だよ」

「それ、俺はただ賢の付属品になり下がってるじゃん！」
「どちらかといえば影が薄いのは賢だろ！」

「陽、その言い方は酷いよ……」

お前まで人の心の中を覗くな、賢。

賢に気を引かれているうちに、またもや智里は攻め込んでくる。

「それに陽は、卒業まで成績が持つのか不安だし……」

「せめて卒業できるかどうかを心配してくれ！ 俺は卒業前に道を

脱してしまうのか!？」

結構リアルでこえーよ!

「いやしかし、それだけウチの学年がピンチだったのに、原因でもある教員はいつ来るんだよ? 補習のスケジュールとか知らんけど、この休み時間は長くないか?」

気がついてみれば、さっきの授業、1時限目が終わって結構話し込んでしまった。その割には次の授業、って空気がない。それどころか、教室の人口が圧倒的に減っている気がする。

そんな疑問を、智里が解決してくれた。

「今日はこれで終わりだよ」

「マジで今日ここに来た意味がわからないな……」

そんな、どこにでもあるようにで案外ない、もしかすれば理想的とまで言えるほどのユル校——彩桜学園の全日程だった……。

2話・学園&幼馴染（後書き）

1週間更新っぽくなってます、NOTEです。

今回でわかるとおり、本当にゆるゆるな感じです。キャラも世界も学園も作者も。

原因はただ一つ、自分に正直なんです。

思いのままに書いてたらいつの間にかこんな感じになっちまいやした、って感じです。

ちなみに、この話に一週間なんてたいそうな時間をかけていたわけではありません。

頭の部分はちよつと前に書いてあったやつですが、後半というか大半は投稿前の1時間かそこでズババーっ書き散らしたものです。（たぶん修正が必要かも）

さて、作者のどうでもいい与太話はこれまで。

やつとキャラが増えました。雑キャラ……失礼、サブキャラも合わせれば4人ですね。少し前の作品では1話目に主要キャラ全てを登場させた覚えがありますが、それはそれですしね。（これも与太話……）

篠森智里です。

彼女の紹介は、まあそれなりにしたつもりですけど、十分だったのでしょうか。自分でもよくわかりません。まあ、おいおい彼女も明らかになると思いますので。

当然、キャラはこれだけではありません。

厳密に言つと、1話にも登場してますし（メールだけ）。

と、いうことで、これから展開を始めるこのお話ですが、作者の自己満足に同調してくれば幸いです。

そして感想や評価などをくれれば嬉しいことこの上ないです。ぜひぜひ激辛評価から何から遠慮なくどうぞ。

P・S・

キャラのプロフィールなどおいおい示します。
自分としても、あまりキャラが定まっていなかったのでそうも言えま
せんけどね……。無責任ですいません。

閑話・B級グルメ（前書き）

これは暇つぶし程度の話です。

繋がっていて、繋がっておりませんので、基本的には短編集だとも思ってください。

閑話・B級グルメ

俺は今家にいます。

まあ、家って言っても実家でなくアパートなんだけど。今って言ってもまさに今帰ってきたところなんだけど。

春休みも始まったばかりの今日。

俺は朝からとある用事で外に出ていた。

昼時までに帰ってくるというのはやっぱり新鮮で、でも、これから昼食を作るいうのもなんだか面倒な話ではあった。

「ただいま」

俺は玄関のドアを後ろ手に閉めた。キッチンの方を見ると、双子の兄・賢が熱心にカップ焼きそばへとお湯を注いでいた。

「おかえり」

なんて気のないように言っただけで、自分の手に持ったカップにはどこまでも愛情を注いでいる。その愛情、実の弟にはやれないものなのだろうか……。

「悪いな、賢。もう少し早く着いていれば昼食一緒に食べたのに」

「いいよ、陽。今日はなんだか、カップ焼きそばが食べたい気分だったから」

嬉しそうに答える賢。

「たたく。」

いつも俺が寝てるのを起こしてまで食事ねだるくせに、たまに気を遣って早く帰ってくるとこれだ。

あてにされてんだかされてないんだか……。

ま、手間が省けていいか。

ちなみに、皿洗いはいつも賢の仕事だ。

俺が昼食、賢が洗い物。それで結構な分担がなされている。その他の家事に関しては、二人とも得意とするところではない。そこら

辺は当番制という区分だ。

俺はキッチンを素通りし、薄いすりガラスを抜けた先にある部屋へと移動。そこでは二人のプライベートが共有されちまっているスペースとなっている。男同士だし、別段困ることもないだろう。

まあ、そこは生活してから思ったことで、同居する前にはいろいろ反発したもんだ。

そこんとはまた後日の話として……。

暇を持て余した人類の必須アイテム、テレビの電源をONにする。と思いきや、既にテレビからは音が流れている。フローリングに絨毯を敷いただけの床へと座りながら、俺はそのテレビへと視線を集中させた。

昼時ともいうことで、その番組内ではB級グルメだかなんだかの特集を組んでいた。

しかし、所詮はB級。

ちっちゃなワンコーナーでの何分かしが組まれてはいないようだし、情報番組の中継という悲しい立ち位置へと追い込まれている。

いや、食についてだけでワンコーナーを作っているというところは、B級グルメとしては榮譽ともいえるところなのだろうか……。

元々は地元の味だし。

全国へと電波を飛ばされているだけましか。

あれ？ このグルメ……。

「なあ賢……」

俺はすりガラスの向こうにいる賢へと呼びかけた。

「なあに？」

「お前、この特集見て焼きそば作ってんのか？」

「ギクッ」

は？

今なんて言った？ あいつ。

戸越しに効果音なんか聞こえるわけないし。

そもそもそんな擬声語が世にはびこるかっつの。

初めてそんな音を口から出す人間を見ちまった瞬間だった（目の前にして見られなかったのが非常に残念だ）。

目の前の「横手焼きそば」なる美味そうなB級グルメがじゅうじゅうと音を立てている中、俺は実の兄へ呆れるばかりだった。

まあ、実際には美味いんだろうけど……「横手焼きそば」。

「お前も、つくづく触発されやすいやつだな」

「ち、違うよう。僕はただ、自分の満たされていない欲求を満たそうと、食欲にまみれて飢餓に苦しむ前に手を打ったまでだよ」

「おい。欲求を満たすだの食欲だのまみれるだのと、何をお前らしくもないワードを口走ってんだよ、賢」

閑話だからって何を言ってもいいとは限らないんだぞ。

ちよつとは自分の設定を見つめ直せ。

「と、とととにかく。僕は別に……た、食べたいから食べようと思っただけだし」

「じゃあさ、焼きそばのいい点を全て言ってみろ」

「い、いい点……？ 全て……？」

ガラスの向こうでおどおどし出す兄。

我ながら見事な無茶ぶりだったな……。

我が兄ながらテレビにいちいち左右されるのもどうかと思ったし。そこへの制裁としてはよくやった方だ。

「え、えつとお……。まず、焼きそばの麺にあの甘かったり辛かったり……まあ、場所によってキーとなる味は変わるだろうけど、とにかくソースが絡ま^{から}っていい味を出しているところ」

「なんか饒舌^{じょうぜつ}だな」

「そこにしゃきしゃき野菜が豊富に入っていて……味だけでなく食感も格別なんだよねえ」

調子づいてきたのだろうか、賢の声がどんどん夢心地な声へと変貌していく。

「それに、なんといつても香りだよねえ……」

賢がそう言っているキッチンからは、なんだか美味そうな匂いが

漂ってきた。

「あの焼いた時に出る、表面の一部がちょっとだけ焦げるくらいの格別な香り……。香ばしい香りが食欲をどんどこかきたてて……もう幸せになっちゃうよねえ。なんだか、あの香りに包まれて眠りたい！」

どこまで焼きそばラブなんだ？

それに、俺は香ばしい香りに包まれながら眠るのだけは反対だ。寝てるだけで胸焼けするわ。

下手すれば酸欠に陥るぞ。

「そうか……」

「そう！ あれがないと僕は焼きそばなんて認めないからね！」

そこまで言うか……？

言いながら、賢は俺の横へと座り込んで、テレビの方へと向いた。手元では必死にソースを麺に絡めている。ちよっぴり辛いマヨネーズも忘れちゃいないようだ。

テレビでは、違うB級グルメへと話題を変えているところだった。今テレビに映っているのは、「あいがけ神代カレー^{じんだい}」なる、これもこれで最上級に美味そうなものだった。

ご飯を中央縦によそい、左には小麦粉を使った昔ながらのレトロカレーを、右にはデミグラスソースを使った欧風カレーをかけている。

さすがは大会を開くだけのことはあるな。

B級とはいえグルメを名乗るものとして、十分なほどの探究心を持ち合わせている。

どちらも引けを取らない味である上、中央には半熟の卵まで乗せている。

一皿で四度美味しいというのはまさに神がかっている！

まさに神代カレーだ！

く……食いたい……。

今、兄の前でテレビに影響されるなと思ったのはいいものの……こ

れほど美味そうに見せられては食わずにはいられなくなるではないか！

だめだ。

もう、我慢できない。

どうせまだ昼食済ませてないし……。

……………。

「よし、食べよう」

「え？」

テレビを見ながらほけーっとしている賢が、俺の言葉を機に、目覚めたようにこちらを向いた。

「カレーだよ。ちょうどスーパーで買って来たんだ」

レトロカレーならぬレトルトカレーだけど。

「え！ いいな。僕も食べたいよ」

「お前はそれがあるだろ……」

俺は賢の持つカップ焼きそばを指さす。

俺の指先を見るなり、賢はしゅんとうなだれて残念そうな顔をした。

まあ、気持ちは分からなくもないが……。

「わかった。我慢するよ……」

「そこまで食い意地はってたっけ？ お前」

なんだか今日はいろいろおかしい賢を放っておき、立ち上がろうとした時、不意に気づいてしまった。

いや、それそのものは以前から抱いていた疑問だったのだが……。

「なあ、賢……」

「な……」

すっかりしょんぼりモードに入っている賢に、これでとどめとばかりに言うことにした。

「あのさあ、さっき、香ばしい香りのしないものは焼きそばじゃないって言ったじゃん？」

「う……」

「ちょっとだけ焦げるあの香りが、って……」

「だあかあらあ……？」

気の抜けた、というか、魂が抜けてしまったように焼きそばをする賢。

「あのさ、思ってたんだけど……。カップ焼きそばって、焼いてない？」

厳密に言えばお湯で戻しただけ。

ラーメンと同じで、茹でただけという意味でもあるのだ。

なんなら、ふやけただけと言ってもいい。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

その日一日中、テレビを見る時もご飯を食べる時もどんな時も、賢が目を合わせてくれることはなかった……。

気づいてなかったんだあ……。

閑話・B級グルメ（後書き）

まあ、身近な疑問から生まれた一話です。

賢は、結構賢いんですけどね……なにぶん抜けているもんで。

作者が友人へとの疑問をぶつけた途端……笑顔で蹴られたのを覚えています。机が浮きましたね、あれは。恐かったです。

さて、今回のような閑話はよくあります。

基本的には与太話というか無駄話というか……番外編が大好きな作者なもので……。本編はどうでもいいとか、そんなこと思ってませんけど。

というか、彩桜学園というよりも、単に陽の身の回りの話になってますね、これ……。

学園関係ない……。

と、そんなことは言わせませんよ。

彩桜学園だっていろいろなイベントの場であり、生活の場であり、出合いの場なのですから！

これから、陽に待ち受ける学園生活うんめいがどんなものか、乞うご期待！

感想や評価など、どしどし受け付けております。

キャラが全然出ていないのにすいません……。

とにかくよろしくです！

3話・ワンピース

春休み中に登校などという意味のわからん補習に付き合わされた拳句、昼で放課という放任主義にいい加減腹立たしく感じた今日の頃。この瞬間を持って、俺こと竜崎陽は、教育委員会及び彩桜学園職員連中に本格的な殺意を覚えたことを大々的に宣言致します。

合戦じゃ。

乱戦じゃ。

襲撃じゃ。

闇討ちじゃ。

と、3話目でいきなり「彩桜学園の非日常的な日々」へとタイトルが変わる覚悟を決めた俺だったが、そこはそれ、賢や智里になだめられて、とりあえず俺たちは昼食を共にとることにした。

いや、確認しておくが、俺は短気ではない。

そりゃ一時期短気な時もあったよ。

人間だし、反抗期は迎えるものだ。

それも、俺としては短い方だったけどな。

短い短気。

短期だったな。

それは置いておく。無駄話だから。

閑話休題と言ったつけか（これ自体が無駄話）。

さて、俺と双子の兄である賢、幼馴染の智里はファミレスに向かっていた。

道中、こんな話で盛り上がる。

俺たち兄弟の間で歩いていた智里が話しかけてきた。

「そっいえばさ、陽は料理作ってるんだよね？」

「お前と違ってな」

殴られた。

あいつち
相槌を間違えたらしい。

中指を少し立てていたらしい。先端がこめかみにヒット。目の前に火花が散った。

そんな局地を狙うな！

暗殺拳法の使い手かお前！

どこの世界に幼馴染を昏倒させるやつがいるんだよ！

「つつー……まあ、作ってるよ……」

痛みに耐えながら、俺は相槌を打ち直した。

クリーンヒットした瞬間には「ぐえっ！」と言っちゃったけど。

耐えきれなかったし、実際。

叫びたかった。

俺の外傷などを気にする風でもなく、智里は続けた。

「でもさ、二人ともいつもパンじゃない？ 昼ごはん。だったらさ、陽がお弁当でも作ってくればいいじゃない、賢の分まで」

「えー、やだよー。朝起きれねえし、面倒だし」

やるべきことは母親じみているのに、それを面倒だからと駄々っ子さながらに断る高校生、それが竜崎陽だ。

別に己を恥じてなどいない。

俺が恥じているのは料理のできない賢である。

「その言い方は酷いよ、陽」

「だから、毎回毎回お前は俺の頭の中を覗くな。プライバシーの侵害で訴えるぞ」

双子だからって脳内まで共有してねえぞ。

「でもさ……」

智里は話をし直す。

「実際、いつもよりちよっぴり早起きすればいいだけの話じゃない。お弁当のおかず自体は前の晩から下準備しておくだとかさ」

「お前な、自分で弁当を作ってもいなくせに好き勝手言うなよ」

「う……」

「大体、お前だって早起きできないだろ？ ずっと前にお泊まり会的なことをして、一番寝てたのはお前だろうに」

「うう……」

「それに、お前はあのお母さんの愛情こもった手作り弁当で満足かもだけどよ、俺は自分の料理なわけだろ？　気持ちの入りようが変わるだろうが」

「でも、僕の分も作ってくれば、それはそれで美味しくできるんじゃない？」

「そうじゃなくてな、賢。俺は、誰かに作ってもらった弁当が食べたいだけだよ。賢は俺よりも早起きなんだし、賢が料理を作れば申し分ないんだけどな」

「うう……」

賢も智里も同じような表情をして俯いてしまった。

料理ができると言っても、さすがにそこは主婦との違い。日々の生活をおろそかにしている以上、料理の腕がたっても家事の方がたない。家事を優先すると料理が落ちる。

結果的には総合力をつけなければ、宝の持ち腐れ。損するだけなのである。

まあ、料理ができると言うだけでここまで優位に立てるのだから、それはそれで得してるんだけどな。

智里の家は、最近引っ越したのだ。

まあ最近と言っても、ここ一年前くらいのことだけど。

俺たちが彩桜学園に入学することを告げた年の春休み真っ只中。つまりはちょうど一年前くらいだ。彩桜学園に近いからなのか何なのか、家族ごと、俺たちが住んでいるアパートの近くに住居を移したのだった。

つまりその家族、娘の登下校を楽しむためだけに、わざわざ移動するパワフル家族なのだ。

どんな移民族だあんなら。

水を求めて大群をなす象を見習え。

生命の為でもなく、同族の為でもない。

たかだか娘の欲一つで定住地を定めるな。

不動産屋になんて交渉したんだ。過保護すぎんぞご両親。
とまあ、そんな感じ。

ちなみに智里の家は両親との三人暮らし。兄弟姉妹はいないらしい。

いたらわかるか。幼馴染だし。

智里のお昼はいつも、母親に作ってもらった愛情弁当らしい。しかもその愛情は半端じゃないらしい。基本肉食の智里の為に、弁当箱の上段には、生姜焼きをご飯の上に乗せていた。中段には、ウィンナー、焼き鳥、レバーの焼き肉など……。下段には何かといえは……。そこには、ケンタッキーもビックリの特大ピースやらクリスピーやらがぎゅうぎゅう詰めになっていた。

……………。

素直にひくよ、あれ。

油でデロデロだった。

火つけるとよく燃えそう。

火元があるはずのない教室からボヤ。

新聞にはなんて載るだろうな。

まあ、それはいい。思い出すだけで胃がもたれる。胸焼けする。

胸が燃焼しそうだ。

俺たち三人がそこそこ大きい広場を通ろうとすると、

「あれ？　おい！　陽兄ちゃん！」

遠く前方の方から声がする。

幼い、やけに甲高い声だった。

明らかに、女の子、みたいな。

ぶっちゃければ幼女である。

しかし、どこにもそんな姿が見当たらない。聞き覚えのある声だったが、見覚えのある姿が確認できない。

よく見ると、広場の中心にある噴水の奥から手を振っている小さい影が見える。

上からすっぽりかぶった感じの、明らかに楽そうなお白いふわふわ

ワンピースに包まれたシルエット。大人サイズを買ってしまったのか、膝下まで隠れてしまっている。

しっとりとした黒い髪だ。幼い体型がいまっぴか、つやっぱいというよりも輝いているように光っている髪だった。黒光りまでいくのか？ これは。

……わかりやすい。

春先でまだまだ寒さが引けていないというのにもかかわらずのワンピース愛好家、といえば俺の中では一人しか浮かんでこなかった。その少女は、てけてけと広場の噴水周辺をかけて来て、俺たちの前へと現れた。

遠くからだ気づかなかったが、どうやら防寒対策のようで、真っ白なワンピースの上に更に白い上着を羽織っているようだった。袖はそこまで長くなくとも、幾分か暖かそうだ。

ワンピースの少女は、俺へと話しかけてきた。

「陽兄ちゃん、ひどいよお。せつかくメールしたのに返してくれないだもん……」

おそらくは、賢が焼きそばの麺をぶちまかした時のことだろう。

「悪い悪い。あの時は、なんつーか……まあ、立て込んでな」

俺たちの目の前にいる少女の名前は、姫宮彩。ひめみや さい

俺よりも一つ年下で、もう一人の幼馴染だ。

まん丸くてくりくりした目と、これまた丸っこい顔立ちから、いつまでも幼い感じが抜けない。低い背も手伝ってか、まだ小学生くらいの感覚に陥っている自分がいた。

しかも、ワンピース愛好家のくせに日焼けをしないものだから、真っ白なワンピースを着て地肌も白い。まるでバレリーナのようなファッションになってしまっている。

ま、小さいから可愛いくらいだけだな。

「ところで彩、お前こんなとこで何してんだ？」

「お散歩だよ、陽兄ちゃん」

お散歩って……また随分と暢気なやつだなこいつは。幼稚園児み

たいな理由でお外に出るのか、今の中三は。

「私はもう高校生だよお」

彩は唇を尖らせながらそう言った。

「いや、まだ春休みだし。今のお前は、中学生でも高校生でもない中途半端な時期にいるやつだよ」

「もう。陽兄ちゃんってばいつも私を子供扱いするう……」

彩は頬を膨らませながらそう言った。

もうそこら辺の動作から既に子供だ。

「大体、兄ちゃん兄ちゃん言っつな。お前は俺の妹じゃねえだろうが」
これはいつも言っている台詞だ。

幼馴染とはいえ、小学校でもこいつとは遊んでいた。「年上の人のことは敬語で呼びましょう」と先生からでも言われたのだろう。それでついた呼び名が「陽兄ちゃん」だ。

こいつの敬称の中には「兄ちゃん」という項目があるのだろうか？
ちなみに賢のことを「賢兄ちゃん」とは呼んでも、智里のことを「智里姉ちゃん」とは呼ばない。そのことに関して、初めは肩をガツクリを落としていた智里だったが、年を重ねることに、それも変わってきた。

俺も同じく変わってきたのだ。

今さら「兄ちゃんとは呼ぶな」と言い始めたのも、この年になると恥ずかしいからである。しかも、高校生になってこんな呼び方で呼ばれてみる。次の日からのあだ名が間違いなく「兄ちゃん」になっちまう。

そりゃそうだ。

実の妹でもないやつにそんな風に呼ばせてるなんて思われたら、身の破滅だ。

ここで竜崎と姫宮の一線くらい引いておかないと。

「でも、じゃあ……なんて呼べばいいの？」

彩は困惑した風に訊いてくる。

うーん。

それはそれで悩むな。

俺としては、別に下の名前で呼び捨てにしてくれても構わないんだが。

「あだ名なんてどう？」

「あだ名？」

急に割り込んできた智里に、俺は尋ね返した。

そうか、「兄ちゃん」をあだ名にしたくないのだったら、あらかじめ気に入ったあだ名で呼ばせてしまえばいいのか。それはいいアイデアだ。

「そうだな……。でも、あだ名ってどんなのだ？」

悩んで智里に返すと、智里も悩み始めた。

「うーん。『竜崎陽』からとるのか……」

「別に名前からとるって決まってるわけじゃあないと思うけどな……」

……

賢の控えめなつつこみが入ったところで、智里はぽんと手を叩いて、

「ザキ、とかどう？」

「ドラクエの呪文みたいな名前にしてんじゃねえ！」

相手を即死させちゃう呪文を名前にするな！

そんな呼ばれ方されたら俺が即死しちゃうわ！

「いいじゃない。この際、ザラキーマくらいにした方が」

「お前は鬼か！？」

どこまでもザキ系の呪文を繰り返すな！

ドラクエ？のクリフトかお前は。

「で、結局どうすんのよ。私は『ザキ』でいいと思うけど」

「お前、本気で俺を殺したいらしいな」

しかも、即死させるほどの恨みを持っているのか。用心しないと襲撃されるかも。

「しかも、それじゃあ賢と俺の区別がつかないだろ」

「確かに、僕だけ兄ちゃんになっちゃうよ」

だったら兄ちゃんって呼ばれたくない、くらいの意見は言えよ、実兄。

「そつだ！」

俺たちが議論していると、今度は彩がぽんと手を叩いた。

「ちゃんと区別がつくだろうな？」

俺が確認すると彩は、

「うん！ 簡単だし、これなら納得してくれるんじゃないかな」

まあ、これだけ自信満々に言えることだからいいか。

そう言つて答えを促した。

「陽ちゃん！」

……………。

あれえ？

そこかで聞いたことある気がする…………。

まあ、いいか…………。

高校生のくせに、年下の少女からちゃん付けで呼ばれる男子が登場した。

しかも、いつぺんに2人もだ。

俺たち兄弟が、年上としての面目を失った瞬間である…………。

3話・ワンピース（後書き）

どうも、休日更新を決め込んでいるNOTEです。

いや、寒いです。

キーボードを打っている手が凍りそうなほど。

もとの冷え症もあるんですけど……一つの疑問があります。果たして今の季節はいつだ？

季節感全く無視の我が作品から言えたことではないのですが、そんな感じです。紅葉が見ごろというニユーは流れていますか？

私はあまり情報番組を見ないので知りません。誰か教えてください。

いや、ブログみたいになつてすいません。

さて、今回は出てきましたね、新キャラ。

なんか……登場の仕方がゆるいんです。大して大事でもないみたいな印象を与えなければいいのですが……。

姫宮彩。

読み方が面倒な彼女ですが、後に大変なインパクトを与えてくれると思うので、そこはまあいいとしましょう。

後書きでの扱いもさほど大きくしない方向で。

皆さんの感想や意見や評価なんかを随時募集しておりますので、是非、というかは是非でもよろしく願います。

閑話・実家

春休みも中期に差し掛かってきた頃。

厳しい冬を乗り越え、さなぎは蝶になり、種は芽吹き、命がようやくと活動の幅を広げるこの季節。

春らしいうらかな陽気がやっとやってきたのだった。

俺と賢は、活動の場を広げ、この春期休業を利用して実家に帰っていた。

さすがにご存知だとは思うが、俺と賢は現在アパート住まいだ。

2人暮らしというか、2人で1人暮らしみたいなところ。

アパートにもなかなか年季が入っており、部屋の側面の隅っこでは壁紙が剥がれていたり、気持ちよく寝ている横を平気でネズミが闊歩していたり、しまいには風呂の壁からはキノコが自生を始めていたり……。

ほんと、改めて考えるとすごいな、あそこ。

1年前から住んでいるのだが……。

よく1年も我慢できていたものだ。

俺たちも十分凄いのかもしれない。

夏はやばかったな。

普通の住宅街にあるというのに、あの異様な……妖気でも放っている感じ。

お化け屋敷とか言われて。

夜な夜などこかの中学生が『肝試し』と称しては周囲を徘徊してたな。

俺も俺で。

俺たちの部屋の前を通りかかった中学生どもを驚かそうと、いきなり玄関の扉を開けて出て行ってやった。

あの逃げ足は最高だった。

脱兎のごとく、蜘蛛の子を散らすように走り去っていったからな。ウサギなんだかクモなんだか……。

でも、あの悲痛な叫び声は心に残りました。

確か翌日の新聞の端っこに載ってた気がする。

『中学生絶叫「お化けに襲われた」』

とかなんとか……。

適当なこと言ってくれるよな、あのガキども。

とにかく、そんなアパートだ。

そこで漫画家でも目指すなら、きっと将来は有望だろうな。

話を戻す。

実家（実家という響きがお気に入りに）に帰ってきた俺たちは、とにかくぐうたらな生活をしていた。

ごろ寝したり、寝転がったり、寝そべったり……寝てはいない、ただひたすら床とお友達なだけだ。

双子の兄の生活スペースは心配はしなくてもいい。

まあ、2人兄弟ということで、部屋は別々なのだ。

俺としても、本当は一緒に部屋なんて嫌なのだ。実家でもアパートでも。

そりゃだって、自分の自由なスペースがないとさあ……嫌じゃん？ 束縛とかではないにしても、やっぱり窮屈というか。

でも、金銭的な面でもきついということで、ボロアパートの部屋には妥協することにした。

ということで、春休みの勉強中。

どこがどう「ということ」で「なのか」と言うと、別に関係ない。

俺の話に脈絡があるとか考えちゃいけないぜ。

あくまで俺の視点での物事なんだから。

見落としてる点があれば、勘違いしている点だってある。

推理ものでよくある手法だな。

だからって、俺が推理とか面倒なことをするなどと思われても挨拶に困る。

頭は良くない。

だから勉強中なのだ。

春休みに課題を出すとかあり得ねえ、あの教師ども。

そんなことを言っている場合ではない。

確かに、俺のようなバカタイプの主人公は課題なんてものは最終日に徹夜、みたいなのが定石だろう。

しかし、俺は期待を裏切るバカだ。

最終日まで課題が残っている方があり得ねえ。そんなものは中学生で卒業だ。

賢なんて、小学１年生の時だって初めの３日ででかしたものだ。そして、そのおりこうさん伝説は健在だ。今回も、もう終わっているらしい。そのためか、毎日毎日「暇だ暇だあゝ」と呻^{うめ}いている。賢いのかバカなのか分からない。

だからだろうか。

部屋が分かれているのにもかかわらず、賢は俺の部屋に来ている。俺のベッドに座って小説を読んでいた。

「なあ、賢」

「ん。なに？」

「お前さ、それ、なに読んでんの？」

「ああ、これ？ 『人間失格』」

「あれ？ 前に読んでなかったっけ？ それ」

「あれは集英社のだよ。こっちは角川文庫」

「……………なにが違うんだ？」

「集英社のは小畑健さんが表紙を書き下ろした新装版だよ」

「あの『DEATH NOTE』で有名な？」

「そう」

「ふうん。で、それは？」

「ああ、角川文庫のも新装版なんだけど、表紙は絵じゃなくて写真だよ」

そう言って、賢は手にしている小説の表紙を俺の方に向けた。

「こつちの方は、松山ケンイチさんが表紙に出ているんだよ」

「そうだな。ってか、何故に『DEATH NOTE』の漫画対映画みたいになってんの……？」

「実写映画版のし役こと松山ケンイチさんは、著者の太宰治と出身が同じなんだってさ」

「なんたる偶然なんだろうな」

「角川文庫の場合、人間失格は映画にもなるよ」

「繋がりが多いな」

「映画版の主人公は生田斗真さんだよ」

「まったく関係ねえ……」

「まあ、人気があるからいいんじゃないかな？」

「忙しそうだな、生田斗真。学生役から……今度は廃人か」

「イケメンはつらいよ」

「そんな映画は一切放映されない。させない」

悲しくなるわ、そんなタイトル。

日本中の男性に謝れ、製作者。

ひとしきりの会話を終えたところで、俺は課題から目を離す。

そして、手を組んで大きく伸びをする。背もたれに背中をもたれかけた。

この椅子は俺のお気に入りだ。

座る部分はふかふかだし、背もたれもふかふかで、スプリングがついていて俺の体を頼もしく支えてくれる。回転できて、車輪がついているからすいすい移動できる。

それになによりも、高さを調整できるのがいいのだ。

座る部分の裏にあるレバーをくいと傾けると、自動で上に上がっていくやつ。だが、自分の体重をかけることで目線を下げられる。タワーハッカー！

とか言って遊べるやつ。

……。

ああやってますよ。きゃっきゃ言いながらやってますよ。バカだ

からね、俺。

これをアパートに持って行けたらどれほどいいか……。
アパートへの引越しの件、一番悔やまれたところだ。

このタワーハッカーができないんだぞ！ 耐えられねえよ！

とか、本気で思ってたからな。

いや、今も思ってるけど……。

やりたくてやりたくてうずうずしてるんだぞ。

でもなー。賢がいるしなー。

さすがに身内の前でこんな幼稚なことはできねえよ。確実に引かれるじゃねえか。

距離置いて一歩引かれるどころか、一線を引かれるかもしれない。
でもなー。衝動は抑えられねーよなー。

はあ……。

そうしてより一層リクライニングしたその瞬間――

バキッ！

不吉な音が部屋中に鳴り響き、俺は宙へと投げ出された。

それは気持ちのいいようなフライト。

それは夢心地のような空の旅だった。

しかしその浮遊感もそれまで。

空気の中を泳いだ俺の体は、床にしたたかぶつけられる結果に至った。背中を強く打ち、天変地異を起こした視界の中でゆっくりとむっくりと起き上がってみる。

「つてて……。ああ！ 俺の相棒！」

立ち上がって見てみると、そこには座る部分が見事に失われた俺の遊び相手――お気に入りの椅子の姿があった。

椅子の脚の部分には、座る部分がなくなった椅子の支柱パイプが無残にもその形を曝さらしていた。まるで頭を失ったC-3POのようにおたおたしているようにも見える。

それにしても、

「やつちまったああ！ ああ、どうしよう！ これじゃあもうタワ

「ハッカーができねえよ！」

「陽、さすがにその歳でやってるのはまずいと思うよ、あれは……」
見られてた！？

恥ずかしすぎて他人になんて一切漏らせない俺の秘密の遊びを、
よりにもよって身内に！？

「そ、そんな……賢、根も葉も根拠もない事実を突き付けるなんて、
いけねえなあ……」

「だってさっき、『タワーハッカーができない』って自分で言っ
たじゃないか」

そうだった！

くそう。もう……バカ！

俺のバカ！

「とにかく。俺はこれから、何を楽しみに生きていけばいいんだ……」

……

「あれが最上の遊びだと思ってるのなら、陽、悲しすぎるよそれは」
「いや！ お前にあのロマンがわかってたまるか！」

「ロマンも何も、子供の頃からやってるじゃないか。子供のロマン
なんか忘れちゃったよ……」

「受け継がれる意志……時代のうねり、人の夢、これらは決して変
わることはないものだ……」

ゴルド・ロジャー

「海賊王みたいなことを言ってもダメだよ。しかもそれ、アニメ版
のオーブニングの一節だから。覚えてる人間なんてごく少数だよ」
くそ。

同じような生活してると知ってることまで共有しちゃってるな……

……

改めて知った。

その時、俺の部屋の扉からノックが聞こえた。

「どうしたの二人とも、そんなに大きな声出して……」

扉を開けて入ってきたのは、俺の母さんだった。

俺の母さんでもあり、賢の母さんでもある。

息子の俺が言うのもなんだが、結構図太い神経の持ち主。肝っ玉母ちゃん、みたいな感じた。

母さんは部屋の異変を察知し、その異変の中心へと真っ先に気がついた。

その一点を見つめたと思うと、呆れたように溜息を吐く。

「まあた壊したの？ 本当にこの子はなんでもすぐに壊しちゃうんだから」

「ちよつと待て母さん。俺が頻繁に物を壊すようなわんぱく少年に仕立て上げるな」

「こないだシュウジくんのおもちや壊したばかりじゃない」

「いつの話だ！？ もう幼稚園の同級生の話なんて忘れちまえ！」
なんて記憶力だ！

「でも確かに、シュウジくんも言ってたわね。『陽君に安易な気持ちで貸した僕が悪いんですから、陽君を叱責しないでください』って……」

「自分だけ大人ぶってんじゃねえよあいつ！」

しかも叱責どころか安易なんて言葉も知らないだろ、普通。なんて秀才なんだ。

「『秀才』って書いて『シュウジ』って読ませるくらいなんだから」
「親と役所は際限なくバカだった！」

親で将来の自分に危機感を覚えたかシュウジ……。

ともかく。

椅子が壊れたことは謝ったとして、これからどうしようこれ……。

「そうよねえ。このままじゃ、タワーハッカーができないものねえ」

「母さんも見てたのか！？ やばい恥ずかしい！ お嬢に行けない！」

「私としては、こんな息子には、早いとどこかに貰われてほしいところだけ」

「責任放棄するな！」

「ウチは放任主義でしょ？」

それは認めるけど……。

大事な高校生の息子にアパート生活させることが、何よりの証拠だ。

「でも、仕方ないわね……。勉強をしていたようだし。明日ちょうどホームセンターに行く予定があったから、その時にでも陽にあつた物を買ってくるようにするわ」

「助かるよ、母さん……」

やっぱり根本は優しいんだよな、ウチの親は。

「良かったね、陽」

「ああ。賢！」

「ただし、この分はお小遣いから引いておくからね……？」

「……………」

前言撤回。

やっぱり意地悪……。

そして、次の日。

外に出て夕方ごろに帰ってくると、そこには真新しい椅子が買つてあつた。

嬉しくてしばらくは俯瞰から眺め、あまり座ろうとはしなかった。寝る前。賢に触発された俺は、小説でも読もうと新しい椅子に座つたところ――

「……………」

高さ調節の範囲が異常に狭いことに気づいた俺は、ショックのあまりベッドに入ってしまった。次の朝、俺の枕が一夜漬けにでもされたかのようにぐっしりと濡れていたことは、言うまでもない。

閑話・実家（後書き）

どうも。

話の本筋を全く書いていない作者・NOTEです。

今回も閑話ということで、番外編のようなものをお送りしたわけですが……。

そもそも、ほとんど話を進めていないのに番外編も何もあるかボケエ！ と、自分で自分にビンタを放っている今日この頃……。私はどこまでのんびりで気軽な人間なのでしょうか。

そんな風に上の空になりながら、今日もこうしてタワーハッカーをしている始末。

それにしても、話を進める上で、この話は関係ないと言うとそうでもないですよ（飛ばして読んでもらってもなんにも影響ないのですがね）。

こうして彼らの母親も紹介することができたわけですし、結果的には主人公の変人ぶりをよく知っていただくいい機会になったのではないかと感じます（結果論）。さて、彩桜高校の話も徐々に出していきたいと思います。

皆さん、感想や評価などありましたらお待ちしております。

こんな無責任作者に、これから末長いお付き合いをよろしくです。

4話・伸長

今一度、この四人の相互関係、相関関係をはっきり明示しておく。

篠森智里しのもり ちりは、俺こと竜崎陽りゅうさき へいの幼馴染である。

俺の幼馴染であるということは、俺の双子の兄——竜崎賢りゅうさき けんの幼馴染でもあるということだ。親がもともと知り合いで、家がご近所さんだったというご縁もあり、毎日のように遊び暮らしたように感じる。

彼女のことを今ここではっきりとしておく必要性も、あまりないことだと思う。

特殊な女の子ばかりが出揃っているこのご時世で（活字上とはいえ）、彼女のような女の子が出るような幕は、はっきり言って望まれてはいないのだと思う。

篠森智里は、簡単に処理してしまうと、普通の女の子だ。

ちよつとだけ男勝りな面がある、今ではめつきり珍しくもなんともなくなつた人種である。

しかし、どこまで男勝りかと言われると、それはそれで悩みどころだ。中途半端な感じなのだ。

喧嘩が強いというわけでなく、強引で傍若無人な態度をとるといっわけでもない。

今時どこにでもいる口調の、どこにでもいる風貌の、どこにでもいる女子高生だ。

俺と同じクラスに所属中。

1年C組。

だったのだが。

春休み中ということで、無事に進級できていられれば、今は1年生でも2年生でもない、ただの私立彩桜学園生徒、でしかないはず

だ。

進級できていればの話。

なにせ俺と同じ程度だから。

中の中ぐらい。

いや、あいつは上の下ぐらいか。

なんか羨ましい。

……話を進める。

彼女はむしろ普通だ。

しかし、普通じゃないのはむしろ彼女の周りの人間と言ってもいい。

具体的に言うと、彼女の家族だ。

核家族で、今は両親と共に住んでいる。

前にも示したと思うが、彼女の両親のやることはどでかい。

スケールも、規模も。

それに大胆なのだ。

娘の登校を楽にさせようと家を移動したり、肉が好物の娘のためにデロデロの肉弁当をこしらえたり、もう親バカのレベルをとうに超えている。

娘としては、そんな親の愛を複雑にしか受け止められないわけだ。
……。

愛情の裏返し。

恨んだり憎んだりはしていないものの、はっきり言って迷惑なだろう。

180度、愛情の注ぎ方が間違っている。

そんな親の下で育ったが故の不幸か、彼女ほどの普通娘が生まれた。

俺たちの相関と言ったのだが、なんだか単なる人物紹介のようになっ

てしまっているが、続ける。
姫宮彩。

一言で言つなれば、ロリ少女。

ロリな少女。

救いようもないくらい幼い。

幼女だ。

幼児か？

幼稚だ。

こども。

そんな感じ。

昔からの幼馴染だ。

俺と賢、智里といつも遊んでいた。

彼女の明るい性格からか、生まれ持ったの性質か、彼女には友人が多い。

中心的存在というわけでも、リーダーシップが取れるというわけでもない。

むしろ、その手のタイプに可愛がられる感じだ。

そんな立ち位置だから、彼女自身は同年代とはあまりつるまない。俺たちと遊んでいた。

年が一つ違うだけだ。明確なジェネレーションギャップなんて存在しない。

言葉遣い^{づか}が子供っぽいせいもあるのか、数年前から成長をしている感覚がない。

当然、相対的に俺も成長しているため、単に気づかないだけだと思うのだが。いや、そうであってほしい。兄的存在としては。

兄的存在。

そういえば、前から「兄ちゃん」と呼ばれていたのはなぜだったっけ？

まあ、その話はいいか。

結局、そんなところだ。

この女子二人には明確な差がありすぎる。

智里は男勝りな感じ。

彩は幼女のような感じ。

智里は引つ張る側。

彩はついていく側。

智里はお節介。

彩は甘えん坊。

そんな感じだ。

昼時。

俺たち高校生三人組は、公園で偶然出会ったワンピースの少女――
彩を巻き込んだの昼食へと洒落込んだ。

と言つても、まだファミレスに着いたばかりなのだが。

窓際の席。

俺と彩、賢と智里ということで向かい合う。

別に深い意味はない。

幼い幼馴染という小動物になつかれてしまったお兄ちゃんとして
は、隣にいるのが義務のようになってしまっているのだ。

そういうことで、理解のある2人は向こう側へ、というわけだ。

まあいいか。

「陽ちゃん」

隣から声がした。

彩だ。

「私、お金持ってきてないけど……」

「まあ、仕方ない。俺がおこつてやるよ」

「ほんとあ？」

「ああ。誘った言いだしっぺは俺だし」

「やたー」

「ただし、今回だけだぞ」

俺が釘を刺すと、賢が急に割り込んできた。

「血の繋がりがある僕にでさえ、そんなに優しくしないのに……」

「血の繋がりがあからこそ、だろ？ 普通家族はそんなもんだ。

智里の家が特殊なんだよ」

「悪かったわね。いまだき、男兄弟二人揃って同じアパートの同じ部屋よりよっぽどましでしょ」

智里の悪態に、俺はおどけて答える。

「なんなら一緒に住むか？」

「お・こ・と・わ・り！」

強い口調を浴びたからか、賢がしょんぼりと俯いた。

「きつと楽しいのに……」

「賢。お前な、いろいろ問題とか考えないのか……？」

「なにが？ 陽だつてむさいとかボヤいてたじゃないか」

「ここで女子を本気で巻き込もうとするなよ……」

どこまでも純粹で誇れる兄の賢くんだった。

いつまでも雑談タイムを取っているわけにもいかず、ランチタイムへと入ることにした。

定員さんからの営業的挨拶に、メニューを広げながら悩みこむ4人。テーブルいっぱいに広がるメニューを、我が物顔でほぼ我が物として独占しているのが彩だ。一番年下（と言っても一つ違い）が、こういうときは優先されるのだろう。

「んじゃあ、えとえとね……和風ハンバーグセットのご飯味噌汁バージョンと、クリームソーダと、チョコバナラのスパイラルアイスと、抹茶パフェと、アップルパイと——」

彩がまだまだ口を動かす中、定員さんが手持ちの品物を入力する機械を早打ちする中、俺は彩の口と定員さんの腕の両方をふさいだ。「おいおい彩ちゃん。そりやどいう嫌がらせかな？ それとも新手のジョークかな？ この優しい陽ちゃんが受け持つてあげることを利用して、どこまで自分の食欲を満たそうとしているんだよ？」

「え？ でも、これは陽ちゃんの分も含んであるしい……」

「そんな苦しい言い訳があるか！」

俺にはデザートだらけの甘ったるい昼食しか与えられないわけか？ まだ獄中の方が栄養取れるよ。

「彩、せめてデザートは一つにしてくれ。ドリンクバーくらいは取

ってやるから……」

「はあい……」

明らかに落ち込んだ表情で、彩がうつむきながらうなずく。本当に図々しいやつだな。

ふと見ると、目の前の2人はやけにこちらをにやにやと見ていた。俺が訝しげな表情をしていたのだろう。説明するように賢は、

「いやね、陽はいいお兄さんになるだろうなあって……」

「いや、今からじゃさすがに無理だろ」

というか、お前がすっかりしてくれよお兄ちゃん……。

食事。

やっと本来の目的へと辿りつけた俺たちだった。

俺と賢はラーメン、彩はおいしそうにハンバーグを頬張っている。智里はマーボー定食を食べているらしかった。

というか、昼からハンバーグはどうなのよ実際。

これだけ食い意地はついていて、なぜここまで身体的成長が見られないのかが不思議で、その上不安で仕方がない。

本人曰く、「太らないだけまだマシ」らしいが……。

思い切って智里に訊いてみる。いきなりの話題提示なので、内容を遠回せば俺の真意が彩に伝わることもないだろう。

「なあ、智里。女子ってさあ、体形維持が何よりも優先されるわけ？」

「それ、私が太つてるとでも言いたいのか？」

急に变な方向に勘違いされてしまった。

「陽ちゃんひどい。女の子にそんなこと言うなんて」

「そつだよ、陽。智里ちゃんって言ったって女の子なんだから、その言い方は失礼だよ」

彩はいいとして、賢は言い回しのおかげで智里に頬を引っ張られている。口は災いのもとだな……。口がなければ災いどころかなにも発展しないのも事実だけど。

「違う。俺が言いたいのは、上下の肉付きよりも左右の肉付きの方

がそんなに重要なのか、ってことだ」

「そりゃそうでしょ。確かに、背の高いモデル体形は羨ましいけど、あそこまで背が高くなってもいいんじゃないかとも思うわよ。それに、女の子はヒールだって履くし、身長の方はあまり気にしないものだよ」

なるほど。

モデルの人なんかは、背が高い上にヒール履くからどこまでも大きくなっちゃうもんな。しかも、その上で理想の男性を挙げると、「私より背が高い人——」とか言い出すから困るし（俺が困ることもないけど）。

「あれ？」

俺は変な違和感に気付く。

「でも、そうなるとおかしくないか？」

「何が？」

マーボーをすくう手を止めて、智里が耳を傾ける。

「モデルの人は、みんなにファッションのポイントだったり商品である服の販売促進だったりを担ってるわけだろ？」

「そうだけど？」

「でもさ、女の子は別にあそこまでの慎重になりたいわけじゃない。ファッションって、体型もそうだけど、服でサイズが変わる方が大きい気もするよな？ だったら、モデル稼業を営んでる人たちの仕事は本末転倒なんじゃないか？」

俺の一言に説得力があつたのか、智里はうーん……、と首を傾げる。

「でもさ、モデル専門で活動してる人もいるけど、あの人たちもタレントと大差ないんじゃないかな？」

智里の意見。

「生まれ持ったものを才能って言うならさ、自分の体なんか立派な才能^{タレント}なわけじゃない？ だったらさ、それを活かした職業に就くのなんかタレントと呼べるものだよ」

「うーん、そうかあ……」

そんなこと言うのは、ここだけにしといた方がいいのかもな。変な人に聞かれてもしたら、「じゃあ体を使ったご奉仕もタレントかい？」なんて言われそうな会話だ。そこまで怪しいセンテンスなんか一つもなかったけど。

「うーん……」

智里とだべっていると、横から唸り声がするのに気がついた。見てみると、チョコパフェを一気にたいらげた彩が腕を組んで目を閉じていた。ハンバーグは半分冷めてしまっている。

「どうしたの？ そんなに思い詰めたようにして……」

まだ頬を赤くしている賢が、彩に問うた。

賢は他人の様子に対してあまり感化される方ではないが、知人、特に幼馴染が悩んでいるようにしているのを放っておける人間ではない。

彩は、腕組みを続けて、

「いや、私はどうやってたら理想的な体形になれるのかなあ……」

「理想的って……？」

賢が問い続けると彩はしばし沈黙を置いて……

「押切もえちゃん」

その瞬間、沈黙が走った。

まるでこのテーブル周辺だけが現実世界と切り離されたかのような、そんな隔絶された疎外感。

こいつは……そんな大物モデルに理想を定めていたのか……。

「やっぱねー、エビちゃんはよきライバルとして見るべきだよね。」

二人の女王が業界に名を馳せているけど、一歩だけくらいの高い存在。そこに追いつこうともがく方が、かつこいいじゃない？」

「押切もえちゃんはともかく、お前までそんなに高い存在をライバルに設定するんじゃないねえ」

彩の身長を案じての会話だったが、無用な気遣いどころかどこまでも疎遠の話題だった。

4話・伸長（後書き）

どうも、休日更新のNOTEです。

私自身、身長はあまり高くない方なのですが、コンプレックスとまで感じているかどうかと訊かれれば、まあ気にしない方向の人物です。

才能やら努力やら、私は常に現実逃避なもんですから。彼ら彼女らには頑張ってほしいのです。

さて、物語中の休日モードもそろそろ終わりたいと考えている今日この頃なのですが、なかなかうまいこと進みませんね。

かつて書いてきた作品は、まあまあうまいこと進むようだったのですが……。

やっぱり、ぶっちゃけるとストーリーを何も考えないままに書いているのがいけないのでしょうね……ははは。

しかし、次回ではいいよ彩桜高校へと入りたいと思います。

今までの長いプロローグとでも思ってください。

ま、確実なお約束はできませんけど、こんな私の趣味に付き合っていただければ幸いです。

評価や簡素などをいただければなお幸福です。

どうぞよろしくです。

5話・入学式の朝

俺は走っていた。

自宅のアパートから学校へと繋がる坂道。

それほどの勾配でもないが、なにせ高い位置から下りなくてはいけないもんだから、大股で走るとバランスを失う。気を抜けばずっこけてしまいそうなのだ。

「なんで新学期初日から遅刻せにやなんのだ〜！」

俺はゼエハア言いながら下層を目指す。

そんなことを叫んでいると、後ろからは俺のとは違う足音がもう一つ、忙しなく地面にぶつかっている。

振り返らんでもわかる。

賢だ。

俺の双子の兄。勉強面では頼りになる俺の分身だ。

身を分けた片割れである。

坂道の傾斜を利用して俺に追いつこうという魂胆だったのだろうか、いかんせん、運動の場合は賢に劣りが生じる。

勉強ができて運動もできるとか、神様は人間に二物も与えないんだよ。

神様を超えちゃったら困るから。

神様は競走なんてしないだろうし、遅刻など以ての外だ。大体、何に遅刻する。神様にも学校があるのだろうか。それとも重要な会議が……。

「待つてよお、陽ー」

背中に響く賢の情けない声で、無駄話へと脱線していた俺の思考回路が道を戻す。

「おい賢。お前、誰のせいでこんな目に合ってるのか分かってるか？」

「分かってるけどお……」

走りながらだというのに、賢はあまり息を乱していない。

そこは血というやつだろう。俺もそうだが、基本的に体力はある方だ。運動は運動でも、筋持久力と全身持久力は、二人とも、生まれつき優れている。

何でも、両親の学生時代、ともに長距離の陸上選手だったとか。

そして全国区でお互いを知った。

数年後、再会。

あれよあれよと結婚へ――

だったらいいね。そうだね。……と両親。

嘘かよ。

まあそれはいい。

所詮は無駄話だし。与太話だし。よたばなし

戯言で。戯れ言で。たわごと 徒言だ。あだごと

「俺はちゃんと起きたからな」

走っている方向とは逆の方向にいる人物、俺の背中についてくる賢に向けて指さした。

うつうつ、なんて呻く声うめが聞こえた。賢の場合、これが口癖かもしれない。

それはそれとして、今日は本当に散々な朝だった――

本日は我が私立彩桜学園の始業式&入学式の当日である。

こんなに大事なイベントがある日であろうとなかろうと、俺は遅刻に遅刻を重ねてしまうようなタイプだ。正確に言くと、朝、普通に起きれないでバスに乗ることにし、乗り過ごしたというオチ。

今日こそは……今年こそはと気合を入れ、朝でも気持ちよく目覚め、カーテンを開いて陽光を室内に取り入れ、久しぶりに昼食の弁当を作り、俺は学校に持っていく道具を整理していた。

と、そうそう。

賢を起こすことも忘れない。

あいつは俺と違って体内時計はしっかりしている。

一旦寝てしまったがその後、きっかり7時間後には起きられる人間なのだ。

人間じゃねえ。

まあ、どちらが便利かと言えば、「お兄ちゃん、朝だにょん」のアラームで起きられる俺の方が得な気がする。

あくまで俺の意見だけど。

俺は歯を磨きに移行しながら、横たわる賢を足蹴にする。

軽くげしげしと蹴っても起きない。

こういうときの賢は頑固だ。以前に渾身の力で頬を張ったことがあるが、むしろ笑っていたくらいだったな。

このM兄貴め。

昨日はなんだかんだで遅寝しちゃったしなあ。

責任の一端は俺にもあるし、本当は寝かせときたいんだけどな…

…。

……というわけで、ごんたけい竜崎賢起床計画。

その一。

ノイズ騒音。

俺はどこからともなく手に取った（つてか普通にそこら辺に落ちてた）風船を膨らませ、寝ている賢の耳元へと持っていく。

そして裁縫箱から取り出した裁縫針を一気に突き刺す。

瞬間、耳をつんざくような破裂音が部屋に反響した。本当に賢の耳をつんざいたかもしれない。

だって反応ないもん。

俺はそつと賢の様子を見てみると、

「うにゅむあ……焼きそば……」

朝から重てえな！

とりあえず、このぐらいでは起きないのか。

竜崎賢起床計画、その二。

ヒート
熱湯。

は可哀想だからやめるとして、俺はキッチンへと向かった。そこで手に取ったのはマグカップだ。

俺はマグカップへと熱いお茶を注ぎ（あとで美味しく戴きました）、カップの側面を賢の頬にあててみる。その熱を感じたのか否か、彼は反応を見せ始めた。

彼の眉間に皺が寄る。さすがにこれは厳しいか？

「お釈迦様、熱いです〜……」

お前はどんな夢を見とんじゃボケエ！

地獄か！？ 地獄で火炙りにでもされてんのか？

いや、地獄なら閻魔様だよな？

じゃあ何？

閻魔様どころかお釈迦様にダメ出しされることをしたのか！？

だからあれほど落ちたもの食べるなって言ったのに！

関係ないか。

それにしても起きない。

どうしたものか……。

竜崎賢起床計画。

その三は…… やっちゃおうかな……。

やらないかな……。

仕方ない、奥の手を使うか。

「おい賢、起きろよ。起きないと、もうバゴーン買ってあげないぞ？」

アバタイト
誘惑作戦。

結局のところ、人間は欲に弱いのだ。

俺の言葉が届いたのか届かずか、いや届いたのだらう、彼は答えた。

「うっ、僕はUFOが好きなんだよ……」

「おお、やっと起きたか！」

「すぴー、すぴー……」

「寝言かよ!」

おい。

マジかよ?

マジで起きてくんねえのかよ? このままじゃ遅刻だぞ!?

ああ、これじゃあ俺が早起しようと思っただけで関係ないじゃねえかよ!!

「おい! 起きろよ、賢! 頼みます! 起きてくださいませ! 賢さま!」

拝啓、両親様。

まったく、今学期も朝から元気です。

5話・入学式の朝（後書き）

入学式入ってないじゃん！

そんな感想もあるでしょう。むしろそれしかないでしょう。

その上で言いましょか。安心されても困ります。前回予告しておいて今回校内へさえ入っていない。だから次回も入るとは限りませんからねえ。

というか、すいません。

謝罪が一番ではなかったことを謝罪した上で、改めてごめんなさい。

昔ある雑誌で、作者が「もう書けません」と言って休載、果てには打ち切りにまでなつたと言います。打ち切りがないだけ、これも安心ものですがね……。

皆さんの期待を裏切ってしまったって申し訳ありません。

正直言いますと、この作品はほとんど番外編中心に考えている短編だったので、こんなことになるとは夢にしか思ってませんでしたので。

こんなマイペース作者に惑わされても構わないという寛容な読者の皆さん、満足いただけたら幸いです。

感想や評価なんかあったらもっと嬉しいので（と言っより送れるくらいに話を進めるよ）、どしどしください。

閑話・チヨコ

彩：「ねえねえねえ陽ちゃん陽ちゃん」

陽：「なんだいなんだい彩ちゃん」

彩：「私気づいちゃったんだけどねえ……」

陽：「なんだ？」

彩：「うーん……」

陽：「なんだよ、勿体ぶつて。お前から話し始めたんだろ？ さつ
と言えよ。さつと」

彩：「うん——この話つてさあ……閑話っていうか、番外編多くな
い？」

陽：「今更な質問だな……」

彩：「作者つては何考えてるんだろうね。本編だつて、まだ人物の
特徴がほとんど言っていないほど描かれてないんだよ？ なのに番
外編で……」

陽：「そこはつつこんであげるなよ。元々が、ふわつとした安直軽
率見切り発車の暴走特急みたいなもんなんだから」

彩：「そう言っちゃうと聞こえはいいけど。でも、時間という圧力
にトレインジャックされちゃった、って感じだよな」

陽：「これじゃシベリアは走れないな。水野晴郎さんもびっくりだ」

彩：「天国に繋がってるといいけどね。縁の糸」

陽：「繋がってても見てないだろうな、たぶん」

彩：「そんなことよりさあ陽ちゃん」

陽：「そんなことって……。はあ。なんだ？ 今度は」

彩：「バレンタインって、もう過ぎちゃったよね？」

陽：「ああ、今は春だからな。もう2ヶ月も前になるし、これから後10ヶ月もあるけど……なんでだ？ 急にそんな気の早い話持ってきて」

彩：「ううん。2月から気になってたんだけど、チョコについて教えてくれないかな？ ってさ」

陽：「チョコについて？ それこそふわっとした質問だな。具体的には何を知りたいんだ？」

彩：「いろいろ」

陽：「あのなあ、質問された方にとってしてみれば、そういうアバウトなのが一番無理難題なんだぞ？ 解答もできなければ証明も難しい。何について話せばいい？ 気になってることがあるんだろ？」

彩：「うん、あるけど……。一応この場合は、チョコのことを知らない

い人のためにも、まずは基礎知識を披露しておいた方がいいのかと思いますして」

陽：「お前が構成のことまで気にかける必要はないんだけど……。それに、嫌いな人ってんならともかく、チョコのことを知らない人なんているのかすら疑問なんだがな」

彩：「ちつつち。陽ちゃん、それはあまりに配慮に欠け過ぎるよ。もしかしたらチョコレートのこと、『ちよこつと冷凍』の略だと思ってる人がいるかもしれないし」

陽：「無理矢理な模範例題を示すな。チョコレートのことを知らない人がいるかもしれない事実はともかく、お前の突飛な勘違いのさせ方は世の人々への侮辱にしか聞こえん」

彩：「冗談なのにい……」

陽：「まあ、そんな悲しい顔するなよ。そうだな。チョコレートの漢字はわかるか？」

彩：「え！？　チョコに漢字なんかあるの？」

陽：「ああ。と言つても、単なる当て字だけだな。チョコレートを漢字で書くと、『貯古齡糖』って言っただぞ」

彩：「へえ。確かに、齒並びの悪い人は大変だもんね。『齡を重ねても古いものがどんどん齒に貯まる糖』ってことだよなっ！」

陽：「いや、それはまた無理矢理な上に悪いイメージしかわからない食べ物だよな。単に虫齒になる、なんてことにもなるし……」

彩：「でさでさ、私が悩んでたのは、なんで2月14日がバレンタインデーなのかなってことだよ」

陽：「ふーん。確かに、それは俺も知らないな。今まで考えたこともなかった。よし。ここは博学な賢君に訊いてみようではないか」

賢：「バレンタインデーって言うのはね、そもそもの発端はローマ帝国の時代にまで遡^{さかのぼ}るんだ。当時、青年淑女はともに生活することがなかったんだ。でも年に一度、2月14日にくじを引いて、ペアになった男女がパートナーとして翌日の祭りに参加したんだって」

陽：「ふうん。そこで過ごした男女が、大抵は結ばれたってことか？」

彩：「素敵だね……」

賢：「まあ、あくまでも一説で、諸説あるらしいんだけどね」

彩：「でも、それとチョコと何の関係があるの？」

賢：「チョコとバレンタインデーは、元々は違うものだったんだよ。いや、語弊があるね。バレンタインデーが『恋人たちの日』って呼ばれているんだけど、イギリスのあるお菓子会社が、この日にチョコレートを贈る風習を作ったんだよ」

陽：「じゃあ、それ以前まではチョコレートを贈ってたわけじゃないのか？」

賢：「そうだね。日本チョコレート・ココア協会がこの日を『チョコ

コレートの日』として定着させたんだよ」

陽：「なるほど。その日に恋人たちの間でチョコが交わされ、チョコの売れ行きが最高潮になると……。うまく作ったもんだなあ」

賢：「ま、あくまでも日本だけだね」

彩：「日本だけなの？」

賢：「日本ではチョコを、女性から男性へと渡す運命的で素敵な日になっているよね。でも、ヨーロッパなんかでは違うんだ。男女関係なく、チョコと限定せずに、花だったりケーキだったりバレンタインカードだったりなんかを贈るんだよ。あっちとしてはクリスマスみたいだね」

陽：「じゃあ、ホワイトデーは日本独特なのか？」

賢：「そうなるね。韓国にもあるけど」

彩：「じゃあ、陽ちゃんにも、日本人としてちゃんと日本の行事には参加してもらわないとね」

陽：「は？ 何の事だ？」

彩：「もう、陽ちゃんってば……。私、今年のバレンタインデーにチョコあげたのに、ちつともお返しくれないんだもん」

陽：「ちゃんとあげただろ？」

彩：「飴玉一つだったじゃん！ しかも私の嫌いなハツカ飴！ 陽

ちゃん酷いよ！」

陽：「お前は板チョコだったじゃん」

彩：「あれだってちゃんと手作りしたんだもん！　ちゃんとみんなに配ったもん！」

陽：「パッケージに「Meiji」と書かれた手作りチョコがこの世に氾濫してたまるか！　しかもお前それ、思い切り「義理チョコです」って言うてるじゃねーか！」

彩：「仕方ないじゃん。私お料理できないし……。それに、あつちやんも、れんくんも、みーちゃんも、いーくんもちゃあんとくれたもんっ」

賢：「ちなみに、ホワイトデーがある日本では、お返しが欲しいがために男性へチョコを配る女性が結構増えたんだってさ」

陽：「それみる」

彩：「……………」

陽：「本気で泣くなよ…………」

彩：「だって、双子して私をいじめるんだもん」

陽：「二人してって言え、せめて……………」

閑話・チヨコ（後書き）

ということで久し振りです、NOTEです。

旅行に行っていたもので更新が遅れてしまいました。

皆さんお忘れでなければ、私が学生だということはご存知かと思っています。そうです、修学旅行です！

京都きやつほう！

古都きやつほう！

舞妓さんきやつほう！

寺社きやつほう！

——な感じでしたよハイ。

ええ、すいません。調子乗りました。

知るか、って感じですよね。

まあでも、こうして更新再開できてなによりです。

だがしかし閑話ておい……。

6話・クラス替え　そして入学式へ

坂を降りきってちよつとした市街地に入ると、駅前たたずむ少し寂しげなカフェの店先に、見覚えのある人影が立っていた。

なんか苛立たしげにカッソカッソと靴を鳴らして、腕を組んでいる。

ありやどー見ても智里ちさとだな。

……うわあ。

般若のような形相でこつち見てる。俺たち睨まれてる。心なしか俺中心。

こちとら必死で走ってんのに。

「遅いよ！　初日から何やってんのよ」

カフェの前に到着するなり、俺は怒鳴られた。少し待って、賢も辿り着くものの、なぜか智里の怒りの対象は俺のようだ。

「まったく、また寝坊？　今日から彩あやも一緒に学校なんだから、あんまりみつともないとこ曝さらさないでよね」

「ちよつと待てよ智里。なんで俺ばかり怒るんだっ？」

俺は心外に思い、彼女へと反論する。

「今回の寝坊は俺じゃない。むしろ無関係だよ」

「はあ？　じゃあいつたい、あんた以外の誰が寝坊なんかするわけ？」

「あ、あの……」

俺と智里との間に賢けんが入る。
が。

「あのねえ、賢。いい？　こういうことは、ちやんつと言わないとダメよ？　叩いてでも起こしてやらないと、陽ようの寝坊癖は直らないんだからね」

「あ、いや、あの……そうじゃ——」

「そりやないだろ智里。俺は寝坊なんかしちゃいねえよ。今日は、

昨日遅くまで起きてた賢が――」

「嘘言わないでよ陽。賢が寝坊するなんて聞いたことないわよ。賢があまり言い出せない性格を知ってて言ってるなら、陽、あんた人間として最低だよ？」

「お、おいおい。なんだってそこまで言われなきゃいけないんだよ！ 俺は嘘なんか言っちゃいねえよ！ 賢が寝坊したのは本当だし、どこか俺は、叩いてでも起こしてた方なんだぜ？」

「ね、ねえ、ちょっと。二人とも――」

「陽が起こすなんて、それこそ聞いたことないわよ。覚えてる？ 中学校の合唱コンクール。寝坊のせいで1人遅刻したくせに、金賞を取ったって決まった時には、いつの間にかみんなと一緒に騒いでたじゃない」

「過去は過去だろ。高校に入ってもそれなりに遅刻はあるけど、今回に限っちゃ、誠心誠意違うつて言える立場だぞ！」

「だ、だから。ねえ、ちょっと――」

俺と智里の間で戸惑う賢だったが、あまりにもあんまりな智里の言い草には、俺としちゃやっぱり言っとくべきことがあった。

「お前な、智里。そうやって何でもかんでも決めつけにすると、良くないだろ！ 中学の時、お前の女友達がバレンタインのチョコ失くした時だつて、真っ先に俺を疑っただろ」

しかももらってないからだ、とか失礼な理由つきで。

「あれだつて結局、校舎内に侵入した野良猫のせいだっただろ」

「そんな細かいこと、覚えちゃいないわよ」

「あのなあ。俺はあれのせいで、信用ガタ落ちだったんだぞ！」

「あんたの信用？ そんなの、あつてないようなもんじゃない」

「ああ！ お前ついに言っちゃったなこの野郎！ 言い放ちやがったなこの野郎！」

「あ、あの……お二方――」

「「賢！」」

「は、はい――！」

俺達の息もぴったりがっちな呼びかけに対し、賢は怯えながらも答えた。

「賢！ 智里になんか言ってるよ。お前が真実を言えばこの場は収まるんだからさ！」

「賢！ 陽の言葉に丸め込まれちゃダメよ！ こうやってつけあがるんだから！」

「あ、あうあ。あわわ……」

「賢！」

「賢！」

俺と智里は、一步步賢へと歩みよる。

俺達の影に覆われる賢は、もう溢れだしそうなほどの涙を溜めていた。

「……う、うわああ〜ん！！」

賢は圧倒する俺達を突き飛ばし、学校の方へと駆け抜けていった。

「……………」

「……………」

沈黙。

俺と智里は不意に目が合い、また黙った。

「あの、さ……」

口を開いたのは、智里。

「賢。あんなに速く走れたんだ……」

「そ、そうだな……」

確かに。

ありやまさに、脱兎の如く……だったな。

「って！ こうしちゃいられないだろ。追いかけるぞ、智里！」

「あ！ ちょっと待ってよ！ 陽っ！」

そうして、朝から二度目の全力ダッシュを試みた。
が。

俺達が賢に追いついたのは、学校ゴールでの事だった。

無茶苦茶はえーよ。

入学式は昼から執り行われる模様だった。
別に。

「昼からなんてずるい」
だの。

「俺達ばっか午前からなんてかつたるい」
だの。

なんだのかんだの
なんとらんたら
なんとかかんとか
なんでもかんでも

文句なりなんなり言うなんてしないけどさ。

うん、そんなことは言わない。

「けどさ、どうしてこんな席順なわけ？」

新学期。

新学期の新クラスメイトだよな、ワクワクの種は。ドキドキの要因は。

だが、俺の隣には智里がいて、俺の後ろには賢がいた。

俺の席は……真ん中らへんの、まあそこそこいい場所。

でも、新学期の新学期だけれども。

ただそれは

1年C組から――

――2年A組へと

変わったところで、何か具体的な変化が得られただろうか？

いや、変化自体に何かを求めるのは間違いというものだろう。

変化は所詮変化以外のなにものでもない。

ただ、ある一個体が容姿を変え、様相を変え、

状況を変え、環境を変え、

中身を変え、外見を変え、

ただ、その過程からの結果でしかないのだから。

何かを得られるのは、変化した後に生じるものであって、変化それそのものからではないのだから。

なんて。

悠長に、意外に深層に考えてみたり。

クラスメイトは、確かに変わっている感はある。

けど、周囲の人間一（賢や智里）が変わらなければ、去年度とさほど変わるわけもないような気もするのだが……。

今後に期待。

投稿して、ダメ出しをくらった漫画家の気分だ。

「そんなに不満？ 陽」

後ろから声をかけられた。

賢だ。

この男とはちゃんと弁解して仲直りは済ませたため、こうして話しかけて来てくれている。

いくら性格が不一致だとはいえ、そこは双子。

心底から嫌いにはなれないし、嫌われることもないのだろう。

俺からすれば、世界で一番、信用のおける一人なのだ。

「いや、これはこれで不満はないけどな、賢」

俺は、本当に気にしていない風に答えた。

「こうしていつものメンバーが揃っている方が、やっぱり楽しいし」

「へえ、陽にしては珍しく素直なんじゃない？」

横からの甲高い声。

智里か。

「いつもは鬱陶しがるくせに。やっぱり、そういうところがなくっちゃだよー。このこのお」

「既に半分くらい鬱陶しいよな、お前は」

智里のキャラ替えはいつ行われた？

微妙におかしくなっている気がする。

入学式前の面通し^{ホームルーム}が終わり、俺達在校生は、体育館に集まった。
慣れないパイプ椅子だが、いつも座っている木のものと比べたら、
格段にこちらの方が座り心地がいい。

やっぱり持つべきはクッションだよな。

友達と書いてクッションと読んでもいいな。

そんな友達が欲しい。

特に、誰かからのストレスをやわらげる役目の人。

まあ、ストレスを与えてくる人も、また友達だったりするのだけ
れど。

やっぱり難しいな、人間関係。

閑話休題。

しばらくして、教員の方々、来賓の方々、保護者の方々が訪れる。
自然、在校生の話し声の一切もかき消える結果となった。

まあ、保護者は自分の子供の入学式だから、在校生よりもにぎや
かにはなるけれども。

在校生の方は、結構な緊張感をくらうものだ。

ああ、あれだ。

あの……小学校の頃、半年に一回ペースで校長先生が

「今日は、この学級と一緒に給食を食べようかな」

なんて勝手にずけずけと入り込んでくる意味不明なイベント。

何のフラグも立たねえ。

「あれえ？ このクラスは、あまり活気がないなあ。おとなしく
ていいクラスだ」

おめーがいるからだよ……。

そして閑話休題。

というか。

当然、彩の両親も来てるんだよな――。

「ねえ、陽」

そう思うと、いきなり智里が話しかけてきた。しかも後ろから。

「なんだよ？」

「あれ見てよ、あれ」

声を潜めてくるのはいいが、肩を強引に掴むのはやめてくれ。

まあ、そう邪険にする必要もないので、智里が小さく指を差す方向を見る。

「あれは――」

そこにいたのは、彩の両親だった。

しかも最前列にいやがる。抜け目ねえな、相変わらず。

「そうじゃなくて、その隣だよ」

智里の小さな言葉が耳に気持ちいいが、どうやら何か焦っているようだった。

どうしたんだ？

そうして、視線をスライドさせてみると――

「っな！？」

大声を出しそうになって必死にこらえた。

ちよつと待て。

冷静になれよ。

今日は俺、なぜここにいる？

始業式があつて、入学式に出るためだ。

そして、在校生として、新入生の新たな生活の始まりを迎えるためだ。

そう。

俺は迎える側として、このパイプ椅子に座っている。

けど、なぜ――？

彩の両親の横の席――最前列に座っているのは、なんと俺（と賢）の両親だった。

しかも、ご丁寧に智里の両親同伴ときてやがる。

なんでだよ！？

あんたらは去年来ただろうが！

なんだ？ あれか？ 毎年恒例の花見に参加する気分で来てんの

かあんたたちは！

ここはそういう場じゃないの！

その席はそういう席じゃないの！

しかし——どうやら、三世帯で、彩の晴れ姿を見に来ているご様子だった。

入場料払うわけじゃないからいいけど。

いや、むしろ、だから来たと言うべきか。

なら、来年からはとるべきだな、入場料。

どこに似非保護者^{えせ}がゲリラ出演しているか分からない。

「まあ、おとなしく見てくれれば、別にいいと思うけどね」

俺も、智里の意見に賛成だ。

別に応援旗を振りかざすわけでもない。

別にサインをねだるわけでもない。

別に「彩たん萌え〜！」などと叫ぶわけでもない。

いや、三つ目ならあり得ないでもないけど。

ま、恥ずかしい真似さえしなければ（既^{すで}にしている感が否めないが）、別に大丈夫だろう。

そして。

入学式は、幕を開けた——

6話・クラス替え　そして入学式へ（後書き）

どうもお久しぶりです。NOTEです。

いつぶりになるのかはわかりませんものの、読者のみなさんに忘れられていないことを願いつつ、更新を行っているばかりです。

今回は、というか、更新当日である本日は、勤労感謝の日。

と、いうわけで、現段階での主要メンバー4人3組の両親が、全員登場したわけではありません。

偶然、今日この日に登場したまでで、初めから、この6話に入る予定ではありません。

ええ。

そうです。

彼らの両親たちは、子供思いのいい人たちなのです。

常識に欠けますが。

ということ、今回は終わりです。

今回は、入学式の内容——またはそんなのぶつとばして入学式後のことになると思われます。

まだまだ、終わりませんので、見てくださっている方は、これからも末永いご愛顧、よろしく願います。

NOTEのおふざけに、どうぞお付き合ってください。

感想、評価、コメントや意見などなど、まったく手を抜かず全力で待っております。

「私には読んでもくれる読者がいる」

それだけで勇気づけられます。

7話・入学式

千変万化する周囲の環境に対応する精神を、望み通りに構築すると言うのは、やはり難しいものなのだろうとは思う。

身の回りの環境は、常に変化し、変遷^{へんせん}し、流動する。

諸行無常。

昔の人間なんかは、一人の人生、人類の世界を、そのたった四字でまとめきってしまったっているわけなのだけど。

なるほど。

そんな言葉それだけで理解してしまうというのだから、人間って面白い。人生だって、負けないくらいに面白い。

人間ってのは、そもそもが、進化の過程を経て生まれてきた。

科学では、そう述べている。

人間ってのは、そもそもが、神より創造されし尊いものとして生まれてきた。

聖書では、そう述べている。

しかしながら。

言うまでもなく。

科学では、いや、人類の歴史では。

氷河期を乗り越え、巨大生物との戦闘を乗り越えて、それこそ、目まぐるしくめくるめく回っていく環境の変化の中で生存してきた。

聖書では。

失樂園を経験し、罪悪や幸福を経験し、団結し、四散し、時には神より与えられた試練を乗り越え、託宣に則って、現在まで生存してきた。

環境の変化。

それはもう、人間の遺伝子に、運命の一つとして刻まれているものだと言えるだろう。

生まれ、出会い、暮らし、別れ、働き、苦しみ、楽しみ、死ぬ。
そんな人間としてのサイクルが、その血の、その肉の、その細胞
のど真ん中に書き記されているのだと、俺は思う。

出会い、別れる。

人としてのサイクルが、そこにある。

人としてのベクトルが、回っている。

これから彼女が経験するのは——出会いなのである。
それだけだ。

入学式中。

俺の頭の中には、わけもわからない自分哲学が犇^{ひし}めいていた。

「……………」

だって……。

そんな事でも考えてないと、絶対寝ちやうもん。

こんなさあ、昼間っからさあ、こんな麗^{うつく}らかな陽気の中で、起き
続けるっていうのもさあ……眼に対して死力を尽くせ、と、そう言
ってるようなもんだぞ。

眼だってね、あなたの体の一部なんですよ？

可哀想だとは思いませんか？

休ませてあげたいとは思いませんか？

こんな気持ちのいいパイプ椅子を提供してもらってなんですけれ
ど、いや、むしろ——だ。

眼に力なんか入るわけないじゃん。

できれば、さっき使っちゃった頭も休ませたいんだけどね……。

「それでは、新入生、退場——」

……………。

新入生たちが列を成して体育館を去っていく。

やっと終わったかあ——とも思い、背もたれに背を預けながら、
前進（退場だから後退かな）していく新入生たちを見ると、そこ
には、彩^{さい}の姿があった。

入場の時も見たけど、あいつ――

私立彩桜学園は、制服が特徴的なのも、人気の起因となっている一つだ。

緩やかな校風に、イベントも多く、進学や就職にも困らない上、女子の制服もかわいいときている……………。

こんな高校でスクールライフが送れるなんて、勉強に手がつかない……………もとい、学生冥利に尽きるというものだ。

閑話休題。

ここは私立彩桜学園。

彩は新入学生。

そんなわけで、当然、彼女はこの学園の制服を着ているわけで――高校生には見えない小柄な体躯。在校生席からでも見受けられる白い肌に、大きな瞳。綺麗に黒く輝く髪を二つ左右に結わえている。そんな姿の彩は、いつにも増して可愛く見えた。

しかも……………。

「……………」

こつち向いて、にこつと笑った。

その行為に、思わずどきつと、心臓が跳ね上がったような、胸が躍ったような気がした。

なんか……………成長――したのかな、あいつも。などとらしくもない事を考え、自然と口元を緩めてしまう。

後頭部を小突かれた。

「痛えな……………」

「なあににやにやしてんの？ お兄ちゃんっ」

後ろの席の幼馴染――智里ちさとだった。

俺が彩を見、彩が俺を見ていたのに気付いたのだろっ。柄にも実際に呼ぶ機会もないくせに「お兄ちゃん」だなんて……………。

照れるじゃねえか、このヤロウ。

いやいや。そうではなく。

とにかく、実際俺は弟である身なので、俺をそう呼ぶ奴は血族に

も親族にもいないし。もしそんな奴がいるとしたら、今までに、彩
しいないわけだ。

嫌味のつもりなのだな、そうなのだな。

そして、彼女の一言のせいで、周囲のやつらもクスクス笑う始末
……。

羞恥した。

この女……後で覚えとれよ……。

なんか、ウチの両親まで俺の方撮ってるし……。

「……………」

まったく。

変な人間しか集まんないよな、俺の周りも。

「俺がしっかりしているからかなあ」

「あんだいしゅい類が友を呼んでるのよ」

なるほど。

放課——と言うのに値するのはいささか疑問だが、入学式が終
わり、放課後となった。

今現在、俺は校舎前へと赴いている。

なんとという事はない。

ただ単に、HRが終わってこれからあのボロアパートへと帰ろう
というだけの事だった。

「しかしまあ、騒がしいよな、こうなると」

呟いた。

今の今まで——正確に言つと三月の前半からの一ヶ月間程、ここ
には、俺たちを含める旧一年生たち、そして、一つ先輩である旧二
年生たちしかいなかった。

無論、三年生たちが卒業してしまったため。

そして、新入生が入学してくるためだった。

だが今になって、新入生がやってくると、新しい環境にそわそわ
とした雰囲気の新入生に、新参者の到来を待っていた在校生さえも

そわそわして、校内全体としては騒がしい空気になる。

まあ、当然の帰結になるわけだな。

「陽ちゃーんっ」

俺が兄貴である賢と智里と校舎の外に出ると、そこでは彩が待っていた。

まあ、なぜ俺の名前だけをそうポンポンと呼びまくるのには疑問だけど、呼ばれていかないというのは、あまりにも可哀想だったので、三人で近寄って行った。

「ん？ あれ？ 彩。お前、これから新入生の部活案内があるんじゃないのか？」

確かあれは、毎年恒例行事のはず。

各部活動に所属する生徒が、こぞって新入生を多く獲得しようという動きが盛んになる時期なのだ。

「ああ。あれは明日だよ、陽ちゃん」

「なるほど。それで今日は、あの……火の玉女がいないわけか」

納得。

つゆはらみなと
露原湊。

俺たちと同じ、2年生（無事進級できていれば、そのはず）。

女子バスケットボール部に所属するツンツン少女だ。

……デレの要素がねえ。

いつも、というよりは一年を通して女子バスケットボール部の宣伝を欠かさないあの火の玉女は、今日は騒いでいなかったからな。同学年である身ながら、一生関わり合いたくない熱血女子高生だ。確か去年は、パンダのきぐるみを着て校舎内を練り歩いてたっけ。

「和気あいあいとした雰囲気、楽しい部活動だよー」

とか、そのパンダの中から、ハスキー気味な声を出して。なんでパンダなのかは未だに謎だけど。

しかし、『和気あいあい』のキーワードにつられた女子生徒たちが多数入部していたものの、練習メニューのハードさと、宣伝していた当の本人によるスパルタとで、入部した数日後には、ほとんど

の者たちがやめていったという。

その上、平日での校舎内のきぐるみも、後で禁止になったのだとか。

馬鹿だな、あいつ。

筋肉バカとか、体育バカとか、そんなものでは、あいつはない。体育会系の上で、馬鹿なのだ。

俺が、その火の玉女の行動を思い出していると、賢が横から入ってきた。

「その子——露原湊ちゃんのたつての要望で、明日になったそうだよ」

「は？ 二年生のくせに、そこまで出しゃばれる立ち位置なのか？」

「陽、忘れたの？ あの子、中学生の頃には『ワルキューレ』の呼び名で通ってたんだよ？ 天空を駆ける戦乙女。彼女が自分の目で引き抜いた選手たちは、みんながみんな、最強のバスケットプレイヤー——にまで成長したんだよ」

「ああ。そんな事もあったって言ってたっけな」

「ワルキューレっていうのはね、陽。元々——」

「ねえねえ陽ちゃん。あつちで母さんたちが待つてるからさ、早く行こうよ——」

「そうだな。いくか、彩。智里も」

「そうね」

いつまでも校舎の前で立ち話もなんだから、俺たちは校門前へと行く事にした。

校門前では、確かに、「お母さんたち」がいたのだが……。

「やあ、みんな久しぶりだね」

「本当に、いつ振りになるのかしらねえ」

校門の前で待っていたのは、篠森智里しのもりの両親だった。

いや——篠森智里の両親だけ、だった。

「あれ？ 母さん、陽たちの両親と、なによりも、彩の両親がいなんだけど……どこ行つたの？」

智里も疑問に思ったのか、自分の母親に近寄って問うた。

「ああ、あの人たちはね、ちょっとやる事があるみたいだったから……」

やる事？

実の娘が入学式を終えて、その記念写真でも撮ろうっていうのが、親のやるべき事なんじゃないのか？

「いいのいいの。ちゃんど、色々考えてくれてるんだから」
考えてくれてる……？

パーティでも開いてくれるのかな。

まあ、そうだというのならいいけど。

「そんな事よりも、ほらほら、みんな並んで。記念撮影しましよ
うよ」

智里の母親に促され、俺たちは、『入学式』と、恥ずかしげもなく掲げられた看板（当然だけど）の前に、恥ずかしながら整列した。なんで俺は、並んでいるんだろう……？

新人生でもないのに。

と、そこで賢が隣に立った。なんだか、いつもより俯き気味で、なぜか陰鬱いんうつだった。

「どうした？ 賢」

そう声をかけてみると、

「どうせいいんだ、僕なんか。僕の話なんて、誰も聞いてくれないんだから……」

意味不明に呟いていた。

変なの。

と、いう経路もあったが、とりあえずは、記念撮影も無事終了したのだった。

だが、俺はまだ知らなかった。

俺たちが一年間過ごした、愛着のあるボロアパートで……何があ

つ
たかなんて……。

7話・入学式（後書き）

どうも。最近全く音沙汰なしのぐうたら作者、NOTEです。

序盤に言っていた休日更新というのも、なかなか難しいもので、最近はなかなか進めることができていません。

なんかすいません。

別に言い訳する気も釈明する気もありませんけど（単に何もなかっただけです）、これから……まあ……がんばります。

こんなぐうたら作者ですが、読んでくれている読者の皆様（いてくだされば、の話）、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

感想、評価、コメントや指摘などがありましたら、どんどんください。

ぜひ。

いや、是が非でも下さい。

8話・空白の空間

智里の両親は、

「じゃあ、帰ろうか、智里^{ちり}」

などと言って、俺や賢^{けん}、彩^{さい}、そして娘である智里を大型のファミ

リーワゴンに乗せて、送ってくれた。

しかし、俺には謎なのだが……。

人生に一度とは言わないものの、大事な一人娘の入学式だぞ。

しかも、智里の両親ほどではないとはいえ、こちらもかなりの親バカだ。

アメリカ並みに家族を溺愛する国ではないが、実の娘に一言でもあげればいいのに……。

まあ。

でもこの場合は、子離れが無事にできたということで、この場を収めてしまってもいいか。

「ねえ、陽」

3列シートの3列目、俺の隣に座っていた賢が話しかけてきた。

「僕、朝から気になってたんだけど……」

「どうした？ トイレか？」

「あの、子供じゃあるまいし、それくらいいつでも済ませるよ……」

「あのさ、二人とも。そんな汚い会話を後ろでしないでくれる？」

智里の言うとおりだった。

「いや、真面目な話、どうしたんだよ、賢」

「うん。あのさ……僕、鍵をかけてない気がするんだけど、陽はかけた？」

「は？ 今朝は遅れかけてたし、俺が、急げ！ って早く出たんだぞ。お前より先に出た俺が、かけられるわけないだろ」

「じゃあ、鍵かけ忘れたよお……」

「んなんだってえ！……と、言いたいところなのだが。だがしかしお兄ちゃん。それはまた『いらぬ心配はござらんよ』ってやつだぜ」
俺が珍しくことわざを披露したと思いきや、

「それは『捕らぬ狸の皮算用』でしょ。意味も違うし。ほんと、バカよね」

辛辣な言葉を放つ智里さんだった。

そこまで言わんでも。未来のことを勘定する意味でなら一緒だろうってか、よく今の語調で訂正ができたな。

尊敬できる。

「まあ、大丈夫だよ。几帳面な賢のことだ。いつもは鍵をかけてるし、俺たちがかけていない時を狙って都合よく——なんて、そんな泥棒いねえよ。取られて困る金品なんかないしな」

「悲しいことだね、それも……」

まっただ。

「だけど、心配することもないだろ。そりゃ『見慣れた我が家に入ってみると、そこからは、家具の一切が消え去っていた』なんて結果もないだろ」

路頭に迷うわ。

第8話にして、それは嫌な展開だな。

そら恐ろしい……。

と、車内のそんな会話にもお構いなしに、車はどんどんボロアパートへと向かっていく。

まあ、いつもがいつも歩いての登校なんだ。

車でそう時間がかかるわけもない。

——にしても……。

運転席&助手席の篠森夫婦は、互いの眼を見ながら談笑している（危険だ！）。

この人たちに限らず、この車内にいる子供たちの両親は、誰もかれもが、未だにラブラブモードなのだ。

まあ智里の両親の場合、智里にも愛を注いでいるから、家族間で

愛があふれる家庭なのだ。

智里は、あまりよくは思っていないらしいけど。

そうこうしている間に、車はボロアパート前に到着。

「ありがとうございます！」「

そう言つて、俺と賢は急いだ。

盗られないだろ、なんて心配は微塵もないものの、まあ、一応早く見ておくに限る。安心したいためには。

俺たちの部屋は1階だ。

やはりもやはり、先に扉の前に着いたのは俺だった。

玄関の取っ手に手をかけ、ひねる——と。

「開いてる……やっぱ」

これは予測通り。

俺の予測だと、この先は、いつも帰った通りの光景が広がっている——はず！

扉を開けた。

「あ、あ……れ？」

俺は眼を疑った。

見慣れた我が家に入ってみると、そこからは、家具の一切が消え去っていた——。

まるで、最初から誰も住んでいないかのように、空っぽの空間だけしかない。

「こ、これは……」

気がつくと、隣には賢が来ていた。

賢は息を切らすのも忘れ、目を丸くしていた。口も外れんばかりに開けている。

この部屋、こんなに広がったんだ——。

なんて、呆けた感想しか浮かんでこない。

俺の知らない空間しか、そこにはない。

当たり前だ。

そこに、何も無いそんな所に、俺は住んだことなんてないのだから。

ら。

俺がいた所は、家具があつて、万年床のように布団が敷いてあつて、賢と深夜番組を見ていて――。

「ふっふっふ……」

なんだかいやらしい笑い声が聞こえてくる。住居を失った俺にはどうでもいい話だが、そこはたぶんこの話でのイベント――仕方がなく、声のした背後を振り返ることにした。

「陽ちゃん、賢ちゃん――」

ザコキャラみたいな笑い声を出し、俺たち双子を仲良しなコメディアンのように例え、いかにも「私はボスキャラだ」的な空気を出しているのは、彩だった。

低い背。

新しい制服。

黒い髪。

相も変わらずツインテール。

そんなロリっ子彩ちゃんは、両手を腰に当てて、愉快そうに口元を歪めていた。

いくら目を細めても、大きな瞳からは、敵キャラのような邪悪さは感じられなかった。

むしろかわいい。

ちよっとおませないたずらっ子って感じ。

さておき――

「何を笑つてんだ？ 彩」

俺は至極平坦に、抑揚のない声で呼びかける。

「やっぱり、なかったみたいだね、家具……」

「お前、何か知ってるのか？」

「ふふん。『これから一週間、彩ちゃんのお願いをなんでも聞いちゃいます』ってお願いするんなら、教えてあげなくもないけどお」

「ウザい」

「ひッ、ひど!?!」

彩はビクついて身を縮めた。

「お前こそ、教えないなら、これから一週間、お前のことを全面的に無視することにするけど」

「あ、わ、わわわッ、そんなのやだよぉッ！」

彩は、目にうるうると涙をためて俺にしがみついていた。

「そんなのないよう、陽ちゃ〜んッ」

「じゃあ、教える。さもないと――」

「う、うわわ！ わかったよぉ、教えるよぉ」

やっぱりザコな彩ちゃんだった。

8話・空白の空間（後書き）

ということで、1日2話更新です。

NOTEやってます。

さて、今回は、

前からだいぶん開いてしまってる！ これからも開きそう！ ああ
！ どうしょー！

なんて思った次第で、2話目を更新させていただきました。

まあ、1日で何話もまとめ見をしている人からすれば、そんな
どうでもええやんけ、てな具合ですけどもね。

ぐうたらな称号も、これで撤回したいと考えていますが……さて
さて、いつまで持つのやら。

さて、そんな

市立彩桜学園の日常的な日々

ですが、楽しんでくれればありがたいです。

これからも、よろしくお願いいたします。

感想、意見、評価、コメントなどなど、じゃんじゃんジャンジャ
ンくくださいませ。

9 話・お前まで!?

ひめみやさや

姫宮彩「ザコラスボスを撃破（いぢわる口撃）し……ともすれば
駆逐し、今朝方まで住んでいたボロアパートを後にして、智里ちさとの家
の車に揺られること10分足らず——俺たちが辿り着いた先には、
大層なマンションが建っていた。

高層とまで言えるのかどうかはわからないが、とにかく新しいもの
のだらうと思う。

確実に建築基準法に引っ掛かっているであろう（特に耐震強度と
かが）ボロアパートとは、比べるべくもない建物だった。

車から降りるなり、彩は俺たちの前に立ちはだかるように、両手
を広げた。

「ここが、今日から陽ちゃんたちの住むおうちだよお！」

「……………」

なに、この展開……。

俺の突っ込みスキルが足りないのか？

それとも単なる無茶振りなのか？

そもそも冗談の枠内に収まるのか？

『もう少し【賢さ】をアップさせてから声をかけてみよう！』なん
てメッセージは見当たらなしいなあ。

「……………」

赤くなるなよ、彩。

こっち見るよ、彩。

自主的にやっというてなんだよ、その『やっちゃった感』満載な表
情。

こんな空気にした責任を取ってください。

その場にいた全員が、意味不明過ぎて無言になる中、智里の両親
だけがウキウキしているように「さあ、入って入って」と俺たちを

中へと誘った。^{いざな}

特にセキュリティ管理もしていない玄関だったが、丁寧に磨かれているからか、高級感が溢れている。

自動ドアを抜け、目の前にあるエレベーターへと乗り込む6人。

智里の父親が4階のボタンを押したかと思うと、変な浮遊感を体感する暇もないままに4階へと着いた（すげえ）。

「えっと確か……409だった気が——」

智里の父親の先導のもと、俺たちは従うがままに足を運んでいた。ここまで来ても、未だになにがなんだかさっぱりわからない展開で、呆然と行動しているに過ぎないのが現状である。

「お、あつたあつた。じゃあ、陽君、開けてごらん」

「は、はあ……」

よくはわからないが、俺は409と表示された扉の前まで接近する。

扉を開けると、そこは、異次元だった——

なんてオチじゃないだろうな？

そこまでふざけられると、俺はついに怒るぞ。

早く日常的な日々へ連れて行けって感じた。

まあ、異次元に繋がるなってことはないだろうから、俺は安心して目の前にある扉を開いた。

ガチャリ、と小気味よい音を立て、音もせずを開いていく扉からは、新たな光が射しこんでくるような気さえた。

瞬間、パァン——と、かすかに聞き覚えのある破裂音が聞こえた。そして、俺へと舞い散る花吹雪。

「ご入学、ご進級、ご新居、おめでと——ッ！」

俺の視界に飛び込んできたのは、真新しい間取りと調度品に囲まれた、見慣れた4人の姿だった。

そこにいたのは誰あろう、失踪中（？）だった俺と彩の両親だったのだ。

「と、父さんに、母さん……？」

「驚いたでしょう、陽？　こんなに素敵な家が待ち構えているだなんて——」

「そうだぞ陽。それに賢もだ。これから新たな門出を迎える君たちには、相応しいプレゼントとなっただろう」

嬉しそうに語る俺（たち）の両親。

真っ白な脳内で固まる俺、整理のつかない引き出しまみれになっている脳内の俺の隣を駆けていく少女が、その場にはいた。

「わあー。ここが新居かあ！」

などと言いながら、幼児体型の高校一年生——姫宮彩が、リビングの中心で回っていた。

両手を広げ、踊るように部屋を見渡したのだ。

「やっぱりかわいいなあ、我が娘は——！」

「そうね、お父さん」

そんな、お花畑の中心にいるお姫様みたいな娘を見て、傍目から見て泣いているのは、彩の両親だった。

彩は、彩桜学園の制服に包まれていて、それはそれは確にかわいらしいのだけれど、それを見ている彩の両親を見ると、親バカ以外のなにものにも見えなかった。

いや、バカ親かもしれない。

「——って、ちよつと待てよ。俺は今の状況がなんなのか、未ださっぱりんだけど！」

俺は自分の両親にめいっぱい叫んだ。

俺の隣では、賢^{けん}も、智里も、こくこくとうなずいていた。

「なんだ、事情を聞いてなかったのか？　まあ、こちらから話すのもいいか」

などと言い、とにかく俺たちを室内へと招き入れた。

簡単に言つとこつこついうことらしい。

彩桜学園というのは、俺の家から歩いて通える学校なのだ。

しかし、そこには踏み切りだったり信号だったり、朝に込み合うコンビニだったり駅だったりがあったりと、混雑する可能性極大な道路状況というわけ。

まあ、日本一交通整備が整っている名古屋なんかでは、そんな心配をする必要もないのだろうが。

だがここは、些細なことで日夜ご祝儀袋が飛び交う街ではない。朝のラッシュアワーにでも安心して学校に行けるように、そんな理由で、俺の両親はアパート暮らしをさせてくれたというわけだった。

「うん。まあ、事情を俺なりにまとめて読者の皆様にお送りしてみたわけなんだけどさあ……」

今の状況がわからん。

なんで引つ越したの？

何このマンションは？

よくわからんのやけど……。

それにあの能天気少女と来たら……

「わああ！ ベッドふかふかあー！」

なんであいつは人んちのベッドでばっさばっさ跳んでんだ。

今いるリビングからは、放射状に、4つのドアと玄関に通じる廊下があるが、1つのドアの向こうには部屋があり、中のベッドで彩が暴れているわけだ。

「あれ？ 聞いてなかった？ 私も今日から、ここに住むんだよね？」

「何を言い出す新入学生。お前が住む必要性がないだろ。お前の家からだって彩桜学園には通えるし、さほど時間のかかる道でもないんだから」

俺が彩に意見すると、リビングの真ん中のソファで彩の母親が、
「あら、本当なのよ。今日からここで、彩ちゃんも一緒に住む予定になってるから」

「はあ？」

……………。

ちらつと彩の方を見ると、おそらくは自分のになっているのである。ろっベッドの上で「にへへ」とピースしている。

いや、にへへじゃねえし……。

「つて、ちよつと待つてよ！」

立ち上がったのは智里だった。

「彩をこんな——むさい男どもと1つ屋根の下の中に放置しとくつて言うの！？」

「むさいつてなんだよ智里。それに、1つ屋根の下つて言うのなら、隣に住んでいるキレイなお姉さんだつて1つ屋根の下だぞ」

「お隣さんの情報得るの早ッ！？」

「俺の情報力を侮つちやあいけないね。ありや俺たちと同じ高校の制服だった。しかも3年生！ 優しそうな人だったなあ」

「黙つてて陽！ とにかく、こんな犬を放し飼いにしている無法地帯に、彩を置いておくのは危険よ！」

「俺は犬じゃなくて竜だぞ」

「犬でも竜でもミミズでもいいでしょうが」

「ミミズは明らかにランキング最下層だろ！」

ヒドッ！

「陽はミミズなんかじゃないよね。だったこないだ、陽は猫になりたいとか言つてたもん」

能天気その2が喋った。

賢だ。

「ええ？ 猫オ？ 何でよそれ」

「だってテレビで、結城萌花ゆつき ほうかが言つてたもん。『猫が好きで、見ると抱きしめなくなっちゃうんです』つて」

賢！ てめえ〜！！

「結城萌花つて、あのアイドルの？ バッカじゃないの！ そんなので猫になりたいなんて」

「と、とにかく！　今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ。ほ、ほら、犬の話だよ！」

「違うでしょ！　彩がここに住むって話でしょうが！」
そうでした。

「私はここにいたいよ。陽ちゃんたちと住みたい！」

「とにかく！　彩がここに住むって言うのなら……私もここに住むわ」

智里は足を広げて立ったまま、俺に指をさして高々と言い放った。
宣言するように、彼女は言っただけだ。

「はああ！？　お前何を言っているのだよ！」

口調がおかしくなりながらも、俺は吠えた。

「彩と一緒に住むだけでもどうかって話に、なんでお前まで加わる必要があるんだ？」

「だって、彩はこうして住みたいって言ってるし——でも、あんたたちの視野内に置いておくのは危険だし——」

いい加減、俺たちが危険だとか言うのをやめてくれよ……。

「いいよ」

声の方を見ると、につこりと笑っている賢がいた。

「4人で住めばいいじゃない、陽。その方が、陽も嬉しいでしょ？」

「バツ、そんなわけ……。さ、騒がしくなるだけだろ」

「賑やかでいいじゃない」

要はプラス思考かマイナス思考かの精神論を持ってこられてもな。
俺が何も言わずに黙っていると、

「大丈夫よ、陽」

母さんが俺に近付きながら、話し始めた。

「智里ちゃんならきつとそう言うと思うって——」

と、そのまま俺を通り越した母さんはある一つのドアを開き、

「智里ちゃんの部屋も、ちゃんとう意してあるからッ」

ふと見ると、母さんが開けた部屋の中には、ふかふかそうなベッドや、おしゃれな家具がたくさんあった。

どれもこれもが水色で、まるで、水族館にでも来たかのような気分になる部屋だった。

それにあれ？ あのベッドの横にある異様にでっかいクマ——
「なッ!？」

それを見て目を丸くしたのは、智里の方だった。

智里はマッハのスピードでドアを閉めると、彼女の両親の方を睨んだ。

「ちよつと！もしかして、私の部屋から勝手に持ってきたでしょ!？」

にこやかにほほ笑む智里の両親。

そんな表情を見た娘の方は、顔を原色くらいにまで赤くしながらも、大きな溜息を漏らした。

「じゃあ、もう決定事項みたいだし……仲良く暮らそうよ、4人で賢が笑顔をひきつらせて苦笑している。

「やったあ！智里ちゃんとも暮らせるんだあ！」

彩が智里の手を握り、ぶんぶんと振った。

智里は力も入らない状態で、ぐらぐらとそれに応じていた。

こうして、俺たちのルームシェアリング生活が始まった。

9 話・お前まで！？（後書き）

久しぶりの更新でございます。NOTEです。

つてか、高校生活メインのはずのこの物語、大部分が家中心のお話になっております。

早く軌道修正しないと、ここからずるずるになる予感……。

ちゃんと彼らの高校生活をお伝えできるように努力いたしますので、ご覧になってくださる読者様方、これからもNOTEを、よろしくです。

感想、評価、コメント、誤字脱字の指摘など、ぜひぜひお送りくださいませ。

10話・待たせたな（明夫ボイス）

私立彩桜学園の中庭。

既に時刻は12時を軽く20分ほど越えている。

中庭の芝生の上で、俺と双子の兄である賢、賢同様に俺の同級生である智里、一つ下で妹分の彩は、俺が朝に作ってきた弁当を広げていた。

と、今回も始めました『私立彩桜学園の日常的な日々』ですが、記念すべきこの第10話をもって終わります。

そうです。

終わりです。

こんな読んだところでなんの得も利益もないものを、今までわざわざ読んでくださった物好き………もとい、心優しい皆様、ご愛読ありがとうございました。

「ダメだよ、陽。調子に乗ってそんなデマ流しちゃ」

だからなんでお前は俺のモノローグを聞いているんだよ、賢。俺は一切声に出してなんかないぞ。

「第一、なんでそんなに不機嫌そうにしているのよ」

智里は、賢の言動になんの疑問も挟まず俺に話しかける。もしかすると、こいつまで俺のモノローグを始終聞いているのか？ や、やだッ！ バカッ、恥ずかしい。

……………んなわけねえか。

「朝からずっとそんな顔だねえ。私の唐揚げ一つあげよつか？」

彩は彩で俺のことを気遣ってくれているようだ。

いや、しかしまあ……俺は唐揚げ一つで機嫌が全快する人間だとも思われてるのかな。お前じゃないんだから、食いしん坊娘。

「いや、だつてさあ……」

急発進が始まった俺たちのルームシェアリング生活は、早くも、俺にとっては急降下の一途を始めていたのだ。急停車もせずに。

「陽ちゃん、お風呂空いたよ」

ルームシェアリング生活1日目の夜。

おそらくは人生初であろう俺の一人部屋。そこに響いたノックの後には、今でも一緒に住んでいることが信じられない彩の声が投げられた。

「わかった」

マンガに目を落としたままで答える。俺は先程荷物から解放したベッドに寝ころんでいた。

すると、「わあ」と驚きの声と共に、彩はひょっこりとドアから顔を出しているのに気づく。

「陽ちゃんまだ荷物ほどこいてないのオ？」

「まあな。面倒だし。今日はなんだかんだ言っているいろいろあったしな。明日にはどうにかしようと思つてね」

「そつか。早めにやつといた方がいいよ？ 長引くとどんどんめんどつちくなっちゃうから」

「へいへえい」

「……もう」

なにやら小さく不満の声が聞こえたが、彩は部屋から退散したようだ。

あえて表記はしていないから、読者の皆様方は、俺の部屋の現状をあまり想像する事ができていないのだろう。

「新居かあ。さぞかし綺麗な部屋で、よほど整頓されている事だろうなあ」なんて思っているあなた、ふふふ、甘いな。甘甘だな。この黒糖め。

俺の部屋の現状。

真っ白い壁紙に囲まれた部屋で、真っ白い照明に照らされ、ライ
トブラウンの段ボール箱の間から鮮やかな木目模様のフローリング
が顔を覗かせている。

ちらちらと。

ちらほらと。

ほんとのほんとに、実に疎^{まは}らに……

それにしてもフローリングがよく見えない……。

そう。ゆづに部屋の8割を段ボール箱で覆われているのだ。

まるで資材集積場みたいだ。

いかに段ボール箱が好きな人間でもここまで大量に備蓄しないだ
ろ。

俺はソリッド・スネークじゃねえつつの。

と、いうわけで、整理は延期。この一週間で使う物だけ出して、

あとは土曜日にも一斉開封出血大サービスといくさ。

さつき「明日」って言ったばかりだけどな。

「さて」

風呂でも入るとしますか。

俺は自分の部屋から出、浴室に隣接する脱衣所へと向かった。

脱衣所を開けると、そこには明かりがついており、洗濯機や洗面
台などが並んでいる。変に小奇麗に見えるのは、やっぱり新しいと
ころならではの高揚感からだろうか。今まで住んでたボロアパート
とはわけが違うな。

3つの家の両親が出し合ったのだから、単純計算で5LDKの料
金を3等分……まあ、それでもボロアパートの家賃よりは高いだろ
うけど。

「そんなこといいか」

とりあえず、俺は風呂に入ること……ん？

浴室からはシャワーの音が聞こえてくる。快音がこちらまで響い
ていた。

あれ？ 賢、もう入ってるのか？

2人暮らしでよくあること。シャワー室やトイレのブッキングである。

ボロアパートの時も何度かあったな。

しかも、そこはそれ一卵性双生児の末路……結構場数を踏んでいるのだ。2人とも思考が同じらしく、風呂なりトイレなりのタイミングが妙に一致してしまっていた。

ブッキングしないように気をつけて、時間をおいて入ろうと試みるも、むこうも同じことをしてブッキング、なんてこともあった。今回もその類たぐいなんだろうな。

「賢、入ってたのか？」

言いながら、俺はガチャリと浴室の扉を開けた。

男の裸なんて見たくないけど、兄弟ともなれば、自然と平気になつてきてしまっているのである（こんなに仲のいい兄弟も珍しいのだろうが）。と、いうわけで風呂から出たら教えてくれ、とお願いに顔を出す——

輪郭の細い、なめらかで肌理きめの細かい白肌。指先、髪先から脚線や爪先にわたるまでも細いが、随所には成長の証として起伏が見られる。

腰まわりはわりとたおやか差が、胸元のポリウームをさらに強調している。

胸元のポリウームが……。

胸元の……ポリウームが？

………？

俺は気がつくと、瞳を力の限りに開いている彼女と目を合わせていることを知った。

白く透き通るような肌の主は——智里だった。

「あ」

「え」

2人で硬直。

シャワーを浴びていた模様なので、智里はその身をまるで見てく
れと言わんばかりに開放していた。

「キヤアアアアアア！」

甲高い悲鳴と共に、洗面器やシャンプーの容器がまるで分身魔球
のように飛来してきた。

「おわあ！？」

俺はそれら諸々を、浴室の扉を閉めることで間一髪回避に成功し
た。

後ろ手に閉めた扉に背を預けると、浴室からは、

「よ、よよよ、陽！ あ、あんたねえ！！」

予想通り、怒り心頭の智里ちゃんでした。

「わ、悪い！ お前もここに住んでたこと、すっかり忘れちゃって
て……」

「はあ！？ 何それ？ それで言い訳してるつもりイ！？ ふざけ
ないでよっ！ 人の身体まじまじと見ておいて」

「し、仕方ないだろ！ 勘違いしちゃったんだから」

「それじゃあ済まないでしょうがぁ！ ああ！ もうお嫁に行けな
いじゃないの！！」

「あれ？ 行く予定だったのか？」

「……は？」

「いや、行けるつもりしてたのになって……」

浴室からは、急に音が止んだ。

——で、終わるはずもなく……

「ぶっ殺す！！」

ついにキレちゃった！

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいごめんなさい！！」

と、まあ……その後、湯上りで俺の部屋に速攻を仕掛けてきた智
里によって、俺は半分死にかけたわけでした……。

それにしても……

智里のやつ、ああ見えて着^き痩^やせするタイプだったのか。

どさくさまぎれにサイズを確認していた俺なのでした（下着を流し見ただけ）。

Dだったな……。

10話・待たせたな（明夫ボイス）（後書き）

お久しぶりが止まらない、NOTEです。

今回、陽が遭ってもらった役得……災難は、まあ、よくあること（二次元では）なのですが、ありがちだとわかっていてもやはり待ち望む光景かと思います。

「そんなチャンスねーよ」なんて言う方、
そんなチャンスいらん。

そんなに見たけりゃここを見る！ 動画やアニメなんてせず、文字から妄想するがいい！！

すいません。

妄想できるだけの文章力を身につけたいと思います。

それにしても、このクリスマスシーズンに春模様でごめんなさい。

近々、クリスマス用の作品を出す予定ですので、そちらも併せてどうぞよろしくです。

ご意見、ご感想、ご評価、ご誤字脱字のご指摘などなど、お待ちしております。ごしごし……もとい、どしどしくださいね！

閑話・やっぱり男も女もいるとまどろっこしいから外見じゃなく中身で勝負しよ

彩：「ねえねえ陽ちゃん陽ちゃん」

陽：「なんだいなんだい彩ちゃん」

彩：「今回教えてほしいのはねー……」

陽：「ちょい待った。なんでこの閑話、いつの間にか知識発表コーナーみたいにしてるんだ？」

彩：「はあ。陽ちゃんはなんにも、わかってないねえ。なあんにも——わかってないよ」

陽：「なんだよその戯言遣いみたいな言い回しは……」

彩：「私は私で新たな境地を開こうとしてるもん。もう私は……迷わないから……」

陽：「それはなんの台詞だ？　どこの作品の台詞を流用してきた？」

彩：「さあて、今日も閑話専門バカ会話、言っちゃおうよ！」

陽：「タイトルが、自嘲的なのになぜか的を射ている！？　いやしかし、それはどうだろうな。前回のチョコの一件だって、ウィキペディアでも見ればわかる事だったじゃないか」

彩：「それは、作者の検索能力、調査能力が悪かったんだよう。あ

えて言おう！ NOTEはググリ方、ヤフリ方が異常に下手なのであると！」

陽：「なぜその台詞を知っている。お前みたいな少女が知っていると知れば、製作者もツツチー（ガンダム芸人）も銀河万丈さんさえびつくりするわ」

彩：「ええ、私なんかまだまだだよ。星屑くらいまでしか見てないんだから」

陽：「大塚さんまでビクリさせたいのかお前は！？」

彩：「銃身が焼きつくまで！！ 撃ち続けてやる！！」

陽：「第08MS小隊まできっちり見てんじゃねえかよ！」

彩：「あれ？ 違ったっけ？ まあいいや」

陽：「あれOVAと映画だぞ……。いや、そんなことはいいとして、この話をこれ以上どう進めていくつもりなんだ？ まだ664文字だぞ？」

彩：「別にいい、たくさん文字量をこなせばそれでいいって問題じゃないと思うよ？ ちゃんと分かってあげようよ、作者の気休めを」

陽：「作者を気遣っているようで一番傷つけているのはお前だけだな……」

彩：「それよりさ、最初の会話に戻ろうよ」

陽：「お前、本編より生き活きしてるよな」

彩：「ねえねえ陽ちゃん陽ちゃん」

陽：「はあ……。なんだいなんだい彩ちゃん」

彩：「今回教えてほしいのはねー……。みんなの容姿についてなんだ」

陽：「はあ？」

彩：「この作品ってさ、人物描写が欠如してると言ってもいいほど皆無だよな？」

陽：「まあ、それはそれなりに、作者の意向もあるんだけどな。でも、そこまで重要なことか？ 確かに小説の場合、人物の外見がわからなければ、やり取りがイメージしづらいけど」

彩：「じゃあ、なんでそこまで描写しないの？ もしかして、単に苦手だからとか？ それとただ単に設定が面倒だったから？」

陽：「いや、作者にもそれなりに理由はあるみたいだけど。これが始つて、もう10話になるだろ？ キャラの人物像がそろそろ立つてきた頃だ。今だから言えるけど、まだ始めの頃はな、キャラの人物像が読者に伝わっていないだろうから、容姿を描こうとしたんだ」

彩：「そうだよな。双子なんだもん。一卵性双生児なんだもん。賢ちゃんの容姿を描けば、それはそっくりそのまま陽ちゃんにも当てはまるもんね」

陽：「ああ。でもな、容姿じゃなくて、性格だったんだよ。やっぱ

り、見た目は程々でいいんだ。性格を披露しておけば、見た目も、それは読者一人一人に感じ考え具象化してほしいと思ってたんだ」

彩：「それって、やっぱり億劫おっくうだったんじゃないの？」

陽：「かもな」

彩：「でもねえ、やっぱり見た目は表現するべきだよ。今の時代、メディアミックスじゃないと生きていけないよ？ とことんを目指すのなら、キャラー一人一人をシルエツトで見分けられるだけの完璧な見た目を作り上げないと！」

陽：「無理だな」

彩：「なんで！？ とことんまで目指す気はないとか、そんなこと言わないよね！？ 私たちに命を吹き込むことが面倒だなんて……そんなこと、言わないよね！？」

陽：「でもな、無理なんだよ、彩……」

彩：「どうして……？」

陽：「作者の——創造力の、限界だ」

彩：「……ああ、なるほど」

閑話・やっぱり男も女もいるとまどろっこしいから外見じゃなく中身で勝負しよ

いやあ、閑話はよくわかんないですね。NOTEです。

こんな話にするつもりじゃありませんでしたけど、なんせ閑話は感覚で、その場その場で書きたいことをそこはかたなく書き綴っていますので……。

さて、今回陽ちゃん彩ちゃんがお送りしたものは、今後の話に一切切絡んできませんので、ご了承ください。

感想、評価、誤字脱字の指摘や「ここはなんとなく無理あるくない？」なんて意見も受け付けています。

NOTEでした。

11話・生ける伝説

つゆはらみなと

露原湊の存在を俺が知ったのは、それ程遠く昔のことではない。

去年の、ちょうど今の時期。中学が一緒でなかったのにもかかわらず、思いがけず、その存在を認知してしまった。いや、認めるとかそういう問題ではなく、五感で知覚するだけで恐ろしい女なのだけだ。

何はともあれ、彼女の中学時代の噂、いや、伝説を知っている者は少なくないはずである。知らない者はいない。それ程の評判と名声をお持ちなのだ。

もつとも、それは校内に留^{とど}まった話ではない。

むしろ校外の方が色めき立っている。

ウチの学校——私立彩桜^{さいおう}学園は、部活動においてさほどいい成績を収める高校ではない。いつて二回戦突破。調子が悪いと初戦敗退を果たす程の落胆^{らくたん}ぶりである。

一つを除いては。

女子バスケットボール部である。

露原湊の——所属場所だ。

露原の伝説は、一つではない。

中学時代の伝説と、高校時代の伝説がある。もちろん、高校時代とは言っても俺たちと同じ学年、言ってしまうえばまだ二年生進級直後の現段階での話である。もつと言ってしまうえば、彼女は去年の夏の大会——入学からたった半年足らずの間で、その伝説を、露原神話を確立してしまったのだ。

部活動にも入らず地味路線を歩んできた俺からしたら、まさに雲泥の差、月とすっぽんだ。

しかも、よそ様の噂を聞いている分にはなんの感情も興味も湧いてはこないが、それが身内となると話が違ってくる。

寄せ集めて作り上げた物語ではない。

ただ一人で築き上げた神話なのである。

アンソロジーならぬマイソロジー。

正真正銘の生きる伝説だ。

もつとも、噂を聞くにしても人伝でなければ聞けないのも事実。

この伝説は、実は智里ちりから（あと数人の友達から異説いせつをちよろちよる）聞いたものだ。

「露原湊？」

去年の夏過ぎ。

聞き慣れない名前に、俺は耳を傾かたむけては首を傾かしげた。

「知らないの？ 陽よう」

甲かんだか高い声が耳に届く。

屋上。

諸事情で席を外している賢を抜きにして、落下防止のフェンスに沿うように配置された青いベンチに、俺は智里と座り、昼のパンをかじっていた。

「今注目の、というか、注視されている一年生なのよ。いい意味でも、悪い意味でもね」

智里はそう話している。

昼休みに幼馴染で同級生の女の子と、屋上で昼飯とくれば、男としては嬉しいシチュエーションなのかもしれない。

しかし、話題は別の女の子のこと。その上、女側から振ってきたのだから始末に困る話ではある。それにだな、そもそも俺と智里はそんな色っぽい間柄ではない。逆に、だ——俺は智里とくつつきたくない。このツン女（デレの要素は今のところなし）と一緒にになったら、それはそれで尻に敷かれそうな勢いだからだ。それこそ色っぽくない。

「それにしても珍しいな、智里。お前が他人の噂話を持ってくるなんて」

「そう？ 別に、これぐらいは普通だと思うけど」

「変に生真面目なところがあるからなー、お前って。そんなにまざい事やらかしてるわけでもないのに身構えちゃってさ。この場面で俺がお前に飛びかかるとでも思うか？」

「それは何？ 私に対して「お前は女としての魅力がない」とか言ってるわけ？」

「ほら出た、その過剰被害妄想！」

「な、何よ……」

「別に他意^{たい}なんてなく純粹に言ってるのに、言葉通りに受け取らないだからな。もうちょつと素直になつたらどうなんだよ？」

「あ、あんたがいつも私の事からかってくるからでしょう！」

智里は顔を真っ赤にして怒鳴っている。ちょつとしたからかいでムキになるから楽しい。彩^{さや}と違って、これはこれでいじりがいるな。

「で、露原湊だっけ？ そいつがどうかしたのか？」

俺が急に話を戻すと、智里はバツが悪そうにおとなしくなった。

そして、一発殴られた。

しかもグーで殴られた。

「顔面粉々になるわあ！」

右頬の痛さを堪え^{こひ}きれずに叫んでしまった。

屋上で。

恥ずかしい。

「それで、その露原さんなんだけど——女子バスケットなんだけどね、この間の夏の大会、凄かったのよ」

「へえ、一年生でレギュラーとってんのか。そいつは凄いな——って、え？ 女子バスケット？……って、お前の言うこないだの夏の大会、全国区まで勝ち上がったやつか？」

そう。

一年生のこの時期、夏の大会で、女子バスケットはウチの学校で唯一、全国レベルまで到達した部活動なのである。

歴代でそこまで行ったところはあるのかもしれないが、少なくとも

も平成になってからでは初めてという快拳だ。

「そう。その夏の大会で、どうやら露原さんの活躍が、全国行きに一枚噛んでるらしいのよね」

なんでこいつは某国の黒服諜報部員みたいな喋り方をするんだ？別に不正も薬物もやってないんだから、もつと祝福してやれよ、その露原とやらを。

「でも、確かにそうだよな。去年まで、彩桜の部活動が抜きん出た成績を収めてるって話は聞いた事がないからな。ほかの学校から強い奴が卒業したか、今年この学校に強い奴が入ってきたのか、しかあり得ないわけだ」

「ちなみにその露原さん、陽よりも身長低いわよ」

「そんな事言ったって、俺だって、差し当たって男子の中で小さい方ではないしな。ってことは、お前と同じくらいか？まさか彩と同じくらいなんて事はないよな」

ちなみに言うと、彩はまだ入学してきてすらいない。俺が一年生なのだから、そりゃ当然なのではあるけれど。

「女子としては、普通……なのかな？百六十センチあるかないか、ってところよ」

「じゃあ、バスケットボールプレイヤーとしては低い方なんだな」
ふーん。

それで期待の新星、か。逆に見かけ倒し、みたいな感じ。その体型でダンクシュートでもされたあかつきには、相手方もそりゃあびつくりするだろうな。

「できるわよ、ダンクシュート」

——は？

「何言っちゃってんだよ、お前。たかだか百六十の身長だろ？高校のバスケットボールリングの高さ見くびるなって。百八十の奴ですら届くことの少ないあれに、小柄な女子が届くわけ——」

「——届くんだな、それが」

智里は自分のことでもないのに、自慢気^{じまんげ}に胸を張っている。

.....。

異常だ。

おかし過ぎる。そんなバカな話があつてたまるか。

「ただだけ筋肉隆々なんだよ、その露原は……」

「筋肉？ そんなの全然ないよ。そうね、無駄な贅肉ぜいにくもなければ、無駄な筋肉もない。こんな言い方するのも気が引けるけど、ミロのヴィーナスとかダビデ像とか、それとはまた違った意味で美術的価値のある肉体つてところね」

「ふうん。お前、着替えまで覗いてたのか？」

「そういう意味で言ってんじゃないわよ！ ただの想像！ 雰囲気

！ オーラ！」

「そうですか……」

「それと、また凄いのはあれかな。スリーポイントシュート」

「それは両手打ち、だよな」

「え？ ううん。片手だけど」

.....。

ありえねえ。

三点リーダ四つを無駄に使うほどありえねえ。

女子のバスケットといえば、だ。高校生の選手でも大抵は両手打ち。片手で打つ人間は、よつぼどの筋肉（ウー）マンか、高身長のおつぼちゃんかしかないはずだ。

ドリブルで相手をおかわす事が出来る低身長はよくいるものの、ダンクやスリーといったシュートを決める奴は見た事がない。

それに、スリーはともかく、高校生でダンクを、しかも女子のダンクをおが押めるなんてそうそうではしないだろう。宝くじで一等を取るよりも低いだろうな。

「それにね、あの露原さん。中学時代にも凄い伝説を築いてるのよね」

「伝説？」

「あの人がいた中学もね、去年までのここみたいに、弱小の部活だ

ったんだって。でも、露原さんがその能力を現してから、それが一気に全国区——拳句の果てには三年生の夏の大会で全国制覇を成し遂げたんだから」

「それは……超人だな……」

鳥人みたいなやつだしな。面白くねえけど。

それにしても、この智里がそこまで言うからには気になる。

前述のとおり、普段、誰かの悪口だろうと褒める噂話だろうと、智里は積極的に参加してくる事はない。どちらかと言えばそういった類^{たぐい}を嫌うのだ。

本人のいないところでの噂話は気が悪い、とか言い出すからな。こうして話している今も、あまりご機嫌のいいようではないし（まあ、半分は俺のせいかもしれないけど）。

よし、こうなったら——

「放課後、見に行く」

「はあ？」

「その露原湊とやらの練習風景を見にさ」

「な、何言っちゃってんのよあんた。見学でも偵察でもないのに、そうそう見られるものでもないでしょう？」

偵察だって堂々と言って見るやつがあるかよ……。

「けどさ、お前がそこまで言う、露原湊って女の姿が見てみたいって、そんな男心をわかってくれよ。ちょっとでいいんだから」

「はあ。あんた本当にバカね。ちよつとした話ですぐ妄想膨らませちゃって……。それになんで私がそんなのに付き合わなくちゃいけないのよ」

「は？ 俺そんな事言ったか？」

「へ？」

智里は、何がなんだかわけのわからないような顔をしている。俺もよくわからんけど。

「俺は行ってみるってしか言ってないじゃん。別に智里がついてくる必要なんかねーぞ？」

「え、あ、うあ？」

なんだこいつ。

なんでこんなに動揺しているのかさっぱりわからん。

「じゃあ、放課後は俺、体育館に行くと思うから。賢に訊かれたらそう言つといてくれ」

言い残して、あたふたとしている智里を置いて屋上を後にしようとする――

「ちよつと待つて！」

智里が俺の制服の裾をつまんだ。いや、力いっぱい握りしめた、と言ったほうが、この場合は正しいのかもしれない。かなりのしわが寄ってるし。

手首じゃなくて良かった……。
折れるわ。

「あ、あんた一人で行つて女バス^{よじ}に変態扱いでもされたらどうするのよ。お、同じ女子の私も行った方が、あんたには都合がいいんじゃないの。どうせ私、放課後も暇だし。体育館までだったら、ついていってあげてもいいんだから」

俺を掴む智里は、顔を下げて表情を隠している。しかし、何か焦っているような感が否めないのは声でわかる。

なんだ？ 今日是一段とテンションがおかしいな、智里の奴。

ま、いいか。

「わかった。じゃあ、放課後に行こうぜ」

「け、賢^{けん}も誘うんだからね。あんたと一緒に――ふ、二人っきりでうるついてた、なんて噂が流れたら承知しないから」

噂を流すのは俺じゃねえじゃん。承知しろよ。

そんなもんどうしろっつーんだっつーの……。

まあ、そんなこんなで、あいつの見学に行く事になった放課後であつた。

あの、火の玉女の元へ――。

11話・生ける伝説（後書き）

どうも。一日に二話も投稿している、珍しく真面目なNOTEです。

今回、久しぶりに展開しそうな話ですので、皆さまも楽しんでいただけるのではないかと思いますけれども。

以前から、名前だけはちょいちょい出している露原湊つゆはみなとです。『パ
ンダ』と言ってわかるあなた、結構読み込んでくれてありがとうございます。

彼女は、超人の中の超人、もう本当にキン肉マンみたいな奴です
から。

皆様、心の準備をしながら次話をご期待下さいませ。

感想、評価、意見、訂正の文句などなど、たくさんくだされば
幸いです。よろしく願います。

NOTEでした！。

12話・神とか戦乙女とか

引き続き。

昨年の夏の話だ。

屋上で昼食をとった俺と智里ちさとは午後の授業をこなし、放課となった。

「あんたは気持ちよさそうに寝てたじゃない」
愉快的冗談を言う智里だった。

俺たちは今、体育館への道を歩んでいる。俺、智里、そして智里がえらく強引に同行させた賢けんだ。

「なんで僕まで……」

「まあまあ。智里のわがままに付き合ってやってくれ」

「二人で行けばいいじゃないか。僕はまだ委員の仕事があつたのに……。強引に断っちゃったせいで白い目で見られたんだからね」

「白目で見られたのか？ ブロリーみたいな集団だな」

「冗談じゃないよ……」

「本気で落ち込むなよ」

「ってか委員会に入ってたのが、こいつ。同じクラスなのに知らなかった。」

「生活委員だよ」

「生活……？ ああ、風紀委員会か」

この学校はちつとばかり変わってる。風紀委員会というものの代わりに、生活委員会があるのだ。つっても、あまり変わらないのだけど。しかし、あそこだけは苦手だな、俺……。

厳格過ぎるもん、あそこ。

「いいだろ？ これから学園スターの露原つゆはらのところに行くんだから」

「露原？ ツて、あの、露原神話の露原湊みなとさん？」

そんなものがあるのか？

ファンクラブならいざ知らず、神格化されたとあっちゃあ、なんだか宗教的で恐いな。

「ファンクラブもあるよ。それも、あちこちにね。彼女のファンは男子だけでなく、女子の大多数までもが魅力にとりつかれているんだ」

「へえ。男女の境もなくスター……いや、ゴツドか」

同じ雲の上の存在でも、こうなるとニュアンスが全然違うな。

「しかもファンクラブから集めた資金でプロのカメラマンを雇って隠し撮り、そのプロマイドは万単位で取引されるらしいよ」

とりつかれてるとか、隠し撮りとか、取引とか——なんだか学園の暗黒面の中心点みたいな話だな。

「ファンクラブ同士が競い合うせいで、今やどこが公式が大々的に決めようとしてもしてられないし。しかもその渦中の張本人は、そんな自覚がないらしくて」

「なるほど。周りが勝手にギャーギャー騒いでるってことか。エ。力様みたいだな」

そこはさすがに直に言うともまずそうなので、あえて丸印を入れてみました。

しかしまあ、それだけのやつに今から会いに行こうってこの行為自体、ファンクラブにとってみれば、結構な先走りだと思われるんじゃないあ……。

なんだか、背中に悪寒が走った。

しかし——なるほどわかった。

昼に屋上で、智里が言っていた事理由。

『今注目の、というか、注視されている一年生なのよ。いい意味でも、悪い意味でもね』

智里はそう話していた。

悪い意味ってのは、要は『目立ち過ぎ』らしい。

悪目立ちじゃなければいいわけではないのか。なかなか学習になる議題だな。

「でさ、もの知り賢ちゃん」

「何、そのなぜだか気分の悪くなる呼称は……」

「バスケットはさあ、確かチームプレイのスポーツだよな？」

「？ そうだよ。どうしたの今更？」

「でもさ、あいつは一人でも勝てるようなやつなのか？ 話を聞いてると、別にそんなこと容易い感じに思えるけど」

わからないが、俺はなぜだか引つ掛かった。

智里の言うテクニクがあれば、そりゃずば抜けた身体能力なのは認めるが――。

「周りがついていかない、って言うんでしょ？ 陽」

智里が口を開いた。道中、今まで口を開かなかった智里。別に、そんなものでもいいのだろうけど。

「そうだな、智里の言う通りだ。人つてのは、優れても能力に乏しくて、人はついてこないんだ」

過ぎたるは及ばざるが如し、だったか。

まさにその通り。昔の日本人は偉大だな。

「それは孔子だよ。中国人」

賢はそう言った。

そうでした。

「と、とにかく――だ。ザコいやつにはついていくなんで無理だし、だからってライオンクラスに子猫クラスがついていこうったって無理な話だ。チーム内で、どうしてそんなに人望が得られるのかなって」

これは素朴な疑問。

別に俺が、人望が欲しいわけではないが、ちよっただけ気になった。

「彼女はね、この短期間で――中学から高校に上がるその過程で、強くなったんだよ。精神的にね」

賢は、急に口調を低くして話し始めた。

「彼女はね、弱小中学のバスケットボール部に入ってたんだ。この高

校に入ってきた当時と同じような境遇に、ね。彼女は、入った当時から全国制覇の夢を謳^{うた}ってたんだ。しかし、彼女はともかく、周りは全国などいける実力者ではない。そこで彼女は――選定したんだ」「選定?」

「簡単に言えば、スカウトだよ」

「なるほど。他の部活から、掛け持ちでもいいからって勧誘したのか」

俺が理解したように言ってみせると、賢は「いや」と否定した。

「彼女が選んだのは全員、運動部に入っていない人たちだったんだ」「は?」

「バスケットどこか、運動にさえ素人同然のやつを投入したってのか?」

「いくらなんでもそんな――」

「性格や向いている向いていないなんて関係なく、彼女は、生徒一人一人のボディバランスをチェックしたんだよ。運動、それも、バスケットに向いている身体をね」

身体能力を見たのではなく、身体そのものを見た。

賢はそう言った。

「いくらトレーニングしても、バスケットに精通していなくても、バスケット向きの身体でなければ、必ず壁にぶつかり山を迎える。そこで、天性の身体を探し出して、一からバスケットを教え込んだんだ。彼女直々のスパルタで」

「そ、それで、うまくなるもんなのか……?」

「現に彼女たちは全国区へ。露原さんが三年生になった年には日本を制した。露原さんはプレーヤーとしてだけでなく、コーチングやマネージング能力も抜群だったんだ」

おいおい……。

本当の超人だぞ、そりゃ。

「それでね、陽――」

智里が、賢の後を継ぐように言う。

「彼女はそこから、『ワルキューレ』って呼ばれるようになったの。」

「わ、わる？ キュリー？」

「ワルキューレっ。英語でいえばヴァルキリー、空を駆ける戦乙女よ。死んだ優秀な勇者の魂を集め、第五の世界であるグラスヘイムに建った神々の戦場へ導くそうよ。この場合、死んだかどうかはともかく、優秀な勇者は身体能力の優れた人、ヴァルハラがバスケットコートってことよ」

「へえ、ワルキューレね……。なるほどそっくりだな」

智里は俺より少し成績がいいってくらいなのに、なんでそんなこと知ってんだろ？ そんなに有名なのか？

俺のそんな疑問などいざ知らず、智里は続ける。

「ちなみにワルキューレが勇者たちの魂を育てている理由は、最終決戦ラグナロクで戦わせるためのよ。そこからいくと、彼女の最終決戦に対する執着心がのぞけるってこと」

「へえ。うまいこと言うやつがいるもんだな」

しかし、俺が感嘆の声をあげたのにもかかわらず、智里はあまり明るくない表情で溜息をついた。

こいつ、なんでこんなに感情の起伏が激しいんだ？

「でも、他の——初期からいた部員が反発したのよ」

智里は重々しく言う。

「今までずっと練習してきたのに、そんなに簡単に実力で越してレギュラーになれたら、それは頭に来るじゃない。だから、他の部員は皆気持ちのすっきりしないまま過ごしてたのよ。だから、高校に入ってから彼女は——」

その言葉は聞かずじまいで、俺たちは、いよいよ体育館へと着くのであった。

12話・神とか戦乙女とか（後書き）

過去の回想が続いていますNOTEです。

過去の回想と言いますか、時間を戻した、と言う体^{てい}で進めている次第です。

つゆはるかな
露原湊本人が出てこないのですが、次回に必ず出しますので、彼女の本来の姿がお披露目になるのは、もう少し後日、ということになりますね。

本当は今回の後半にでも、と思ったんですが……なにぶん私がずぼらなもので。

感想、評価、ご意見、辛口コメント、お気に入り登録なんかをしてくれると感激の極みですので、ぜひお願いします。しおりを挟んでいただだけでも結構ですので、これからもよろしくです。

13話・繋がり

噂ってのは怖いよねー。

みんな勝手にあれこれ嘯^{うそ}いちゃってさ。

え？　なんでって？

火のない所に煙は立たないって？

バーカ。温泉にだって白い煙はモクモクと立ってんじゃん。

あれは温泉だって？　湯気^{ゆげ}だって？

温泉のない所に湯気は立たないってか？

おいおい。

とにかく、煙なんてどこにだって立つだろうがよ。

た^{ゆだ}とえ火がなかるうが、温泉がなかるうが、寒いところで汗かいて茹^ゆってるデブがいなかるうが、

どこにだってそんなもんは立つよ。

けどな、根源があるかどうかの話じゃねえんだ。

もともとそいつオリジンのストーリーに、根だの葉だのいろいろなもん生えさせてば撒^まくやつっているじゃん。

例えば？

例えばって……。

まあ、高校一年生女子のくせにダンクシュートや片手スリーポイントシュートを決めるバケモンとかさ。

部活動への勧誘だからって、授業の合間にパンダのきぐるみ着て学校を徘徊。拳句の果てにはその行為のお咎^{とが}めで、校則に『平日の校内でのきぐるみ着用禁止』なんて載せる女子高生とかさ。

……………。

まさか。

そんなやつがいるわけねえじゃ——

「本当だぜイ！」

親指を立てながら、露原湊はそう言ってみせた。

俺と賢^{けん}、智里^{ちさと}の三人は、俺の提案で放課後に女子バスケットボールの練習風景を見にやって来ていた。いや、本来の目的は露原神話の教祖様、露原湊を一目見ること、なのだが。

体育館への入口へと至ると、一人の生徒が俺たちの方へと駆けてくるのが見えた。

「あ！ 竜崎陽^{りゅうせきひなた}！」

そんなことを口走りながら。

放課後ということも、部活練習中ということもあって、その子はネイビーのジャージを着て俺たちと対談している。

「私立彩桜学園一年D組、女子バスケットボール部レギュラー。ボクが露原湊だぞ」

快活な口先に、凜とした瞳、シュツと通った顎、スポーティな黒のショートカットに決め込んだ少女が、そこにはいた。

そう、俺の目の前に。

しかしまあ、どうだろう。

女子を見下げることは何度となくあるものの……。

堅苦しい肩書を交えた自己紹介は、随分と下の方から聞こえてきた。

露原湊の身長は、153センチしかなかった。

……………。

はあ！？

「き、ききき、君が、露原湊！？」

え！？

ウソ！？

まちで！？

ちっせえ！！

その時、俺の額に何か固いものが当たった。

なんだろ？ これ。

床に落ちたそれを見ると、それは小さな小石だった。なんでこん

なもん降ってくだよ、この学校は。

しかし俺に起こった些細な変化を完全に無視し、露原は続ける。

「さあさあ座って。せっかく来てくれたんだ、ゆっくり話そうよ」

露原が手を伸ばした方向には、確かにパイプ椅子があった。

学園一のスターの申し出だ、俺たちも断るのは気が引けた。俺たちがパイプ椅子に腰を下ろしている最中も、他の女子バスケット部員たちはせっせと練習に励んでいる。

「ねえねえ、いいの？ 湊をあのままにしといて」

「いいのいいの、いつものことなんだから。ちやほやされて、ファンクラブまでできちゃって、そのファンクラブの威圧のせいで、彼女を訪れる人なんて滅多にいなかったんだから」

「そうそう。たまに人が来ると、練習でもなんでもそっちのけで歓迎しちゃうんだから」

何人かの部員は、そんなことを囁いているようだった。

グロリースター ロングリースター

栄光星は孤独星か……。

これだけでもはやされたら、確かにそうなのだろうな。さておき。

いつの間にかセットしてあったパイプ椅子は四つあった。椅子に向かつて右から、賢、智里、露原、俺、という順に座った。

うーん。

これはどんな組み合わせなのだろうか。

この席順、難儀な点もなければ無難な点もない。

ちなみに、露原は俺の隣に座りたかったようだ。

いや、別に自惚れでも独りよがりでもない。俺が端に座ってから、

智里が隣に座ろうとすると、露原は猛ダッシュで、ワープでも使ったんじゃないかという速度で、既にパイプ椅子へと座っていた。

生物の動きじゃねえ。

宇宙戦艦ヤマトがお前は。

「それで、今日は何の用だ、竜崎陽。こうしてわざわざ練習中に訪ねてくるなんて、よっぽどの事情がありそうで、いささか恐ろしい

気持ちもあるよ」

「ちよつと待つて。陽、あなた露原さんと知り合いなの？」

露原の言葉に、智里は疑問を持ったようだった。

しかし、俺は露原湊のことを知らない。

100%完璧に全くもって認知していないのだ。少なくとも、昼休みに屋上で知った程度。視認したことなんて毛頭無い。

教頭の毛髪くらい無い。

.....。

「なに笑ってんのよ、陽」

とにかく、俺は露原の存在を知らなかった。

「——なあ露原、なんで俺のことを知ってたんだよ？」

「ん？ ああ、前からね、噂として聞いてたんだ」

「噂？ スターの露原にまで届く寛大な噂は存在しないはずだぞ」

「いや、ね。ボクは時々、何ヶ月か毎にいろんな中学を回るんだ。」

ほら、ボクらの学校、日曜日は部活動が強制的に休みになるだろ？

『一週間に一度は休め』というご達しでさ」

確かに。

部活動のかけらもない俺が言っても、正否が怪しい話だと言われるかもしれないが、大体、露原の言う通りだ。いくら全国区になったとはいえ、日曜日に大会があるという場合でもなければ、その日くらいは勉強に励め、と、そういうことらしい。

「でも、ボクたちとしても、次の大会に備えて練習の一つもしたいところなんだよねえ。だから、どこかの中学校や体育館を貸してもらって、練習してるというわけ」

「へえ、殊勝じゆせうなこったな。さすがは全国レベルの実績を持った人たちだ」

「そこで、先々月から今月まで、ある中学校に行って練習をしたわけだけど、廊下でよくすれ違う子と意気投合しちゃってね。よく話すようになっただ。その子から聞いたのが、竜崎陽、君の事だったってわけ」

おやおや？

ちまた
巷の中学生に噂されるほど、もしかして俺ってモテモテなのかしら？

まあ、歳の差つてもものも社会性つてもものもあるし、付き合うとかそんな話にはなれないが、お年頃の女子に人気があるとあったら、そりゃ悪い気は сенでしよ。

「その子はな、ボクに、竜崎陽という人間の外見、魅力、そして双子であることまで楽しそうに話してくれるんだ」

「なるほどな。外見まで教えられて、双子だという事実まで知っていれば、こうして会っても混乱することはないってわけか」

「まさか、本当に会えるとは思わなかったけどね」

「しかし露原、お前、なんで俺の方が竜崎陽だってわかったんだ？ こう言っちゃ気持ち悪いが、俺と賢は一卵性双生児。結構似たり寄ったりな外見してるぜ？」

「ああ、それはね、キミからの方が、あの子と同じ匂いが多く香ってきたからさ」

「それは相当な嗅覚だな……。犬かお前は」

ん？

待てよ？

あの子と同じ匂い？

ってことは、一緒に住んでいるか、もしくはたくさん時間一緒にいるか、ということになるよな。

今現在、俺と一緒に暮らしてるのは、賢一人なわけだし。

ってことは、一緒にいる時間が多い。あ、いや、そしてさらに他の人とはより身体的距離を近く保っている人、ということになるよな。

そんな中学生、俺は一人しか心当たりがないんですけど……。

「お、おいおい露原……。その、お前と意気投合しちゃったその子、その子の名前って……。まさか……」

「ん？ ああ、確かに聞いたよ。覚えてる。」

確か……姫宮彩
ひめみやさや

——だっ
たかな」

13話・繋がり（後書き）

衝撃の事実！？

が連続してましたね。

明けてましておめでとunggございます。NOTEです。

新年初更新、というわけで、だいぶお久しぶりな気が致します。
前回の更新から13日、約2週間も留守にしてしまいましたからね。

さて、今回もよくわからん展開に突入しまして、年をまたいでも
やることかどうか、私自身、非常に悩み放題ではありますけれども、
今後とも、よろしくお願いいたします。

NOTEでした。

感想、評価、レビュー、意見、ダメ出し、誤字脱字の訂正など、
どなたでも結構です。気が付いたことや心を突いたことがござい
ましたら、なんとでも言ってください。

14話・shooting star

露原湊^{つゆはらみなと}とは、あまり話すことはなかった。
当然だろう。

俺たちは元々、彼女のプレイ風景を見に行っただけなのだから。
しばらくとりとめもない話をした後、彼女は練習へと戻っていった。

まあ結局のところ、それから再開した部活動での練習試合を見ることで、俺たちは、本来の目的であるところの彼女を見ることができたわけだが。

露原湊のそのプレイは——圧巻だった。

目を見張るといつか、舌を巻くといつか……。

露原が初めてその姿を前面に曝^{はく}したのは、ジャンプボールの時だ。
紺色の、上下がそれぞれ長いジャージを脱ぎ、銀色の、肌に十分な
余裕のあるユニフォームを着ていた。上着は肩口で大きく開き、ハ
ーフパンツは膝下でダボダボと揺れる。

いかにも動きやすそうなショートカットに、凜とした目。やや華^{きや}
奢^{しゃ}な体つき。

一度ちゃんと、女の子だ、と明言してくれなければただの少年に
しか見えない。喋り方一つとっても、それはただひたすらに男の子
のようだった。

「確かにあの体じゃあ、俊敏さでは天下なんだろうけど……」

俺の、智里^{ちり}を挟んだ隣（露原がいなくなったことで一つ詰めた。
俺が詰めようとしたら智里が強引に席を取りやがった）から、賢の
声が聞こえてきた。

賢の言わんとすることはわかる。というよりも大いに同感だ。

あの子に名前を呼ばれたその瞬間から、

すぐ隣で会話をしていたその最中にも、彼女が、智里が口頭で賞賛したスーパースターと同一人物とはとても思えない。残念ながら、元々が互いの身長差、筋力差、体格差からの影響が激しいのがバスケの世界。

男子ほど荒々しくないが、女子も、生まれもつての格差は変わらないのだ。

しかしそんな俺の常識的概念は、たった数秒で、音を立てて崩れさることになる。

笛の音を合図に、彼女は——飛んだ。

跳び上がったのではない。

飛び立ったと言った方がいい。

ジャンプボールの相手はそこそ背の高い女子だったのだが、露原の脚力は、ボールに吸いつくようなハイジャンプを見せた。

結構な高さまで打ち上げられたボールを掌に収め、瞬時に遠くの味方へとパス。受け取ったメンバーはゴールへ。

あっという間だった。いや、声など出る余地もない。

見てみるよあの相手の顔。口をポカーンと開けて、眼なんかあのままじゃ干ばつ地帯になっちまうぞ。

まあ、この瞬間のこれが出オチではないことを、思い知らされるわけで。

まるで呼吸をするみたいに——なんてよく聞くんが、これは生理現象なんて生易しいものじゃない。

まるでそこにいたかのようにボールを持った露原がいる。ボールを奪おうとする己の目の前に。

そして、その一秒後には、自分の後ろに、まるでそこにいたかのように自分を抜いている。

存在はあるのに、存在がつかめない。

眼が追いつくスピードなのに、眼に留まらぬスピード。

すれ違つるように相手を抜いて、両手にボールを持つ——両足で踏み切った。

飛ぶ。

飛行する。

上昇し、右手をゴールに入れ込んだ。

まるで――

そう、まるで籠の中に割れ物でも入れるかのように、そっと入れた。

「ダンクシュート!？」

ビビった。そりゃビビるよ。高校生女子がそこまで跳んだら異常事態だ。世界を狙える（競技はわからんけど）。

彼女は自由落下し、リングへと片手でぶら下がってこちらに、

「ぶいぶいピース!」

と二本指を突き立てた。

ありえねえ。

そんな事も束の間。彼女はまたもボールの主導権を握っていた（いつそ試合の主導権も握つてると思うけど）。

彼女のボールさばきには惚れる。ファンクラブが出来るわけだ。

女子ながらもあの美少年っぷり、その上ここまでのスポーツセンスを発揮されたら、な。

そう考える間にも3人を立て続けに抜き去った彼女は、壁を前にする。

スリーポイントのライン上。

巨人とまでは言えないが、そこそこ高い背の相手が、露原をすっぽり覆うように手を広げる。

その体格差に露原は驚いたのか、両手でボールを持ってしまった。露原ほどの俊足でゴール前に行けるものなどそうそういない。つまり、近くに味方は皆無なのだ。

こんな時どうする？

抜くのか？

無理だ。このままドリブルなんかしたら、ダブルドリブルになる。つまり――ファール。そんな根本的にして致命的ミスを犯す者はい

ない。

露原ならどうする。

彼女は跳んだのだった。

足を前に蹴り出し、身体を後方へと傾けながら——バックステップ。そのまま、相対的に伸ばした腕から放たれたボールは、これまたよく聞く表現だが——吸い込まれるように、ゴールへと誘われた。

それが当然であるように。

そこに収まる運命のように。

それがそのボールに宿せられた結果であるかのように。

「どうだ、竜崎陽！ 凄いだろ」

ビシッと指さされながらも、俺は硬直する。

そんなに圧倒的なモン見せられたら、感情も感想もねえよ。

まったく——

「凄過ぎんだよ、バーカ」

お前のせいだ。

お前のプレイが圧巻だったせいで、

この話がスポ根になるとこだったじゃんか。

14話・shooting star（後書き）

どうも御無沙汰しています。NOTEです。

最近、あまり顔をださなかったせいか、このまま書かないんじゃないか……なんて声が聞こえてくる気分です。

申し訳ありません。

読んでくださっている皆様には、深く感謝と謝罪の念を打ち明けたいと思います。

それに、文字数も少なくなっていると感じているのは私自身だけではないと思いますね。

何でしょう。書きたいものを書きたいだけ書くともなると、自然と最小限に抑えてしまうのが私のクセなのでしょう。

まあ、紛らわしいのも、まどろっこしいのも嫌ですよ。

これからは、せめて1週間に1度はお目にかかれるよう努力いたします。

NOTEでした。

感想、評価、誤字脱字の指摘や世間話など、どんどん送ってくださいませ。

P・S・最後に关しては返信できかねますので……。

15話・語呂は覚えやすく（前書き）

現在、2年時の陽たちへと戻ります。

15話・語呂は覚えやすく

クロニクル。そんな言葉を聞いたことがある。

記録。編年体、または編年史。

なんでもない。本当にただの言葉だ。その裏に何かの歴史があるわけでも、言葉の成り立ちやこれまで経てきた生い立ちに特徴的な部分があるわけでもない。

全年代にわかりやすく伝えるのなら、年表、と言った方がいいだろう。

社会科の教科書や、国語の文学作品なんかの出版年なんかを整理してあるあれだ。

○○年に××がありました。

またその何年後の○○年にはまた違う××が……みたいな。

時系列を、きちんと見分けられるもの。

そんな世界史の年表と、俺は壮絶なならめっこを繰り返していた。

「え」と……『710立派な平城京』とか、『794ウグイス平安

京』だろ。あとは……」

「朝だつていうのに薄気味うすきみの悪い呪文なんか唱えないでよね」

朝だつていうのに勉強まじめしている真面目まじめクンな俺に対して、心ない言葉が浴びせられた。

こんな強気な親しげトークは一人しかいない。

智里ちりだ。

彼女は俺の隣の席（本来から彼女の席だけど）に、横向きで――俺に身体からだの正面を向けてどっかりと腰を下ろした。

「あのねえ、陽よう。いくら日本史の小テストがあるからって言っても、そこまで手の込んだ詰め込みはいらないはずだけど？ それに、小学生でも習う語呂を、いまさら本気で取り組まれてもねえ……」

「うるさいな。俺とお前とじゃ、頭の出来が違うんだよ」

「下から言つてて惨めになるようなセリフを吐かないでよ」
ほっとけ！

つつーか、俺と智里は同じような成績だったはずなんじゃないのか！？　なんで春休み明けのテストで高得点なんか叩き出してんだよこいつは！！

はっ！

まさか、俺に内緒で、こっそり賢けんと、ひ・み・つのとつくんだぞッ、てへ。

みたいな展開としゃれ込んでたんじゃあ……！

許さん！　そんなのお父さん許さないよ！

昼間やら夜間やら問わず、若い男女が人目を盗んでイチヤイチヤと。

「バツカじゃないの！」

スリートボンバー

妄想爆発していた俺の頭に、顔を真つ赤に染めた智里は、丸めたノートをフルスイングした。

教室内に花火のような音が咲いた。

「そんなもんで叩くなよ！　火花が散ったぞ！」

「変なこと考えるからでしょ。自分と同じ顔が自分の幼馴染と、い……イチヤイチヤなんて、あんたには罪悪感つてものがないの？」

「人の頭を野球ボールみたいにしか扱えないお前に諭さとされたくねえよ」

そんな頭で悟ることなんかできねえだろ。

「それに、仕方ねえだろ。やっぱり、けしからんじゃないか。老若男女マイナス・老人が、独り身のことなんか気にせずに……」

「ただのひがみじゃないの」

付き合つてることを否定しろよ。勘違いするだろうが。俺も読者も。

「しかも四字熟語と四則演算で、『自分は勉強できます』アピールしないですよ。若い男女、って素直に言つた方が断然早いんだから」
「……………」

そこまで計算する知能がなかったのか。

言いやすいしね、後者そっちの方が。

「やってることはマイナスだし。それは数学じゃなくて算数の問題でしょうが。墓穴を掘り過ぎ」

それ以上バカにするな！

俺を可哀想だとは思わないのか！？

次から次へと、矢継ぎ早に暴言ぶち込みやがって……。

アサルトライフル
突撃銃かお前は。

まあ、ともかく。

「つてか、本当に割れたかと思ったぞ。どうしてくれんだよ。今の時間に覚えた知識が飛び散っちまってたら」

「ああ、水しぶきも一緒に飛び散ったけどね」

「スプラッシュヒットが打てるのか！？」

メジャーリーガーみたいな女だな。

筋肉ビチビチ！ みたいな。キモ……。

智里は急に俺へと向き直ったかと思うと、

「鎌倉幕府は何年に起ち上がった？」

「は？ あ、ああ……ええと、な。良い国だろ？ よいくに…… 4
192年！」

「相当な未来人なのね、源頼朝って……」

「……………」

2千年後、もう一度鎌倉幕府が開かれるという俺の大予言が、ここに発表された瞬間だった。

もう帰りたい、家に。

つか還りたい、土に。

朝のその後は、智里に出してもらった問題で強化復習を試み、日本史のテストに備えた。日本史というか、それは本当に、なんの問題もなくなんの障害もなく、簡単過ぎると思えるほどの内容だった。大概が中学生末期の知識でしかなかった。

日本史と呼ぶべきか、それとも中学生で習う社会と呼ぶべきか、それだけで悩めるほどの、それは内容だった。

まあ、朝の段階で鎌倉幕府の年号（もちろん、正しくは1192年）を間違える時点で俺の進級撤回が注視されたが、智里の言った問題がほとんどそのまま出たのが功を奏したのか、パーフェクトに近い点数を叩き出すことができた。

勉強もテストも終わり、放課まではあと1限というところに差しかった。

が。

今日は、なにやらイベントがあるらしい。

1日のラストにイベントなんて、学年集会やらなんやらと口くでもないものが始まるのかと思いきや、

「昨日言ってたでしよ、陽」

俺たちは今、体育館へと入場したところだ。イベント会場は体育館らしいから。設置されていたパイプ椅子に座ったところで、俺の片割れ、双子の兄である賢はそう告げた。

「今日は、新入生用の部活動案内が開かれるんだよ」

「ん……ああ、そうか」

……。

ん？

「いやいや、意味わかんねえよ。俺たちは新入生じゃねえじゃん。

あれは毎年、新入生が参加する中、上級生は教室でのんびりと授業に精を出すっていうものだったはずだろ？」

事実、去年、つまり俺たちが新入生として参加した時は、開催場所である体育館の中には紹介を取り仕切る先輩たち以外に、上級生の姿は見えなかったぞ。

最小限の（希望の）視線がある中だから、安心して、それぞれの部活動の先輩たちの雄姿が光る巨大スクリーンに集中できたんだからな。

よく知らない他者に周りを囲われるというのは、あまりいい気分

ではない。

肩身が狭いのだ。

初めて外に出された際、檻の向こうからこっちを見ているお客さんに怯えて喚く小動物みたいに。

まあ、舞台上がって上級生と一緒に部活動の宣伝をしていた火の玉女も、去年はいたけどな。

「今回、上級生も見られるようにするっていうのも、露原さんの意見みたいだよ」

なるほど。

露原湊。

「ご多分に漏れず、今回の異例事項にも、その火の玉女が関わっているらしい。」

ったく。

興味を持ったもん全部に干渉しようとする幼児期か、あいつは。

なんて青春まつただ中な人生を謳歌してるんだ。羨ましい。

「それにしても、そう次から次へと、学校側もよくあいつの意見を取り入れたがるよな」

「『最近自分自身のことを知る人間が少なく、それがゆえに客観的な自己評価が出来ない。だから、まずは自分たちの学校のことからでも熱心に知っていただき、客観的な意見を持つことで進路に活かしてほしい』……っていうのが、露原さんの言い分だよ」

……おお。

もつともらしい言い方をするじゃないか、あの女。

2年生という中だるみの時期になって、いよいよもってか、学も生氣もつけたみたいだな。

自分自身と学校をつなげるといのは、若干の無理が見受けられるが……。

しかし、彼女ならそれを一気に、早口に言つてのけられるだろう。そこまで学園のスターに圧倒されたら、そら怯むわな。

会場の準備が整ったのか、ガヤガヤとした体育館には、「お静か

に願います」とアナウンスが入った。

「ただいまから、新人生への部活動紹介が始まります。皆様、各部の燃える思いに耳を傾け、ご静聴の程、よろしくお願いいたします」
バカ丁寧な音声が消え、スピーカーからはドラムロールが流れ始めた。

お、おいなんだ？

アカデミー賞の発表だって、もっと慎ましやかに始めるご時世で、高校の集会でドラムロールって……。

ドン！

最後の打音が鳴り響いたのと同じ、ステージの上には、一つの影が飛び出した。

いや、飛び降りた。

ステージの上に――飛び降りたのだ。

どこからかと言われれば、天井からだとしか言いようがない。

その影は真つ黒なマントを羽織り、シルクハットを被っていた。
影の身体が小柄なせいか、マントは地面をずるずると這いずつて
るし、シルクハットも右へ左へグラグラと傾き放題だ。

そして俺には、なんだか嫌な予感が胸の奥に疼き始めた。

「レディース！ エン！ ジェントルメン！ 今宵のささやかな
パーティーにご参加いただき、感謝の念に堪えません」

欧風なのか、古風なのか、それともどこかのオヤジなのか区別が
つかない影。

パーティーって……。

「短い時間ではございますが、皆様どうぞ！ ごゆるりと御観覧く
ださいませ！」

勢いをつけた声に合わせて、影はマントを剥いだ。脱ぎ払ったの
だ。

客席に投げられた2品が、必死な皆様に奪われ合う中、ステージ
上の影には、黒とはほど遠い着色がなされていた。

銀色の、肌に余裕のあるバスケットのユニフォーム。肩口で大き

く開いた袖に、膝下で同等の大きさに広がる裾^{すそ}。
ダボダボとした上着とハーフパンツを備えた少女――

露原湊は、そこに立っていた。

15話・語呂は覚えやすく（後書き）

お久しぶりですね。NOTEです。

いつも思うのですが、というか小学生くらいから思っていたのですが、「なんと立派な……」とか、「いい国造ろう……」とか、いろいろな語呂は、一体誰が作ったのだろうか、と。

もしかしたら、どこかの歴史の先生かもしれないし、もしかしたら、どこかの学生かもしれない。

明治の人が考えたのか、江戸時代の人なのか。

どの時代に生まれても、言葉は少しずつ変わっていくものです。例えば平安と現在、平成の言葉遣いは違うし、今の時代に使われている語呂が、未来には違う言い回しになっているかもしれない。ギャル文字や顔文字なんかで構成されているのかもしれないからね。

それを考えた上で、自分なりにわかりやすい語呂を作るのならば、きつと歴史がわかりやすくなるのではないでしょうか。

なんて言ってますが、私に作るだけの力があるのか……。

落ち込むことなら誰よりも早く取り組めるNOTEでした。

感想、意見、評価、レビュー、文句なんかや指摘も募集しています。

16話・受難

ダンツ！と、ステージの上に（おそらくは天井から）飛び降り着地するという荒技あつわざかつ妙技を繰り広げた露原湊つづはらみなとの買って出た役目とは、いわゆる司会進行だった。

なんのことはない。

ただ出て来て、

「これからこんなようなことをします」と宣言し、他の部が紹介をしているときは、黙って舞台袖に待機しているのみだった。

「あいつ、なんの為にあんなことしてんだろう」

心の中に湧いて出た疑問を、口に出してみると、隣に座っていた賢けんも眉をひそめる。

「うーん。露原さんの場合、元が『お祭り好き』な印象があるからね。ここまでの進行に問題点もないし。ただ、やりたかっただけなんじゃないのかな？」

「そんなちっぽけな願望だけで動くタマか？ あいつが」

絶対に何かを企んでいるに違いない。

校内をきぐるみで徘徊していたやつだぞ？

あんなハスキーなパンダがどこにいる、なんて誰にともなく聞いてしまいたい程に目立っていた。校則を一部とはいえ改変させた人間が、不良とは言えないが決して善良でもない人間が、ただ舞台袖で黙っているわけが……。

そう思っ、もう一度、舞台上の彼女を見てみると、彼女——露原湊は眠っていた。

マイクを持った両手を下ろし、小さな身体を支える脚を揃え、立つたまま、寝ていた。

「ありえねえ」

つい口に出たが、これが精一杯の本心。

人間の最終点を見た気さえした。

ここまで衝撃的で破壊的なショックは初めてだ。どんなに疲れていても、いやむしろ身体が疲れているからこそ、立ったままの状態
で眠るなんてありえねえだろ。

あんなに、泥みたいに深々と……。

「くぴー……」なんて寝息を立てているのがかすかにわかるし。それにわずかだが、薄い色合いの艶つややかな唇から、なにやら光るものが流れている。一見綺麗に見えるが、どう言ったところでマヌケ面にしたたるヨダレでしかない。

美少年のように均整のとれた小顔で、スポーティな体つき。

そんな風体で眠る彼女は、とてもこの学校のスターだとは思えない。顔そのものは可愛いものの、飾らない性格は、だらしない女の子
子とは思えない。

あんなんじゃないあ、ファンクラブの子たちだって――

「かゝわゝいゝいゝッ」

「ねッ、ねッ。写メ撮ろうよ写メ！」

「写メよりよだれ採ろうよ！」

ま、んなわけねえか。

あの程度で碎け散る程の好評を買っているわけではない。
さすが。

他校にもファンが絶えないっていう賢の話は本当なわけだな。

あれじゃ熱中というよりも狂信に近い。軽く宗教でも開けそうだ。
露原教。

語呂が悪いな。

湊教？

いつそ英語にしてポート教、みたいな。

なんだろ……くだらねえ。

「そうか。なるほど」

バカみたいな考えに浸っていると、隣の賢は合点がいったような顔で頷いた。わざとらしいその姿に関わるのは、空氣的に少し憚はばら

れたが、このままストーリーに閼与させてあげないのも可哀想なので、仕方がなく返す。

「どうしたんだ？」

「露原さんを壇上あそこに置いた理由だよ」

「置いた？ 彼女が自分から志願したんじゃないのか？」

「本当のところはどうだか僕にはわからないけど、でも、最終的には、それが一番の最善策であり、安全策だったんだよ」

「安全？ あの火の玉女に変な暴走を起こさせないためのか？」

「それもあるよ。ああして舞台に置いておけば、当然、教師側からも見えて、管理しておけるしね。言い方は酷いけど」

管理……ね。

まるで物みたいだな。

それも、決して失くしてはならないような宝物。後者の言い方だと、響きはいいいのかもしれないが。大事に扱われていても、所詮は所有物……。

「それに、生徒と一緒に並ばせた場合の危険もあるしね」

「ファンが寄ってくるってか？」

確かに、大事な集会の最中だ。新入生もいるというのに、彼女のファンが集まって混乱が起きるなんてことになったら、後輩や校外に面目が立たないからな。いや、面子の問題か。

だからって、あんなに目立つ所で寝入る生徒に対してなんの教育的指導もしないこの学校も、おかしいとは思うけどな。

「あれ？ そのユルさがいいんだって、陽よう、いつも言ってたじゃないか」

「それでも節度は守らなきゃいかんだろ。あれじゃどの道、後輩に面目が立たないじゃないか」

「そうかな。この学校のユーモアさが表れていいと思うけどね」

「お前は本当に樂觀的だよな」

「双子の君が批判できる遺伝情報じゃないと思うよ」

確かに一理ある。

舞台上の露原が眠りこけていて、それについて在校生（主に女子連中）がガヤガヤ騒いでいるのを、ここまで楽観視している俺は十分に、楽道家なのだろう。

「それに、中には露原さん目当てにこの学校を受けた、なんて生徒も、結構大人数にわたっているようだよ」

そうなのか。

そりやまたまったく……

世も末だな。

女子バスケット部の部活動紹介は、まあ、当然のごとくというかなんというか、露原を抜かして行われた。大会も迫っているという話もあったためか、彼女は睡眠の続行を許可されたのである。

本当に甘いな、この学園。

まあそうは言っても、露原だつてまだ2年生だ。3年生にはキャプテンがいる。エースの露原とは違う、キャプテンが。部内の統率も取れていたわけだ。

考えれば、疑問だった。

なぜここまで女子バスケットボール部の中で、露原だけがあそこまで自由にされているのか、それがわからない。

俺たちが体育館に訪れたあの夏の日、露原は、瞬間的で一時的にしろ、練習を抜け、俺たちと話していたのだ。そうは言っても、話すことはなかったのだが。話をする素振りだけでも構わないといった彼女の態度からは、練習を放棄している感はなくても、どこか不思議な気持ちに汲み取れたように思う。

自由気まま——過ぎた。

果たして、練習を抜けても言及されないということがあり得るのだろうか。スターだからいいとか、試合でできればいいとか、そんなじゃあ、ないと思う。そんな事じゃ、ないだろう。

わからないけど、放課になってから、智里ちりに訊いてみることにした。

「露原さんの立ち位置はね、難しいところなんだよね」

「難しいって、どういう事だ？ それ」

「中学校の頃の話をしたでしょ？ 彼女がワルキューレと呼ばれた時代の話」

「ああ。聞いたけど」

「中学校で初期からいたメンバーを使わなかった露原さんのことを、事情を知らない周りの人間たちはもてはやしたんだけど、肝心の、部内での評価は最悪の状態だったのよ」

「ああ、そんなこと言ってたな。プレーヤーとしてでなく、コーチングやマネージング能力も抜群だったとか、なんとか。それでスカウトした人にだけ指導……とか」

これは、賢から言われた事だったか。

「高校ではね、スカウトなんてせずに、ちゃんとバスケット部にいたメンバーをマネージングなりトレーニングなりしていたんだけど……中学校の時のメンバーとの確執が、未だに引きずられたままなんだって」

「女の怒りは怖いもんなあ。前にお前のショートケーキ1個食べたくらいで、ワンホールのケーキを無理矢理買わされたっけ。しかも複数個も。おかげで向こう3ヶ月、お小遣いが出なかったんだから」

「そんなの、あんたの自業自得でしょうが」

「いや、あれは万引きで終身刑を言い渡されたもんだったぞ」

「それでね——」

話題を簡単に元に戻しやがった。戻し方は強引かつ下手くそだけだ。

「その中学時代のメンバーが、結構な過激派で……。露原さんあての脅迫文も届いたことがるとか」

「そりゃ、穏やかじゃないな……」

こんなに平和な学園を荒らそうとするなんて。気持ちにはわかるが、いくらなんでもいきすぎた制裁だろう。

そんな状況を、中学が終わってもずっとやってるなんて。
それこそ終身刑だ。

「それにここ最近になって、フアンクラブのメンバーにまで暴行事件があるみたいで……」

幸い、学園の生徒ではないらしいけど、と顔を伏せる智里。

関係——ないだろうよ。

自分たちのチームを優勝まで導いた恩人を、暴力のような形で痛めつけるのは、あんまりだろ。

「しかも証言者の話では、男も混じっているらしいのよね。だからフアンクラブのメンバーも、露原さんに接触する男の人には、厳重な警戒がされてあるらしいわ」

「男……？」

なんでだ？

中学時代とはいえ、露原が所属しているのなら女子バスケットの
はずだろう？　なんで男子がそこに混じるといふんだ……。

わからないけど、そうらしい。

ふと、そこで気がついた。あの、体育館で露原と会った時、額に
飛んで来た小さな石つぶて。あれは、もしかして、露原とコンタクト
をとった俺に対しての警戒であり警告だったのではないだろうか。
こんな時、賢ならばなにかいい推理が展開できるのではないかと
も思っただ教室内を見回したが、既に生活委員へと行った後だった。

今年も生活委員かよ、あいつ。

真面目なやつだなあ……。

俺あそこ苦手なんだけど。

智里はというとなにか用事があるらしく、今日は遅く帰る、とだけ
言っただけで別れた。

「俺も帰るか」

なにかやりきれない思いも持ちつつも、下足棚へと向かうと、
「陽ちゃーん！」

近づいてきたのは、ゴミ袋を持った彩さやだった。

「おう、彩か。進学早々掃除当番かよ。運ねえな」

「同情してくれるんだったら、一緒に帰ってくれてもいいんじゃないかな。これ猛ダツシュで捨ててくるから、ちよっと待っててくれる？」

「んーまあいいか。じゃ、一緒に帰ろうぜ」

「うん！ 行つて来ます！」

あっているのか外れているのかわからない挨拶もそこに、彼女はゴミ置き場へとダツシュしていった。

猛ダツシュだった。

屋内だというのに彼女が蹴った床からは砂埃すなほこりが舞う程、あるいはどこかのギャグマンガみたいに脚がグルグルの線で表せるんじゃないかというくらいの快速だった。

「あれはギャグ要因だな」

1人ごちて、俺は靴を履き、玄関を出た。

曇り空の下に出たところで「竜崎陽！」とフルネームを言われた気がして、その方向を振り返る。

「やあ、偶然だな、竜崎陽」

そこにいたのは、私立彩桜学園の制服に身を包んだ露原湊だった。そういえば、この姿は初めて見たかもしれない。

ユニフォーム姿で見た感じは、それはそのままバスケ少年、といった感じのスポーツ少女だったが。こうして女子の制服を見ていると、同じショートヘアの同一人物でも、なかなか印象が違って見えるものだった。ボーイッシュというのは変わらないが、こっちの方が、なんというか、真っ当に女の子しているという印象を受ける。

いささか失礼に値する感覚だとは思っけれど、な。

「いちいちフルネームで呼ぶな」

「他に呼びようがないじゃないか」

「ファーストネームという選択肢はないのか」

意外に視野の狭いスターだった。

「じゃあ、竜崎」

「それはファミリーネームだ」

お前って帰国子女だっけ？

「普通に『陽』とでも呼んでくれよ、露原」

「わかった。それならボクのこと『湊』でいいよ、陽」

ありがちな言い方で、あるいはあまりにも語彙が希薄だと言われるかもしれないが、こうして見れば、こうしていれば普通の女の子だった。

スターとかゴツドとかそんな噂も関係なく、ただ単に周囲から特別視されているだけの、普通の女の子。

彼女は、ここの校風なんか目じやないとも言いたげな、ゆるくて明るい笑顔を、俺へと向けていた。

16話・受難（後書き）

ちょっと間が延びましたNOTEです。

今回はちょっと毛色が違う話になっているような、でも別にそうとは感じられないような、曖昧な仕上がりでしょう。

ええ、別にそんな意識ありませんもん。

しかし誰もが、王道ならばこれからなにやら波乱の展開が幕を開ける不穏な空気を感じずにはいられなかったのではないのでしょうか。いつもいつでもなぜか事件に巻き込まれるというのは、主人公としての宿命みたいなものですからね。陽には頑張っしてほしいものです。

寝言のようなバカらしい話を休み休み書いているNOTEでした。

感想や評価、レビューなんかも書いていただけると大変嬉しいですよ。え？ お前を喜ばせることなんかするわけないって？ じゃあ辛辣な批評でも何でもドンと来て下さい。耐える自信はありませんけど。誤字脱字の指摘などもよろしくです。

閑話・食い問答

リビング。

俺たち4人がルームシェアリング生活を送っている中で、風呂やトイレを抜かせば唯一と言ってもいい程の共同居住空間。真のルームシェアの場所だ。

そこにはソファがあり、真ん前にはテレビが備えてある。俺はその3人掛けのソファに、右の肘掛けに傾くように座り、テレビを見ていた。

休みの日の、平和かつ優雅なひとときだ。

ソファとテレビの間のテーブル。

智里はガラス製のそれに、俺から見れば横向きに身体を入れ、みかんの皮を剥いていた。首を少し回し、バラエティー番組を見て笑っていた。

俺も、同じ場面で同じように笑う。

平和だ。

「なあ、智里」

「なに？」

「そのみかん、くれないかな？」

智里は、先程まで剥いていたみかんの皮を俺の方に差しだしてき
た。

「柑橘系の果物は皮が苦いことを知ってわざと俺にそんな仕打ちを
しているな」

「身だけ渡す人がどこの世界にいるのよ？」

「この世界ではそれが普通だろ！ さてはお前、入院患者のお見舞
いにフルーツを持って行ったことがないな！？」

「入院中にフルーツを持ってこられたこともないわよ。同情するな
ら金をくれ」

「入院の代金をせがむなよ」

「仕方ない。そんなに言うのならあげてやらないこともないわ」

智里はそういうと、割とあっさりと、俺に剥いた果実の方をくれた。

「ああ、ありがとう」

「どういたしまして」

「じゃあ、いただきます」

「召し上がれ」

俺は彼女が剥いたみかんの、くつついている何個かの内1個を剥がし、口に運んだ。

甘くも酸っぱい風味が口の中に広がる。

「ん。おいしい」

「そう」

彼女は何事もなげに、手元に残ったものを食べている。
と。

口の中に堅い質感を覚えた。

「ん？」

俺はそれを手に吐き出す。

「種か」

「種くらいは入っていて当然でしょ」

「まあ、そうだけどさ」

種を捨てて、手元の房の中からもう1つを口に運ぶ。

智里がちらちらと視線を投げてくる気配があるが、よっぽど独り占めでもしたかったのだろうか。ざまあみろ。

おいしい。

けど。

種があつた。

「……………」

「種くらいは入っていて当然でしょ」

「まあ、そうなんだけど、さ……………」

種を捨てて、手元の房の中からもう1つを口に運ぶ。

甘酸っぱくておいしい。

しかしまた。

種があった。

「お前、もしかしてわざと種が入ってるのばかり渡してないか？」

「それくらいは造作もないことでしょ。選別できるわよ」

「お前はエスパーなのか!？」

「どう、見た？ 私の超能力を」

意地悪な超能力者だった。

悪戯する事しか能がない。

能力は人間を超えていても、人間は超えていない。

人間すらできていない。

「どう？ 欲しい？ これには種が入ってないわよ？」

なんてにやけながら言ってくる智里を無視し、イライラを募らせ

ながらも俺は手元に残った最後の果実を口に入れた。

その中にはご丁寧にも、種が2個入っていた。

閑話・食い問答（後書き）

なんだこれ。

そんな感じですNOTEです。

こんな平和な日常が現実になればいいなあ、なんて思う今日この頃です。

未だ露原湊の話が終わっていない中での閑話は、あまり出たくないものだったのですが、本編の方が予想以上に長くかかってしまっている、もういいやって感じで入れちゃいました。

空気が壊れちゃったという方がいたらすいません。

17話・暴走

星はたくさん人間たちに見られている。その人間たちは星のことがいつでも見えているから、どうしても頭の中からは離れないし、記憶の中からは消えないものだ。

いつも自分のどこかで、あるいは望んでいなくとも輝いてしまっている、期待の星であり眩し過ぎる星なのだ。

だがしかし、星はそんな人間たちのことが見えているのだろうか。例えてみる。

星と言うのは、夜空には数多あまたも輝くものたちだ。世界中を数えてみると、スターと呼ばれるようなきらめく人物など、それこそ星の数ほどれけるだろう。夜空に瞬くあれのように。

しかし、それが、太陽系の中心的存在であり地上を明るく満たす恒星であるところの太陽や、地球の周囲を、ごく身近を回って人々を優しく照らす衛星であるところの月。

それらのような、特別な存在がこの世にいたら。

自分の影響力が強すぎるため、何万キロも何万光年も離れたところにまで影響を及ぼすような、そんな星のような存在が、実際にいるとしたら……。

「なあ、湊みなと……」

「ん、なんだ？ 陽よう」

「……………」

やっぱり、呼びづれえ……。

あまり知らない女子の名前を呼べないだとか、そんな初恋中の小学生みたいなことを言うつもりもないし、そもそもがそんな繊細な神経の持ち主というわけでもないのだけれど。

そこはそれ、やっぱり親交があまり深まっていないところが難点というか。そこに難色を示しているのだ。

だがおいおいそんな……今更になつて「やっぱり名前で呼び合うのはやめよう」なんて、もやしっ子みたいな……草食系男子どころか、食われる野菜の方になっちゃうじゃん。

いや、断じて「名前で呼ぶのが恥ずかしい」とか、女子が苦手なギャルゲーの主人公格のような性格では、俺はないと確信している。確証はないけど。

しかしこんな、1年の付き合いがありながらほとんど会っていないこの女と、名前で呼び合う程の仲にまで進行してしまったら、フアンクラブの人間たちのどんなに痛い視線と冷戦に苛まされることか。

「？ どうした？ 呼んでおいて沈黙とは、風に聴く竜崎陽ともあるう人間が、その名声を失くしかねないよ」

「お前が彩に何を吹きこまれたのかはとうとうわからずじまいだが、しかしお前、俺に名声なんかこれっぽっちもないからな」

高校1年時は随分と平和に暮らさせてもらった。本当に、毎日が穏やかで長閑な時間だった。

貴重だとも思えるその期間は、俺に本当の楽しい学園生活を――青春を、教えてくれたんだ。

色恋沙汰がなかったのは非常に残念の極みだが、それは俺の努力不足ということだ。

「そうか？ 彩ちゃんが話してくれた陽の素性や素行からすれば、ボクは全幅の信頼も全身全霊の期待も抱けるけれどな」

楽しそうに笑顔を作つて、まるでというよりも、まんまで女の子の露原と対峙するこの行為そのものが恋愛フラグ設置中なのだとし、でも、俺からすれば縁遠いことなのだ。

相手がスターだとしても。

相手が女の子だとしても。

それはそれだけであつて、それでしかないのだから。

「で、なんでここにいるんだ？ 放課後はバスケット部、行かなくてい

いのか？」

「ああ。今日は部活動の説明会があったからね。別に活動に含まれるわけではないけれど、体育館の後片付けがあるらしいし、このままじゃ開始時間も遅れるってことで、今日のところは暇をもらったよ」

「へえ、そうか。あのスクリーン、想像以上にでかいもんなあ」

だから新入生であるところの彩も、今日は部活動の見学とかには行かなかったってわけね。納得。

……ん？ 彩、か……。

「そう言えばお前、俺の情報は全部彩からもらってたんだよな？」

「ん、そうだぞ。先に彩ちゃんの名前を出しておいて、これはまたおかしいこと言うな」

「いや、まあそうなんだけど。それでお前、去年の夏に言っていたあのこと、日曜にはいろんな中学を回ってるって言ってたことだけど、あの後もずっと同じあの中学校に行ってるのか？」

「いや、そんなことはないよ。日曜にだって練習がある中学校は多いし、あそこもその忙しい中学校の1つだったからね。練習や、それに男子中学生や高校生チームにまで試合を挑まれてね。こちらとしてもそれどころじゃなかったんだ。それに日曜日ということもあってか、彩ちゃんだって、そうそう毎週来てくれているわけじゃなかったし。」

「ん？ そうか。そうだよな、日曜日だもんな。なんであいつ、休日に学校なんて行ってたんだ？」

そこまでの勉強好きというわけでもないし。

そこまで頭がいいというわけでもないのだから、受験生らしく勉強でもしていたのかもしれないけど。

ちなみに俺は、去年中の日曜は忙しかった。ほぼ毎週のように補習があつたのだ。しかも俺の成績の悪さに難癖つける教師連中ばかりが集う、まさに地獄の補習だった。

「この課題が出来れば帰ってよし」なんて言って、テスト用紙ばり

の大きさの紙を何枚も配ってよこすし。両面刷りターンオーバーというところがまたウザ……コホン、愛情が深い。

まあ、賢と一緒にしてくれたことでなんとか早め早めに切り上げることが可能になったけれど。そう言えば、あの頃は智里もそれに参加してたな。平均並みだったのだが、俺とつるんでるからとか何とかわけのわからないことで巻き込まれていた。

……………。

なんか俺、すごく不良っぽいイメージがついているらしかった。幸いにも同じ中学校なのは賢と智里しかいなかったから、生徒の間に不穏な雰囲気はなくて済んだ。

「あ、ってことは露原——」

「湊だ」

しくじった。

どうにか名前を呼ばない方法でここまで来たのに。あわよくばこのまま振り切るつもりだったのに。

俺のバカ。

「——湊、最近、彩とは会ってないんだよな。あいつ今ここに来るぞ。俺が待ち合わせてるのは、その彩なんだからな」

「本当か！？ そうなのか？ 彩ちゃんが、この高校に入学してきてくれていたのか？ それは嬉しいな。もう会えないとばかり思っていたから」

あからさまにテンションが上がる露原。玄関でびよんびよん跳ねるスターというのも、なかなかシニールな光景だった。

「これでボクも、不満感を解消できる！」

「おいおいそりや挨拶だな。俺と話しているだけじゃあ、満足のいく会話ができなかったってことか？」

「ん？ いいや、それは違うぞ。それは誤解だ。陽に対しての気持ちとはちゃんと満足しているし充足したし、うん、十全だ。だがしかし、彩ちゃんに対しての気持ちには少しばかり寂寥感が募っていたからな。それだけの話だ」

「お前は交流する人間と同量の心を持ち合わせているのか？」

それはあるいは一人一人に対しての対応が違うということになるんじゃないのか？ 臨機応変の世界なんかじゃないぞ、それ。既に多重人格だ。

特徴があり過ぎるぞお前。

この主人公にも少しくれよ……。

前文、自分の中で軽く提案したつもりが、あと後になってじわじわ効いてくる程の真実だったと気づいた頃には、俺の心は潰れかかっていた。なんだかもう胃が痛い。

「陽ちゃーんッ！」

下足棚からの絶叫。

この声とこの呼び方は間違いなく、そして噂をすれば影のことわざにもぴたり一致するタイミングで（来ることを噂していたのだから、これは当然の結果とも言いたいところだけれど）彩が登場した。

猛ダッシュしていた割にはもう存在を忘れかけていた。露原と話していたことで時間は過ぎていたようだ。

てけてけと駆けてくる彩に対して声を返したのは呼ばれた俺ではなく、

「彩ちゃんッ！」

と言って彩に抱きついていった露原だった。

「え？ あ？ あ！ 湊ちゃん！」

「そうそう、ボクだよ！」

嬉々として抱き合い、その場で跳ねたり跳んだりはしゃいでいる女子高生たち。しかしこうして見ると、ちっちゃな同年代にしか見えないな。

彩と並んで同じくらいともなると、露原もある意味では至高のスポーツマンだぞ。

やがて再開の挨拶も済んだのか、2人は離れて会話。しかも学校を出るように歩き始めた。俺の存在は忘れ去られているようだ。

彩と露原は仲良く話しながら歩いているのだが、その後ろを歩いていた俺は声で2人を分断する。

「おいおいお2人さん。誰か忘れてないか？」

「え？ あ、う、ううん、陽ちゃん。全然だよ。全然さっぱりこれっぽっちも忘れていなかったでありますよ」

「戸惑い方がマジだから。っていうか彩、必死にフォロー入れてもな、『さっぱり』はやっぱり忘れ去っていたことを強調するための副詞だぞ」

「細かいなあ陽ちゃん。そんなことだと、全世界の女性たちの理想には追いつけないよ？」

「俺がいつ他人の耳に吹聴しただけで甚大な迫害を受けるような誇大妄想を豪語した！？」

「主人公体質だもん。それくらいは頑張ってくれなきゃ」

「主人公は誰でもかっこいいと思いたいよ。むしろ今の時代じゃ、主人公最強説の方が衰退してるぜ。のび太やおぼけのQ太郎なんかがいい例だ」

「でもでも、やっぱりかっこいい主人公の方がモテるよ。いつかはケンシロウやキテレツみたいに尊大になってくれなくちゃ」

「その2人を同列に並べるな。ジャンルも画風も違い過ぎるだろうが」

被ってる所なんて1つもないじゃん。

それともそれは、俺に文武両道を心掛けろという遠回しなメッセージか？

その手に乗ってたまるか。

「いや、それにしても、だ。彩、お前なんで遅かったんだ？ 足が遅い方でもなかったら？ 露原がいなかったら——」

「湊だ」

「……………」

そこまでして呼ばせたいものなのか？ 下の名前。女の子はわからない。

いやそれ以前に、学園のスターであるところの露原の意図なんか
あずか与り知らないところだ。

俺と露原との間を流れる、毛色の違う空気も気にせず、というか
気が回らないとでも言いたげに申し訳なさそうな顔をする彩。俯い
て、彼女は言った。

「ああ、それはね……先生に、捕まってたの……」

「……………」

「……………」

……………。

「廊下は走っちゃ、いけません……って」

今世紀にしてこの世代、というかこの年齢で、もう高校生だとい
うのにもかかわらず、最近は小学生だって言われないであろう教師
側の名台詞（ともすれば死語）を、真正面から享受する女子がいた。
ツインテールのちっこい……小学生並みに優れた頭脳を持つてい
る女子高生が、姫宮彩ひめみやだった。

溜息しか出ねえよ。

つつこみキラーか。

沈黙というよりもむしろ沈殿したかのような重い空気の中で、携
帯電話が鳴った。

言葉を失った集団に対しては見事にナイスなタイミングだった。
助かる。

しかし受信画面に表示された番号には、見覚えがない。

しかしとにかく、俺は救われた思いで受話器をあてがった。

「もしもし」

「……………」

相手側は——応対しない。

なんだ？　これ。

「もしもし」

「……………」

イタズラ電話？

詐欺まで出没しているこのご時世に？

「もしもし。用がないなら切るぞ」

とまで言つと、その言葉を待っていたかのように間を挟まず、

「用ならあるさ。竜崎さんちの陽くん……」

挑発するような軽薄な声で、電話の主——向ここの男は告げた。

まるで俺のことを以前から知っているかのような……そんな声で。

不穏な空気を感じた俺は、彩と露原とは少し距離を置き、電話の相手にも伝わるような低い声で言うことに。

「誰だ？」

「こつちの名前なんかどうでもいい。用だけを伝えるから、記憶して行動しろ」

「悪いけど、初対面の相手に命令されて受容する程、俺は従順じゃなくてね。それに、素性も明かさない人間と長電話する程のお人好しでもないんだ」

挑発して返すと「ちっ」と聞こえる程に舌を打つ相手。

気は短いみたいだな。

聞くからに未成年の声だ。しかも、声変わりもそこそこの——。

「とにかく、偉そうなことは言えねえ立場だってこと、わかってもらねえとな」

「は？」

「……………。よ、陽！」

「……」

この声——甲高くて、聞き覚えのある声の主は、智里ちみりのようだった。

でも、なんで？

智里はさつき校内で俺と別れて、その後は会っていないはずなのに……。

「陽！ 陽！」

「ち、智里！ 智里か！？」

危ない。

声を潜めておかなければ2人に感づかれる。物騒なことに巻き込むわけにはいかなからな。

「陽……学園の、体育館裏に来て……」

「大丈夫なのか、智里」

「う、うん……大丈夫……」

恐怖感からか、智里の声は震えている。手でも縛られているのだろう。だが、声の調子からして、乱暴を受けた気配はないな。拉致緊縛。最低の行為だ。

「わかったか？ 必ず来いよ」

「あ、ああ……わかった」

そう言つて、俺はケータイを握る手に力を込めた。

智里を……。

あいつら、絶対許さねえ……。

俺が怒りに震えていると「ああ、それから」などと言って相手は、こつちが本題だとも言いたげに声の調子を鋭くして、

「お決まりの台詞であるこれ、『1人で来い』とは言わねえ。むしろ……だ。そこに一緒にいる、露原湊を連れて、2人で来い。ああただし『それ以外誰にも話すなよ』っては、言っておくけどな」

電話は、不通になる。

ツーツ、ツーツ、なんて酷く寂しい警鐘だけが、俺の脳内に反芻はんすうしているだけ、だった。

17話・暴走（後書き）

剣呑な空気になってきましたね、NOTEです。

シリアスな雰囲気作り方を心得ているわけではないので、智里と陽の電話のやりとりがオーソドックスになってしまっていました。ご愛嬌ということ……。――

この作品では初めてでしょうか、危ない展開です。

日常的な日々の中では、こんな、お話にはお約束な顛末がこの先々も続いていきます。

体育館裏やら、電話での呼び出しやら、廊下を走ることやら。

これからも、そして次回のお話も、楽しんで読んでいただけるように努力したいと思います。お願いします。NOTEでした。

感想や評価、レビューや辛口な意見、誤字脱字の訂正なんかも下さると幸いです。このお話をより良くするのはあなたです。……なんて。

18話・疾走

この話は元々、作者のなんの思慮もないアイデアから生まれたもので、実はというところなんにも続くものだとは思っていなかった。深く掘り下げようと頑張ったものでもなければ、長くやろうと勢い込んだものではなかったはずなのである。

だからと言ってどうする気もない。

こんなことをいきなり、しかも作者でなく主人公の俺の口から言い出したからと言ってこの物語を閉じようというものではない。そんな気は毛頭ない。到底浮かばない。

むしろ続けたいのが、現状だ。

結局のところ何が言いたいかというと、この話にそこまでのストーリーの深さを要求されても困る、ということだ。

ちよつとした箸休め。

少しばかりの小休止。

その程度の認識で見ただけなのだから、これから始まる武闘派な展開にどんな結末が待っているようと、それは作者のその場の思いつきなのだと、最初から何も考えていなかったのだと、理解していて欲しい。

電話の主は、わからなかった。

あの後、露原^{つゆはら}のやつに声をかけ、彩^{さや}には「遅くなる」と言って校舎へと駆け出した。

走っている内に露原へ電話の流れを話し、心当たりを聞いてみるも空振り。

しかしそれは、単に「そんなやつは知らない」と言われたのでは

なく「恨みは山ほど買った」というものだった。

話して歩いていたこともあってか、俺たちは幸いにも校舎からそれほど離れてはいなかった。これならいくらかかることなく到着できる。

「なあ」

走りながら、露原は話しかけてくる。

「ボクは、駄目な人間だよな」

彼女は、いつ何時でも俺に向けていた笑みもなしにそう言った。

「明らかにボクのせいなのに、君たちを巻き込んでしまつて……」

「そんなことない。お前はただ恨まれているだけだ。お前のせいじゃない。誰のせいかと言えば、恨んでくるやつらが悪いに決まつてゐる」

「そんなこともないだろう。恨む人間に非があるなんて思つちやいない。大概において、恨まれる人間にこそ原因があるから、恨む人間が現れるんじゃないか」

「それは、中学の時のことを言つてゐるのか？」

「……………」

沈黙。

彼女はそれきり、声も上げずに駆けていた。

ちなみに、俺は彼女に、待ち合わせ場所のことを教えてはいない。教えた瞬間、彼女は俺を置いて突っ走つてしまうことだろう。

自分の責任だから。

自分が原因だから。

相手が彼女に、何を要求してくるのかはわからないから。

だから、彼女を一人にになってしまうのは危ない。

それに。

相手の目論見がわからない以上は、俺も深く反論することはできなかった。

それは俺に、彼女を責める気持ちがあるわけではない。下手なことを言及してしまうと、下手なことを追求してしまうと、それこそ

彼女を傷つけかねなかったからだ。

とにかく俺は、走った。

走って、走って、走った。

走って、走って、止まった。

「はぁ、はぁ、はぁ……っはぁ……はぁ」

疲れた。

だからと言って、止まるわけにはいかない——はずなのに。
止まった。

「お、おい、どうした？」

それほど距離が開いていないとはいえ、ここまで全力疾走をすることなどあまりない。帰宅部であるということを念頭において考え
てみる。ほとんど皆無だ。

「止まってる場合じゃないぞ、陽」
陽

息切れなど一つもすることなく、露原はこちらを見ている。俺が
止まったことに少々タイムラグあって気付いたためか、俺とは数歩
分離れて、振り返っている。

しかしその場でたったたと足踏みしていることから鑑みるに、
まだまだ余裕なのだろう。

さすがは女子バスケット部のエースだ。

「露原——」

「湊だ」
みなと

凡ミス。

こんな時でもそこにこだわるのかこいつ。

「それよりも陽、こんなところで立ち止まっている場合ではないだろ
う。智里ちゃんちりがピンチだという時に、君は何をへたレているんだ」
「そうだな……わかってる……」

「わかってるなら——！」

「なあ、湊」

彼女の言葉を無理矢理に遮って、俺は言う。

「場所を教える」

あいつら……許さねえ。

なんて、怒り心頭だったさっきとは違って、今は頭が冴えてきた頃だ。考える。

とりあえずはじゃあ、なんで『あいつら』なのか。

犯人は、確認しているだけでも、電話をしていたやつ一人。

いささか難しい発想ではあるが、智里一人を縛り上げるのは無理ではない。彼女に格闘スキルなんてないし、いきなり襲いかかられでもしたらそれだけで無力だ。

だが、襲いかかったとは考えられないのだ。

智里は俺と別れる際、

「遅くなる」

と言っていたのだから。

おそらくはあらかじめ彼女を呼び出しておいて、そこで自由を奪った。

その場合だと、校舎内というのは明らかにまずい。人目につくし、運が悪ければ教師連中に見つかっておしまいだ。

ということとは、外だ。

校外は校外でも、高校の敷地内——例えば、そう。裏庭の、人目につかない木の陰だとか。

いや、智里からしてみたところで、そんなところの呼びだすなんて怪しい、とか思ったとは思う。

しかしもし、相手が相当の役者だとしたら……例えば、変にもじもじして赤くなっていたりしたら、しかもそれが男子だとしたら——女の子からすれば、それは愛の告白なのだろう、と予想することは難しくない。

むしろそのように思わせたのだ、と推測する。
たく。

頭脳労働は俺の分野じゃねえってのに、賢^{けん}のやつ、あとでなんか

おごらせてやる。

ハタ迷惑な逆恨みだろう。あいつからしたら。

早くも、露原湊は辿り着いた。

私立彩桜学園の本校舎が建つ裏庭のさらに奥——そこには、木造の建物があった。

彩桜学園の校舎は、見てくれは新しい。が、歴史は浅くはないのだ。

数年前。

ここの敷地にあった木造の高校、その校舎は取り壊され、新しいものとされた。その際、校舎の構造や素材と共に、場所も少し移転することにしたのだった。

そのおかげで、校舎を建て替えるどころか土地そのものを大幅に改造することとなったのだ。

建築基準法に準ずるためだ。

単に金が有り余ったからだ。

そのような噂が、着工当時はあったのだが、今となってはわからずじまい。住民連中としてもどうでもよくなったらしい。

ここで強いて明らかにしておくとしたら、どちらも——

建築基準法に準ずるため。しかし金が有り余っているのだから、どうせなら土地ごと。のようなものだろう。

だからというべきなのか、旧校舎の設備の一つ——屋外の体育倉庫も、本校舎とは離れた位置にある。

木造の、ここ最近はまだ手入れもされていない倉庫。

なぜ残してあるのかは未だ不明のままなのだが、そこは本校舎からしてみればいらぬもの。ゆえに誰も関知するところではなかった。そんなところで何が起きても、誰も何も知るところではない。

「待たせた」

露原湊は、そんな体育倉庫に来た。

一人で。

「おいおい、露原さん。カレシの方はどうした？」

体育倉庫を背に立つ少年が、生意気な風に尋ねる。

「そんなことはどうでもいいだろう。それより——」

と、露原はざっと見まわした。体育倉庫を取り囲むように、体育倉庫の頑丈な鉄扉に縛り付けた少女——篠森智里しのもりを、取り囲んでいるようにいた数名を。

男女混ざって六人程度。

男が三人。

女が三人。

見てみる限り、智里は特に乱暴を受けた形跡もないようだった。彼女は口に布をあてがわれて、制服のまま鉄扉の取っ手部分に縄を通されているらしい。

体育倉庫周辺の六人へ向け、露原は静かに声を荒げた。

「お前ら……何者だ！」

「ふっふっふ……何者だ、ねえ……そいつはちと酷過ぎるんじゃないか？ 露原さん」

声をかけた内の一人の少年が答えた。

変声期も迎えたてと言ったところの、未だ幼さが抜けきらない少年だった。

「俺ら全員……あんたとは初対面じゃないってのにさあ」

「なんだと……！」

驚愕に顔を引き攣らせる露原。

「むしろよお、俺たちはショックだぜ。こんなにもあつさと忘れられているもんだとは知らなかったからさあ……。ほんと、はるか上空から庶民を見下ろす、見下す人間みくだつてのは、そういうものなのかねえ」

嘲るように、少年はそう言ってみせた。

すると、今度はその少年の横にいた少女が割り込んできた。先程まで喋っていた少年よりは、少し大人びた少女だった。

「あたしら顔、忘れたとは言わせない……！」

知らない人間、そのような人間は大多数いる。

顔を見たことがあるとして。

それは、一つ前の晩に何気なく見ていたテレビや新聞で報じられた顔なのかもしれないし、いつかどこかですれ違った時の顔だったかもしれない。

そんな顔を、人は覚えていられない。

そこまで、人は認識する能力がない。

だが――

「はっ……！！」

露原は、覚えていた。

彼女は、少女の顔を忘れてはいなかった。少年はともかく、そこにいた三人の少女たち……。かつてのチームメイト――

中学校時代。

共に汗を流し、共に苦しみ、共に全国に行った。

そんな、仲間たちのことを。

18話・疾走（後書き）

いよいよ終息していきますNOTEです。

冒頭でもあったように、別にこのパートがひと段落したら終わるとか、打ち切るとか、そんなことはありません。

本当は後書きに入れるような、そうでなくとも前書きに入れるようなものを話の中に入れてしまっすいません。

この話、そこまでシビアに作ってませんよ、という精一杯のアピールだったのですが、そこ辺りは、実際に読んで下さった皆様の感想にお任せ（丸投げ）します。

感想、評価、レビュー、指摘や意見などが戴けたら感激至極にございます。

第一回とはまったく違うことを言いますが、是非これからも読んでください。

NOTEでした。

19話・低頭

俺は知っている。

彼女が——露原湊つゆはらみなとが中学時代に用いた、ある奇計を。

彼女は自分の勝利という野心に突き動かされ、その当時に組み込まれていたバスケットボール部員では己の最終目標に辿り着かないのだと判断し、遂にはそれを切り捨てた。

部員を断ったのだ。

仲間を絶ったのだ。

当時の部員を何人まで残し、他から何人の引き抜きを行おこなったのかは知らないが——人間が本来直面する限界という壁が、少なくともバスケにおいてさして障害にならない程度の者たちを使った。

とびきりのスケジュールで。

ずば抜けた練習メニューで。

フルキューレと——半ば尊敬で、もう半分は擲揄やゆと呼ばれていた。

その取り組みによって、彼女は、念願である全国制覇を果たしたのであった。

露原は、当時全国区でもなかった中学校の一部活を、三年越しとはいえ最終的な勝利へと導いたのだった。

しかしそれを喜ばしく思っていたのは、部員全員ではなかった。

引き抜かれたのなら、その引き抜かれた分だけの人数、元々いた部員が出し抜かれたのだ。

才能があるとはいえ、つい先頃まで素人同然、初心者そのものだった人間たちに追い抜かれたのだから。

「そりゃあ、怒っても当然だよね！」

中学時代に露原と同じ部員だったという女子たち三人。横に並んだその中央にいた彼女がそう叫んだ。

恨めしく。

実際恨んでいたのだろう。

露原は「君たちか……」と弱々しく言って、先程まで獣のようだった瞳をかすかに潤ませていた。

体育倉庫を目の前に、扉に縛られた智里ちやちとそこに隣する三人の男子生徒たち（おそらくは中学生のように思う）。

同じく三人並んだ女子の内の一人と、男子の内の一人が、おそらくは姉弟のようなのだと思う。目が似ている。

ちなみに、俺はどの辺りからモノローグを語っているのかというと、体育倉庫の真上である。

実は露原と連携して、俺が先にここへきて様子を見つつ、露原に連絡を取るという算段を立てた。我ながらいいアイデアだと思うたぞ。これで露原の連絡先もゲットだしな！

言っておくと、前話でのラストも俺が語っていたことになっている。急に三人称視点なんかになったら、読者様みんなが混乱しちゃうだろう。置いていて。

そんなわけで、俺はこうして突入の機会を待っているというわけだ。人質を取られてちゃ不用意に仕掛けることもできないからな。別に、暴力に訴える必要がないのならそのまま帰るつもりだったし。

だがまあ、人質を取った段階で、向こうはすでにその気だとも思うのだけれど。

「それで、ボクにどうしろと言っんだ」

露原は直接、簡潔に切り込んだ。

それに対し女子の一人は薄ら笑いを浮かべ、
「そうだね、まずは手っ取り早く、謝ってもらっわよ。地に手をつき膝をつき、頭を擦って謝罪の弁を述べてよね」

「……わかった」

お、おいおい……。

全国制覇へと導いた文字通り勝利の女神に対して、そんな酷い仕

打ちはあんまりだろ。

露原は片膝、そしてもう一方の膝をつき、地面の上に膝立ちの構えを取った。

俺が体育倉庫の上から身を乗り出そうとすると、ちょうど一直線上に向かい合っている露原は、俺にまっすぐに視線を向けてくる。『待ってくれ。これはボクの責任だ。ボクが原因だ。ボクが悪い。彼女達は悪くない。彼女達がこのような気持ちになっていることに気づいていながらも、ボクは飄々《ひょうひょう》と、のうのうとのらりくらりと生きてきたのだ。これは、当然の結果だ』

そんなことを言われた——気がした。

まあ、俺と露原の仲は運命共同体という程でもなければ、一蓮托生というわけでもない。

俺にあいつの心が読めるわけでもないし、俺たちの間に眠った戦士の血がそのように呼応しているわけでもないから、本当のところはわからんが。

でも。

それでも。

言いたいことはわかった。

彼女はこの場での軍事介入は望んでいない。

彼女の眼光は、相も変わらず少年のような綺麗さや獣のような鋭さはあっても、いや、ある上で、優しかった。

穏やかな瞳だった。

彼女が素直に跪ひざまずいたことに、相対する彼女達も怯んだようだったが、露原は関係なく深々と、まるで大罪を自覚し悔やんでも悔やみきれぬとも言いたげに頭を下げた。

「すいませんでした……………」

静かに、涙声で……………あのいつも元気な笑顔を見せてくれた露原がそう告げた。

それだけだった。もう言葉はいらないとまでに、それだけを丁寧に言って懺悔した。

なんでだよ……。

お前はチームの為を思ってたただけだろ。

ちゃんと奮闘したじゃないか。

ちゃんと貢献したじゃないか。

そののながいけないというのだろう。

俺には理解できない。

『仕方がないんだよ。陽』

賢の言葉。

『露原さんは露原さんの為に走って、チームの為に点を取って、学校と己の野望の為に悲願を達成したんだ』

それでいいじゃないか。

『いいんだよ。それはそれで十二分に結構だ』
なら……なんで。

『彼女は、チームの為じゃなく、チームメートの為に走らなければならなかったんだ。彼女の悲願は、それは確かにチームメートの悲願だけれど。チームメート一人一人の悲願は、彼女の悲願と完全一致するものじゃなかったんだ』

自分の願いは、自分の手で。

誰だってそうだろう。

他人が持つて来た優勝旗なんて、それは他人のものだ。たとえチームとして戦っていても、結果に自分の実力が加味されていなければ同じこと。

チームメートの勝利ではなく、チームの勝利ではなく。

それは結局のところ——彼女一人の意志行動に帰結する強さだったのだから。

まあ、今まで恨んでいた相手が急に謝ったくらいで揺らぐ気持ちなんてご都合主義的なこと——。

「ごめんなさい……」

頭を低くする露原に対峙した三人の女子たちは、泣いていた。

「ごめんなさい……。ずっと、恨んでた……私達のことなんか、眼

に見えてなくて……。一人で、必死に、突っ走ってくんだもん……」
露原のかつてのチームメートの内の一人が、涙をこらえながら、
涙を呑みながらも言葉を紡ぎ出していた。

堪えていた気持ちが溢れるように。

「恨んでたのに……。言いつくせないくらい、語りつくせないくらい。でも、謝られて、なんだか、そんな自分がバカらしく、ガキくさく思えてきて……。ごめ、ん……なさい」

ああ。

なんてご都合主義的な風景か。

深淵なんてまるでない、平坦な気持ちだったんだ。
深くなんて恨めない。それは恩人だから。

「一言、謝ってもらっただけで、こんなにも……」
楽になれた。

——らしい。

今のところ、俺にはこの展開がよく読めない。
恨んでいたのに急になに？って感じ。
そうだろう？

ついさっきまで生き活きと露原に土下座をさせていた人間が、人格がどっか消え去った。

こんなことありえるんだろうか？

『女の怒りは怖い』

前にそんなことを言った気もするが……はて、どうなのやら。
でもまあ、いいか。今回は俺の出番もなさそうだし。

さっさと智里を自由の身にして、僕もかえーろお家へ帰ろ――

「ちよつと待てよ姉貴！！」

咆哮したのは、男三人衆の一人。どうやら泣き崩れている内の一人と姉弟仲だったらしいな。弟らしきやつは眼をつりあげたままで声を大にする。

「そんなんじゃ終わりかよ！ ふざけんな！ じゃあ俺たちの無念はどうなる！」

無念？ 何のことだ？

「おい露原湊！ 俺の顔は忘れたのかよ！ お前と戦って、コテンパンにやられた男子バスケットだ！」

あー。

そんなやつもいるって言ってたな。

なんだっけ？ 女子の全国区が毎回日曜に中学校を借りて練習するから？ どんな実力か、男子の俺たちが試してやろうだなんだってか？

そんなことは言っていなかった気がするが、まあ、そんなニュアンスだろうな。今の中学生なんて。

盛りがついてる時期だし。

おいおいしかしそれで怒るのは、いくらなんでもお門違いだろ。

お前たちが負けたのはお前たちが弱くて、露原たちのチームに及ばなかったからだろ。

こういう言い方も失礼だろうけど、生意気にも上から目線で露原に挑んで泣きを見たんなら、それは全面的に盛った気を、はやる思いを抑えられなかったお前らが悪い。

俺が中学生共を心の中で全否定していると、弟らしき男が泣き崩れる姉たちと対面している露原に近づいていく。

露原は、体制を整えてない。

彼女は膝をついたままで中学生男子を見上げた。

「俺はなあ、中学生と高校生の違いはあっても、女子チームに負けた男子チームとして名が挙がつちまったんだ！ そんな仕打ち……あんまりだろうがよおッ！」

やば……。

俺は体育倉庫の上から、天を翔けた。

それはそれはカールルイスのように綺麗な空中歩行で、中学生の少年と対立できる絶好の位置へと収まった。

なに、簡単なこと。

体育倉庫とは言ってもそれなりの高さはあるもので。

そこからなら地上までの滞空時間を十分持て余すことができるってもんだ。

つまりは少年がビックリ仰天色に表情を染めるだろうことは、予測済みだったということなのだ。

いやーそれにしてもよく跳んだな。

女の子がピンチの緊急事態に、今回初めての出番に跳ね上がる俺のテンションもあいまって勢いをつけ過ぎた。

ズザザツと涙目の露原ちゃんの眼の前に着地した俺は、案の定、驚天動地顔がぁの中学生君に向かって、今日一番のニヤリ顔で言ってた。

「大人の階段を上る時に注意しなきゃならんことが三つあるんだぜ？

一つ、急がないこと。

二つ、踏み外さないこと。

三つ、振り返らないこと——だ。

よく覚えとけ、少年」

19話・低頭（後書き）

十日ぶりです。NOTEです。

今回、本当に活躍の場がなかった陽には、このまま引っこんでおいてもらおうかとも考えたのですが……やっぱ出てきちゃったんですよねあの子。

基本は出たがりなのかもしれません。正直なところはわかりませんが。

さて、今回はだいぶよくわからない展開になってしまいました。誤算だとかではなく、こんなゆるゆるな収束終結がこのお話です。締めるところは締めず、ゆるめるところはとことんまでゆるめる。それがこのお話の最下層ですから。

寒い北国で文豪の足元にも及ばぬ駄文を書き殴っている、NOTEなのでしたー。

皆様のご意見、ご感想、レビュー、評価、指摘、訂正個所の報告「ここはこうしてこうした方がこうなって……」なんてことまでバンバンください。

お待ちしております。

20話・退行

「痛ってえ……」

うずくまる少年A。

どうやら反射的に手が出てしまったらしい。

「だ、大丈夫か？」

殴った方も思わず心配の声を出してしまうような鈍い音がした。

そりや痛えよ。

グーだもん。

うずくまっていた少年は、打たれた頬をさすりながら起きあがる。眼のふちが濡れているのも気のせいではないだろう。

合つ目線に、自然と流れる気まずい空気。

そりやそうだよな。

初対面で、しかもいきなり現れた相手を殴りつけるなんて沙汰、誰であろうと経験があるわけではないだろうから……。

ん？

ああ。

ここで皆様、もしかすると誤解しているかもしれないので補足しておこうか。

誰あるう、殴られたのは俺だ。

頬を腫らしているのも俺であり、今しがた立ち上がって「痛ってえ」なんて情けなく呻うめいているのも俺だ。

よって、少年Aこと俺——竜崎陽りゅうさきひるは、涙目で中学生男子と対峙している。

マジ泣きだった。

いや。

こういうのって反射で出るんだよ、本当に。ともあれ。

「だ、誰だよお前！」

と再開してくれた相手方に対し、

「俺か？ 俺はな、露原湊つなはらみなとの大親友！ 竜崎陽だ！」

なんていきがって強がって言ってみた。殴られてから言ったおかげで、なんの勢いもない台詞に落ちぶれてしまったけど……。

ひらりと着地した地点で振り返り、露原に対し「大丈夫か？」と尋ねる。

「いや、陽の方こそ大丈夫か……？」

「……………」

逆に心配されてしまった。

「ケンカに介入してやられました、じゃあカッコつかないぞ」

「うう……………」

確かに。

『ごくせん』でいう小池徹平ポジションじゃん。結局最後はヤンクミに助けられるやつ。ドラマだからカッコいいけどさあ。リアルでやると負け犬っていうか、ヤンクミの噛ませ犬じゃん、あれ。やるせねえ。

「立つ瀬がない、だろ？」

「立つ瀬はある」

噛ませ犬だ。

「おい」

露原と話しこんでいるのが気に入らなかったか、先程よりも強い口調で、中学生の少年が割ってきた。

「結局あんた、なにしに来たんだ？」

おいおいおい。そんな言い方はないだろ。

俺は露原のピンチをいち早く察知し、文字通り飛んで来たというのに。

「まあ、暴力は反対だけどな……………」

弱々しく締める俺。

なんか、本当にザコキャラに位置付けられそうな勢いだなこれ。

俺が本気で落ち込んでいると、後方の少年2人のうち1人が口を開いた。

「お、おい。今その人……竜崎陽って言ったか……？」

狼狽するように眼を泳がせながら言うその少年は、心なしか後ずさっている。

「じよ、冗談だろ……。なんで、こんなところに、ど……『暁』がいるんだよ！」

ふざけんなつ、と言い残して、少年2人は学校の敷地から走りぬけていった。

「……………」

「……………」

……………」

なにがあつたかわからずに固まるその場。

とりあえず、動くこともできずに突っ立っている少年の横を抜けて、俺は智里へと駆け寄る。

あーあ。口にテープまで貼られちゃって。

「かわいそうに」

とひと声かけて剥がした。

「おっそい。今まで何やってたのよ」

吠える智里を無視し、腕の縄を解きにかかる。腕を縛る縄は強く結ばれていないようで、簡単に解けた。

「なんで無視よ」

「いや、あの……ちょうどいいタイミングはどこかなあ、なんて思ってたまして……」

「で？」

「ナイスなタイミングだっただろ！」
殴られた。

さつきとは反対側の頬をおもきしぶたれた。

「グーはねえだろグーは！」

「女の子1人を戦地に乗り込ませるなんて、サイテー……！」

いやいや戦地て。

血の氣が多いなあ、お前も。

途中まで黙って見ていた都合、反論などできるわけもなく、
どう言っただものかと考えていると。

ぱふっ——と。

俺の胸に、あたたかいものが触れた。

智里が飛び込んだきたのだ。

まるで地上1000メートルの高さにでもいるかのように、俺の
背中に震える手を回してしがみついていた。

「恐いんだよ……。この気持ちがわかるか、バカッ！」

わかる。

「わかってたまるか、バカ……」

ごめん。

謝ることしか、できなかった。

俺には。

お前の辛さを感じることも。

お前の恐さをわかることも。

お前の気持ちを汲み取ることも。

あまつさえ——

このままお前の背に手を回すことさえできない。

ほんと、ごめん。

智里の気持ち収まるのを待つて、露原のところまで智里を支え
ながら歩く。

智里を守れなかった……。

そんな暗い気分陥っていた俺を、露原は、先程とは打って変わ
って晴れやかな笑顔を浮かべ迎えてくれた。

「よし！ これで一件落着だな」

ない胸を張る露原。よかった。こっちはこっちで元気になってく
れたみたいだな。

「ああ。しかしまあ、拍子抜けではあったな。暴力沙汰覚悟で来た

もんだから」

「暴力ならあったじゃないか。受けてばっかりだったけど」
うう……。

それこそ立つ瀬がない。

負け犬だ。

しかし、と続ける露原だったが、それはある人物によって阻まれた。

「お、おい——！」

背後からの声。

少年の声だった。

露原を目指して智里を抱えていったから、少年を追い越していたことに気がつかなかった。

「あんた、『^{ドラゴン}暁』って……」

おののきつつも問いかけてくる少年。ふと横を見ると露原も「それが気になっていた」なんて顔をしている。

うーん。参ったな。

確かにそれ、俺の話ではあるんだけど……あまり自分から積極的にしたい話ではないものだしな。ただでさえ暗かった気分が最悪になっちまうし。それに——

「……………」

ちら、と。

智里の方を見る。

動きを封じられるというのは、精神にくるものだ。俺たちがここに来る道中、ひょっとしたらあの少年たちが露原の文句、恨み辛み^{そね}嫉みをぶちまけてたかもしれない。

人の陰口を近くで聴くことも、またこれ心的ダメージ絶大だしな。彼女の疲労は困憊^{こんぱい}しているらしい。

俺の二つ名の話は、智里の前では……もう、聴かせたくない。

「昔の話だよ……」

言って、俺は校地から出る門へと向かった。智里の肩を持って。

露原は混乱しながらも、俺たちの歩みについて来た。

俺に半身を預けているはずの智里の重みは——信じられないほど軽かった。

「すまないな」

露原との別れ際、彼女はそんなことを言った。

「今日は、本当にボクが一方的に理不尽なまでに巻き込んでしまった。すまない」

「まあいいよ。こうして無事でいられたんだし。別にお前がそもその原因だろうと、こいつも責めちゃいないだろうさ」

ちなみにそんな頃になると、智里はもう眠ってしまっていた。だから俺の背中に乗っけての帰路というわけだ。しかし、なんといつても制服姿だからな。後ろでスカートが大変なことになっていないかが重大に心配だ。

「ボクは」

露原は口を重くも開けて、やつのことで言葉を紡ぎ出す。

「ボクは、もう——」

「なにも言っな」

やつのことで紡ぎ出している言葉の最中、俺はそれを断ち切る。

「もういいって。お前のせいだというわけじゃないだろ」

「いや、これは全面的にボクのせいだ……」

「だから」

智里が落ちないように気配りをしながら、両手で露原の頬を引っ張った。「あひゃふえ？ ふぁういふふ！」などと慌てる彼女。多分後半は、「何する」って言ったんだろうが、前半はさっぱりだ。

「そっちの方がいいと思うぞ」

「え？」

解放された頬をさすりながら尋ねる露原。

「笑ってる顔の方が、お前には似合ってるよ、露原」

そついうと彼女は目を真ん丸くしたが、すぐに細めて、俺の希望

通りにしてくれた。

うん。

その方が、100倍かわいい。

俺も、彼女につられて笑ってしまった。

「っへへ」

「ふふふ」

夕陽のせいか、それともさっき引つ張ったせいか、顔を赤く染めて、

「ボクは湊だ」

とつつこまれた。

「恨むよ」

帰ってる途中にそんな重い言葉を聞いた。

俺や智里たちがルームシェアをしているマンションはまだ見えな
い。俺の歩行で揺らし過ぎたのか、智里を起こしてしまったようだ
った。

つか、起きたんなら降りろよいい加減。

と思いつつも降ろさない俺も俺。

「恨むって、露原のことか？」

「正直、ファンだったんだけどね」

「なるほど。お前があいつと会う時になって様子が変だったことに
合点がいったよ」

ファンとして緊張してたのか。

そう言えば、数多くのファンを抱えている露原は神とまでされて
いたんだっただな。その彼女に、あるうことか両頬を引つ張るなんて
行動（悪行？）をした俺も凄いいんだなあ、と思う。

「でも、今回私は、完全に害を被った形で呑みこまれたんだから。
これで恨まない方がおかしいでしょ」

「それを言うなら、あの少女たちにも恨みの矛先が向かうじや
ないか」

「そんなの当たり前じゃない。けど、露原さんにも責任や原因の一端はあるわけでしょう？」

「そこはフォローするつもりねえけど……」

「でも実際、優し過ぎるよ、陽は……」

トーンを落として言う智里。彼女の表情は見えないが、おそらくは暗いそれとなっているだろうことはわかった。

「陽だって、今回は巻き込まれたんだよ？ 一発殴られてたし」

背後から伸びる手が、俺の顔に触れた。冷たい感覚がすぐに伝わる。わずかばかり残っていた痛みが引いていく気がした。

「あ、あんなの、殴られた内に入んねえよ。蜂に刺されたくらいだ」「結構な痛みじゃん」

「お、俺には、そんなことない、と、思う、けどな」

「なんで節々で区切るのよ」

「ははは、なんて力なく笑う智里の声。」

「でも、恨むよ……。彼女が悪いんだから、彼女を恨む」

「そうか」

無理もない。

いくらファンだからと言って、その人間が原因で拉致緊縛でもされたら、心理的に悪いイメージを抱かないわけがない。

「まあ、彼女を恨んだところで、何がどう解決するわけでもないし。どの道、この件はもう解決していることだしね。あとは、私の心の問題」

「……………。ファンをやめるとか、そんなところか？」

「ううん。そんなんじや許さない。だから償い^{あがな}として、罪の贖いと
して、彼女には私の友達になってもらう」

「はあ？」

「ファンから友達に降格。憧れの存在であるところのスターから、手の届く位置に降りてもらう。それで、チャラ」

「そんなんでいいのかよ？ そりゃ神とも言われている存在からそれじゃ、二階級特退もいいところだけど……」

「いいの。私の夢が、これで一つ叶うんだから」

ああそう。

なんだか、声も態度も軽くなったような気がする。
俺からしたら、それ自体でもう満足なんだけどな。

ルンルン気分でさようなら、のハッピーエンドに落ち着くならそれでもいい。

彼女には、そうであってほしい。

俺が背負う彼女の全体重は——予想通り、軽かった。

ややあつてからトーンを下げた智里は、

「ねえ、陽」

「んあ？」

「ありがと」

言って、背中からきゅっと抱きしめた。

20話・退行（後書き）

更新できずにいました、NOTEです。

やっとこの一編を終えることができました。立った一日のできごと
に何話費やしてしまったのか知れません。

最終的にいろいろと謎やらなんやら残す形になってしまいました
が、それはまた次の機会に……。NOTEでした。

この話の感想や評価、レビューや意見や誤字脱字のご指摘など
がありましたらぜひにもくくださいませ。

21話・いばら姫

まどろみの中、斜めに差された朝日で目が覚めた。

昨日、疲れたからと早く寝てしまったのが原因らしい、早い時間だった。

「土曜日だっけね……」

入学式、新入生用の部活動紹介の日が続き、今度は土曜日。入学式があつてすぐに休日に入るなんてことに、教師陣に対して怠慢を感じたが。

まあ、休日を与えられる側としてはありがたいけれど。

「……………」

上体を起こし、ベッドの上でしばしのぼんやりタイム。

こりやもう日課だ。

しかしながらいつまでもそうしているわけにもいかないので、

「それに暇だし」

たまには早く起きることにする。

つつーか、考えてみればここに越してきて初めての休日だな。とかなんとか考えつつ、自室のドアを開けて洗面台へ移る。と、その途中、4人でシェアしているリビングでは、彩さやがソファの前の地べたにちよこんとだらしなく座り込み、眠たそうな目でテレビを見ていた。

「あ、陽ようちゃん。おはよー」

「おはよ。お前、休日はいつもこんなに早かったっけ？」

「ううん。いつもはねー、昼までおねむだよ……」

間延びした声で答える彩。

さすがに顔は洗ったのだろうが、まだまだ眠いのか髪はいつものツインテールではなく、ストレートのままだった。

ふうん。

いつもはくくってるからわかんないけど、こうして見ると彩の髪も長いんだな。まあ、くくれるくらいなのだから長くて当然か。

いやまあ、こうして見ると……。

「かわい」

「え？ 陽ちゃんなんか言った？」

うつかり呟いては見たものの、面と向かって言うのはさすがに気恥かしいので「なんでも」と捨てて洗面台へ行き、張った冷たい水をバシャバシャと打ちつけた。

リビングへと戻ると、彩はさっきの状態から、くてんと寝っ転がってしまっていた。

おいおい……。

「眠たいなら寝てりゃいいじゃん」

俺はソファに（もちろん、ソファの上に、だ）腰かけて、下に転がってるちっちゃい身体を揺さぶる。

彩は横向きに寝て、まっすぐ前へ突き出した両手を地面にパタパタ叩く。

「えー。だってえ、おなか減ったしー」

「朝メシ食ってなかったのかよ」

「だってだってえ、めんどいんだもん」

「だってだってを連発するな。小学生かお前は」

「へんだ。もう高校生ですよーだ」

こいつ……。高校生になったからっていい気になりやがって。

「大体なあ、彩桜学園なんて平均ラインをひた走る偏差値のところに、どうやったら落ちるんだよ」

「うーん。裏口入学交渉に失敗したとか？」

「そんな言葉を覚えるな」

これからもつと覚えるべきことがあるだろう。

それに、その発言からしたらお前が裏口入学交渉に成功したみてえじゃん。

「やだなー。墓穴掘るようなこと言わないでよー」

「この場合、墓穴掘ってんのはお前だよ」

揚げ足を取る、だろうが。つか認めやがったか？ 今こいつ不正に学歴を獲得したことを認めたのか？

そんなわけないか。

抜けてるとはいえ、そんでその上ボケてるとはいえ、彩桜学園に入るのに苦はしないだろう。間抜けでもボケでも天然でも入れる高校。

楽園だな。

「陽ちゃーん。おなか減ったよー」

「わーかったから騒ぐな。そうだな……フレンチトーストでも作ってやるから。ちょっと待ってろ」

「ほんとあー!? わーい、フレンチだあー!」

はいはい、と言つて俺はキッチンに入る。

今のところ——ここに引越しての話だが、このキッチンに入つたのもポットの中のお湯目当てとか冷蔵庫の中のジュース目当てではない限り、料理目的では俺だけのように思う。

誰も作らないのかよ、ここんちは。

「ぼやかないぼやかない」。余に尽くすのじゃ。余はおながすいたぞよ」

「へいへい」

うるさいから早く作ろうか。

しかしまあ手間のかかる料理というわけでもないし、ちゃちゃつと作ってしまったのだけれど。

と、ここで気づく。

「おい彩。そういや、賢^{けん}や智^ち里^{さと}は？ まだ部屋か？」

規則正しい習慣をよしとし、生活に根づかせている少年少女たちが、今日に限ってまだ夢の中というわけでもあるまい。

気を利かせて残り二人の分も作ってやろうかという都合上、起床情報を確認しておくことは重要だ。

「うゃ？ ああ、あの二人はねえ、お揃いでどっか行っちゃったよ」

は？ お揃いですと？

あの内気な賢と？

あの勝気な智里が？

「あーやしーな……」

「でしよでしよ？ 私もそう思っただけじゃないかねえ」

「で、その結果は？」

二枚目を焼き始めようとした手を止める俺。

結構気になる話題だ、当然、火も止める。

テレビの音をわざわざミュートにするあたり、そこに気になる展開を期待してもいいのだろうな。

彩はソファの上に立った。そして智里の立ち振る舞いをまねでもしているのか、手を腰に当て上体を前に倒し、もう片方の手でこちらをビシツと指さす。

智里の口調で、彩は言う。

「ちょ、ちよつとやめなさいよ彩。これは本当に、そ、そんなんじゃないんだから！」

無意味に似てる。

すげえ。

ちよいびびった。本物が来たのかと思っちゃった。

台詞が終わるや否や彩はふう、とソファにへたり込んだ。

疲れたらしい。

疲れるほどやるかあ？ 普通。

お笑い芸人でもあるまいし本腰を入れるなよ。

「てなわけで、なんだか賢ちゃんの参考書選びの手伝いらしいよ。マダム智里は」

ソファに仰向けになったままの彩は、言葉を宙に投げた。

マダムで。内心つつこみながら二枚目のトーストを調理にかかる。結局、あいつらの分は取り越し苦労に終わったようだ。

「でもまあよくあることだろ、学生にとっちゃあ、参考書なんて。

「誰しもが通る道だよ」

「でも私、まだ買ったことないけど……、はあ。私も買わなきゃいけないハメになるのかなあ」

「賢でさえ買うんだからな。いや、違うか。賢は『真面目に勉強くん』だから買うんだろ」

「なに？ その商品名みたいなあだ名。陽ちゃんはテキストなんだから。どうせ陽ちゃんの場合は、参考書を買ったことなんかないんでしょ？」

「あつたりめーだ。参考書なんか買わなくてもな、生きていけるんだよ。世の中は」

参考書を買った賢に教えてもらえばいいんだからな。

「陽ちゃん頭いいね」

「クレヴァー陽、とても呼んでくれ」

「あだ名からしてダサさがにじみ出てるけど」

マジでほっとけ。

まあいいや。

フライパンから焼いたトーストを皿に移す。それでも食って爽やかな朝を彩るうではないか。

「できたぞー」

と、俺は両手に皿を持って彩の待つソファへと向かう。

近づきつつも見ると、さっきまでソファに沈んでいたちっこい体躯が完全にぐったりしていた。

「すぴー」なんて寝息を立てて。彩は寝入っていた。

このガキ。人にメシ作らせといて自分はだらけるとは、いい身分だな。

こちららその立ち位置がぜひと欲しいよ。

いつもならツインテールの片方を引っ張るところだが、今回はそうもいかない。ストレートだから。

つつか、眠かったら部屋でもっと寝てるよな、こいつの場合。俺が家に遊びに行ったときだって（賢や智里と共に）、こいつは眠い

からという理由で着替えもせずに眠っていた。

俺らは何のためにここに来たのだろう、なんて疑問を誰しもが抱いた日のことだ。

でもリビングに来てまでこんな状態というのは……。

ははん。

「お前、寝てないだろ？」

しゃがんで言う俺の言葉に、彩の眉はピクリと反応した。わかりやすいやつ。

なるほど。要は、お前も暇なんだな。

『陽お兄ちゃん』に構って欲しくてそんな事してんだな？

「さつさと起きろよ。冷めるとおいしくなくなるぞ」

起床を促して自分も席に着こうとすると、

「お姫様は眠ってしまいました」

彩はむにやむにや、を交えながらゆっくり語り出す。

「お姫様は一生ここで眠り続けてしまうのでしょうか？ と、その時、王子様がその近くを通り、お姫様の美しい寝顔を横で見ながら言いました。『おお。なんと美しい姫だ』と」

「ご丁寧に、少し声を低くして王子様の台詞を言う彩。

なんだよこの展開。

このままいくと最後には……。

俺は再度、眠る（振り）の彩の顔を間近で見られる位置に陣取った。

なんだろう。

胸が高鳴る。

「王子様は、『私のキスで、永遠の眠りから覚ましてあげよう』と言い、徐々にその唇を、眠るお姫様の顔に近づけました」

俺は彩の語りの中、王子と同様に自分の顔を、彩の顔に覗き込む形で近づけた。

「そして王子様は、お姫様へと目覚めのキスを――」

「――しねーよ。バーカ」

耳元でそう言ってやった。

「もうっ！ 陽ちゃんのバカ！ なんでこのロマンティズムがわからないかなー」

「バカやってないで食べよ」

俺はさっさと朝食を並べ、その前へと座る。

「陽ちゃんのバカー。甲斐性なし。意気地なしー」

ハイハイ、なんて受け流す。

それにしても、あのまま続けていたら、キス……しちゃってた、よな？

そのつもりだったのか……？

21話・いばら姫（後書き）

久しぶりの日常パートを描きました、NOTEです。

随分とご無沙汰な更新となっていました。が、そこそこ、そりゃもう本当にbottom（底）ではありますが、読んでくださっている方、また、お気に入り登録して下さっている方、本当にありがとうございます。励みになります。

ほんの軽い気持ち、一円玉よりも軽微な気持ちで書き始めたこの作品を、これからもよろしく願います。NOTEでした。

22話・アイドル

なんだか知らないが、休日の午前中というのは、なんとも時間の流れが遅く感じる。

そういえば春休み中は俺、あまり彩なやと話すこともなかった。会うことそのものがほとんどなかったのだ。春休み中のあの邂逅も、だから割合珍しい事だったかもしれない。

まあ、おかげで昼食をおごらされたのは痛かったけど。

それでも妹分だと思つての事ならば、それも許せようというものだ。これが馴れ馴れしいだけのウザい幼馴染だったらおごらなかつただろう。

あ、別に智里ちりの事じゃないけど。ウザくありませんもんね彼女は。はい、まったくもつてその通り、かわいらしい幼馴染に囲まれて幸せいっぱいでございます。ともかく。

彩も俺も着替えが終わつて（彩は他にも女の子としてのケアがあるとかなんとか）、またリビングに集まつた頃。

益体もない会話が、そこで繰り広げられていた。

「そう言えば陽ちゃん。お昼は何にする？」

「今朝食を食つたばかりだろうが……。なんでそんなに食い意地が張つていられるんだよ」

「人間の欲求に忠実に従つてるまでだよ。そんな事言ったら陽ちゃんだって、アイドルを見た時にはめちゃくちやにコーフンしちゃうくせに。それとおんなじだよ。おんなじ」

「やめる。まるで俺が欲求に従つて興奮しているみたいな言い方じゃねえかよ、それじゃあ」

「違ふの？」

「当たり前だ。っていうか、そんな誰も彼もが忘れ去つたような設

定を掘り返すな」

「でも、そう言ってたじゃん。メールの着信音だつて、陽ちゃんはその熱狂的なファンの結城萌花ちゃんなんでしょ？」

あーはいはい。その通りですよ……。

そんな会話、あんまり出てこなかった上に久々だから、まるで知らなかった人間だっているだろうさ。

あえて言おう。ズバリ、9話参照だ。

ちなみに。メール着信音は1話の冒頭参照。

あのメールの声が結城萌花であることは、今初めて明かしましたけど。

「でもおい、彩。そうになると、俺が性的対象として萌花ちゃんのことを見てみたいじゃないかよ」

「違うの？」

「当たり前だ！ 萌花ちゃんは俺の心のオアシスなんだぞ！ 萌花ちゃんは甘い物が主食でしかなければトイレにも行かないの！ アイドルとして生まれ、アイドルとして生きるの！ それが結城萌花その人なの！」

「……………」

「あ、ごめん」

思わず怒鳴っちゃった。

恥ずかしい。

「じゃ、じゃあ……お前にはいないのかよ。ファンになつてるアイドルの一人くらい、誰でもいるだろ」

賢^{けん}はいるかどうか微妙だけど。疎いわけじゃないと思うんだけど、な、そういうの……。恋愛関係にならない対象には惚れないとか、そんな現実主義^{リアリスト}っぽい。

「私は、まあ、いるけど……。例えば、リリース事務所の山風潤^{やまかぜじゅんいち}くんとか」

「山風潤一？ あの『桜より男児』の？ へえ。お前って、ああいうカッコいい系の男子が好きなのか？」

「う、うん。あ、でも、もちろん理想のタイプと好きなタイプは微妙に違うし、潤一くんに告白されたら付き合うつか、そ、そういうことは言わないけど……」

「？　なんでお前焦ってんだよ？」

「だって恥ずかしいじゃん。本気でファンになってるアイドルについて語るなんて……」

「ああ、まあ、そんなもんかな？」

むしろ話したいもんなんじゃないの？　自分の彼氏を紹介するよなノリで。楽しげに、いつそ自慢げに語れるもんじゃないのかな。潤一くんってば。が好きなんだよ。ちょくカワイイよね。みたいな。

どうでもいいけど。

人それぞれだろうし。

それはそうと……。

「賢と智里のやつ、遅いな……」

時計を見ると、もう昼に差し掛かっていた。何時間不毛な会話をしていたんだ、という疑問を除けば、脳裏に浮かぶのは二人の帰宅時間と安否である。

「少しは飯を作る方のことも考えろよな」

「そうだよー。参考書を選ぶにしたって、昼までかかるわけないよね。あ！　もしかしたら……」

「な、なんだよ……」

いきなり神妙な顔つきになる彩に、少し背中をゾクツとさせられる俺だった。

俺だって考えていなかったわけではない。

二人に――もしものことなんかあってみろ。想像するだに恐ろしい。

最悪のケースということだって、あるんだ。相手側が悪いかもしれないにしても、巻き込まれる方に罪はないにしても、それは仕方のないことなのだから。

でも……いくらなんでも、それを言っちゃいけないだろう？

こんなところで、そんな縁起でもないこと、考えるだけでも暗くなるのに……彩はそれを言ってしまうつもりなのだろうか……。

「やめろ、彩。それ以上言うな」

「だ、だって陽ちゃん。そんなのあんまりだよ。もしそうなら……私たちはどうなるの？」

「俺たちは、それでも前に進まなくちゃいけないんだ」

「やだよ……私、私そんなの耐えられないよ。いつだって……いつだって一緒だったのに」

俯く彩の顔には影が差していた。悲しそうな瞳が、次第に潤んでいくのがわかる。

よっぽど二人が大切なんだな、なんて穏やかになってしまっている自分がいるが、切り替えて、俺は彼女へと明るく言う。

「ま、そうだと決まったわけじゃないし、もっと明るくしてろって。そんな顔、お前には似合わないんだからな」

「え？ う、うん。そうだね。そうだと決まったわけじゃないもんね。いつも一緒だったんだもん。二人して先に行っちゃうわけないもんね」

「当たり前だ」

「よかったあ……」

胸に手をあて、彼女は安堵の表情を浮かべている。

「私、まだあの映画見てないから、先に見られちゃったらどうしようかと思っちゃった」

「……………」

「……は？」

イマ、ナンツツタ？

「今度ね、潤一くんの『桜より男児』が映画化したんだ。いつもは一緒に行ってたのに、待ち切れなくて二人で行かれたら、私どうしたらいいか……」

「……………」

映画？

潤一くん？

それ、山風潤一のこと？ そらそつだよね。俳優もやってるもんね。

「ん？ どうしたの？ 陽ちゃん……」

「え！？ あ！ いや、べ、別になんでも、ないよ？ え、映画ね。映画だもんね。潤一くんだもんね。あは、あはははは」

思わずマイナス方向に考えが及んじやった。

恥ずかしい。

……………。

「ってバカヤロウ」

ポカーンと。

近くにあった、やけにかわいらしいスリッパ（彩の私物）で、軽く叩いてやった。

紛らわしいんだよ。

22話・アイドル（後書き）

本当にご無沙汰をしてしまいましたNOTEです。

約半月も空けてしまって、申し訳なく思います。

サボっていたというわけでもないのですが、忘れかけていたのは事実です……。

さて、余談は短く（謝罪をたっぷりやれって感じ）、この更新していない間にもお気に入り登録してくれた方がいてくれて助かります。

書いている以上は、できるだけ多くの人に読んで欲しいというのは、書き手の願いですから。

今回のような生産性のない話でも、読んでくれれば幸いです。

難しくなく、だからと言ってくだらなくもない展開を、これからも繰り広げていただくよう、陽たちには頑張ってもらいたいものです。

昼夜の感覚が逆転しがちのNOTEでした（知ったことじゃないけど）。

この作品に関する評価、感想、意見、訂正個所の指摘、レビューやお気に入り登録などをして下さったら嬉しいです。どれでもいいですが、もちろんパーフェクトを記録して下さっても構いません。パーフェクトの方には何かプレゼントでも……なわけないですけど、是非どうぞ。

23話・中華が一番！

もうそろそろ昼が近付いてきた。

昼には賢^{けん}や智^ち里^{さと}も帰って来るだろうとの予測は変わらず、それまでに食事の材料でも買い出しに行こうかと言ったら、

「私、豪華なものが食べたいなー」

「らしいので、いつものツインテールに結んだ彩^{さや}と一緒に近くのスーパーへと来ていた。

「あ！ ねえねえ陽ちゃん。卵が安くなってるよー」

「そうだな。朝使った時、もう少なくなっちゃってたし……買い足しておくか」

「やったー」

「いや、なんで卵で喜ぶんだよ」

「え？ あ、ううん。私に陽ちゃんが同意してくれたから、なんか嬉しくなっちゃって……」

あ……そう。

でも、安かったら買いたくなるのは消費者として当然の至りだとは思っけだな。

「お前も、経済の授業を受けたらわかるって」

「私、経済とか、政治とか、そーゆーのは嫌だなあ……。なんかまどろっこしそうだし、難しそうだし、よくわからないよ」

「大丈夫だって。俺だってよくわからねえし。まどろっこしいし、難しい。けど、こうして役に立ってるだろ？ 役に立たないこともあるし、活かしきれないものもある」

俺は……まあ、活かしきれない人間なだけだ。

どの道社会で何年か生きる内に、自然に染みついていくもんだとは思っけだな。まさかずっと知らないままってわけにもいかないし。知らないは知らないなりに、浅く感じてる程度で構わないだろう。

「ねえねえ、それよりもさ」

彩がこんな会話に興味を持つはずもなく。

予想通りに話題を変えてきた。

「お昼は何を作るの？」

「ん？ ああ……どうしような」

「まだ考えてなかったの！？」

「そうだなー。食材を見て考えようかと思ってたんだけどな。いざ来てみると、決まりかねるものだなあ」

「なにを感慨深そうに言ってるんですか。ようは何も考えてないってことじゃーん」

「そう言っとなって。できることなら、お前だって何か食べたいものでも言ってみろよ」

そう振ると、彩は「うーん」と首をひねる。

「改めてそう言われると、浮かばないよ……」

「ほらな。やっぱ同じじゃん」

「むっくう」。陽ちゃんに言われたくないよっ

言って、頬を膨らませる彩だった。

あからさまに子供っぽいなこいつ。背も見た目もあいまって。

しかしどうだろう。

なぜかツインテールって、女の子を幼く見せてしまう感があるよな。昔からやってたから気にしなかったけれど（何かポリシーでもあるのだろうか今までと訊かなかったな）、今の年齢で彩を見てもちっこい（年齢的に）と考えるのはそんな髪型も関係してるのかな、なんてどうでもいいことを思った。

話を戻す。

その後も何分か、食材のコーナーをぶらぶらしてみたけれど、思いつくことができずにいた。

「例えばさ、具体的にこれが食べたい、とかじゃなくて、こう……何系とか何料理とか、なんかないのかよ」

「そー言われてもお……」

「浮かばなかったらカップ麺な」

「あ、あう……！？」

ここまでできてついに面倒になってきた俺が妥協案を提示すると、彩はそんな風に頓狂な声をあげた。

犬かこいつ。

「ちょ、ちよつと待つてよ。えつとおく………朝はフレンチだつたし……陽ちゃんのことだから、和風なんて言ったらカップのそばとかにされかねないし」

カチン。

「今なんつったあ？」

「わわわっ、なんにも言つてないよっ」

「はいごーお！ よーん！ さーん！」

「わわわっ、そんなの聞いてないよっ」

「ほらほらっ。そんなこと言ってる内に、時間はどんどん過ぎちやうぜえ。はいにーい！ いーち！」

「中華！」

俺が最後まで数え終わるその前に、彩は答えを出した。それ程大きな声を出したとも思えなかったが、答えを出した彩はなんだか顔に疲れの色を見せていた。

肩で息するほど思考したのか。

「中華、ねえ」

「い、いいでしょ？ 中華。餃子とか、ラーメンとか、青椒肉絲と
チンジャオロース
か」

大衆料理だよ。

「ってか、選択肢の中にラーメンが入っちゃってるじゃん」

「もうこうなったら、カップ麺も覚悟の上だよ」

「捨て身だと！？」

その上で、焦ったせいで、今まで思考した意味がなくなること
にさえ気づいていない。

切羽詰まり過ぎだろ。

「もういいよ、この際もうわがまま言わないから。何か作ってくれるだけで我慢するから！」

「なんでそんな必死！？ ああもうやめろっ！ その姿がもう痛い！」

とはいえ。

彩が言うように、中華にもいろいろ、それこそよりどりみどりに様々あるからな。

結局のところ、迷うけど……

「あ
と。」

俺の脳内に一つの案が浮かび上がった。

必要な材料とこれからの食事に使いそうなものをあらかじめ買い、自宅へと戻った。

着くや否や、俺は自分の部屋にあるまだ紐解いていない荷物……その中でも、一番押し入れの奥に突っ込んでおいたダンボールを取り出す。

「何探してるの？」

後ろからは彩の不思議そうな声が飛んできた。俺はダンボールの中身に手を伸ばし、目当てのものを誇らしげに彼女の目前に曝す。

「じゃーん」

しかし彼女の反応は、

「何それ」

あっさりしてんなあ。

「石釜だよ、石釜。ちょうど四人分ある。しばらくは使わないだろうとしまっておいたけど、ここでご登場とはな。これで石焼きビビンバでも食おうぜ」

「ほ、ほんとおー？ わーい。ビビンバだあ」

「はっはっは！ さあ、食うぞー」

「おー」

そんなノリで、昼食はビビンバとあいなった。

「ねえねえところで陽ちゃん」

「なんだ？ 彩」

「ビビンバって、韓国料理じゃなかった？」

「……………あ……………」

24話・先行き不安

「ただいま……」

俺が料理に取りかかってしばらく経った頃、智里ちさとと賢けんは揃って帰ってきた。それも、二人共妙に気落ちしたような様子で、部屋にいたとしたら確実に気づかなかったらうという声だった。

「おう、お帰り」

「あ、よ、陽よう……起きてたんだ」

反応したのは智里だった。

「なんだよその言い草は。もう昼だぞ。俺だって、休みだからいつまでも寝てるってわけじゃないんだよ」

「そ、そう……。そっか、もう昼だもんね」

「？」

なんだか歯切れが悪いな。

「智里。お前……っていうかお前ら、何かあったのか？」

気づけば、彼女の後ろにいる賢にもあまり元気な様子は見られなかった。とくれば、外で何かがあったことは明確なわけだったのだけれど……。

「あ、ううん。何でもないよ。何もなかった……」

「そ、そうか……」

何かあったのは明確であっても、それを何でもないと隠されてしまつと、こちらからはどうにもできない。苦しいことだけれど。

二人はそれぞれの部屋まで戻っていった。重い足取りというわけでもなかったのだが、だからと言って決して軽くはないだろう足取りでの帰還だった。

「どうしたんだろう……二人共」

心配しているのは、彩あやも同じようだった。彼女は不安そうな面持ちで、今も二人がくぐっていったドアを見つめている。

「朝は、別に何ともなさそうだったんだけど……」

「さあ。ただまあ、コクって振られて気まづくなったりとか、そんな感じなんじゃない？ 案外。賢のやつからか、智里のやつからか、そいつはよくわかんねえけど。十代の恋は儚いからねえ！。『私、今は仕事に専念したいの！』とか、そんな風な断り方はされないとはすれ……。『ねえ、今の関係じゃ……。だめ、なの？』みたいな丁寧な断り方でも、賢みたいな繊細なオトコノコは傷つくもんよお」

あの二人を見たままでは、こちらの空気まで悪く気まづくなりそうだったので、あまり深まらない内にとわざと茶化したつもりだったのだが……。

「はあ……」

彩は大きな溜息で対応してきたのだった。

「陽ちゃんはこのいう時にさえも空気が読めないよねえ。そうじゃないって気まづてるわけじゃないけど、そうならそれで、もつとこう、言い方ってあるんじゃない？ 駄目だよ陽ちゃんは。駄目駄目だよ。駄目人間だよ」

そこまで言われにやなんのか。

わざわざその場を明るくしようとしても駄目なのかよ。

空気を読むのも大変だ。

他人に同調するっていうのは、時に異論を申し立てるよりも難しいと思う。自分の意思意見を曲げることがどれ程にこれからの自分自身を変えるのか、推測が立たなくなるからだ。

もちろん、そうしなくても自分の未来や将来なんて、どうなるのかわかったもんじゃないけれど。

けど、それでも人間関係を築くにあたって、どんな人の意見を取り入れられるような人物であって、自分はいいのだろうか。

他人に同意する一方では、ただの他人任せになる。自分の中には意見さえない。それでは空っぽで虚しい……。空虚な状態であるだけだ。

他国の考えを例に挙げるならば、『意見を言わないこと、黙って

いることは何も考えていないということ』なのだとか。

相手だって、本気でそう考えているわけではないとはいえ——事実意見を言わないということは、その意見は取るに足らない、くだらないものだとして認識することであって、恥ずかしくて言い出せないとかそういうものは、自分のそんな意見に自信がないことの表れなんじゃないだろうか。

だから結局何が言いたいのかと言えば、空気の流れに身を任せることは重要であるのだけれど、空気に逆らって、時代に逆らって、相手に逆らって考えてみるのも重要なんじゃないかってことだ。

けどまあ……こんな場面でこんな局面で考えることじゃあ、これはなかったな。

俺が思ったことは一つだけ。

本人たちが俺たちに何も言っていないということは、それは私たちの問題だということ。

「まあ、そつとしておこうぜ。あいつらが、俺らの意見が必要だってんなら、その時に相談に乗ればいいさ」

「そうかな……。うん、そうだよな」

「そうだよ」

とりあえずは笑顔になった（とはいえ、だいぶ控えめな笑顔だけど）彩にひと安心し、俺は調理を続けることにした。

なにぶん、コンロは二つなのに対して作るのは四つだ。石釜はそのまま器になるため、一気に作ることができない。

四つではなく、二つずつ。

効率が悪いのだ。

急がなくては。

「ん〜。いい匂い」

そうは言っても、そこまで時間がかかることなく、昼飯時には間に合った。

呼びかけに応じた智里は、先程とは打って変わって明るく出てき

た。

「ほんと、お腹がすくねー、この匂いは」

賢も同じようだ。あいつ本来の、爽やかな笑顔でテーブルに着く。それぞれ、自分たちの部屋で決着でもつけたのだろうか。それが恋の悩みなのかどうかはともかく……そうだとしたら、万々歳なわけだ。

「彩も席に着け。食うぞ。早くしないと、ご飯がお焦げだらけになつても知らねえよ」

「うんっ」

こうして、俺たちは無事に、いや、本当に何事もなかったかどうかは知らんが、昼食にありつくことができたというわけだった。

以後、食事中の会話。

「んー、おいひい。やつぱり陽のご飯は一味違うわね。今度からはお弁当お願いしたいくらい」

「おいおいやめろよ智里。俺が朝早くに起きて、しかも四人分なんて重労働をこなせるわけがないだろ」

「でも、いつもコンビニのお弁当とか購買のパンじゃ健康に悪いよ。三食が陽ちゃんの作る料理なら、そんな心配もないわけだし」

「おいおい。百歩譲って、俺はこの調理師つてことにしとしてもいいけどさ……栄養士つてわけじゃないんだし、それぞれの健康バランスなんて知らんよ」

「じゃあ、賢ちゃんにお願いしちゃえば？ 中学校みたいに献立表とか作ってくれるかも」

「えー。僕そんなの無理だよ。いくらなんでも、料理のことはさっぱりだし、栄養バランスなんかもつての外ほかじゃない」

「資料とか読み漁れよ。家庭科の教科書とかさ。結構書いてあるもんだぞ、食品のカロリー表とかさ。頑張れ少年！ お勉強お勉強」

「もー、陽まで。じゃあ、僕がちゃんと献立みたいなのを作ったら、お弁当作ってくれるの？」

「そりゃーまあ……約束してやってもいいけど。だってお前、やらないだろうし」

「む。それは聞き捨てならない台詞だね。でも……面倒だなあ」

「大体なあ、俺らばかりにやらせてないで、智里や彩だって自分で作ればいい話なんだよ」

「えー。女の子にやらせるの？ それはちょっと違うんじゃない？
陽」

「いや……料理のことなんだから女の子でも別段おかしくない話だろうよ」

「あ、ききみみ。それは偏見というやつではないのですかな？
女の子だから料理だとか、そういう古い思想に則っちゃー駄目でしょう」

「お前、なんかキャラが変わってねえか……？ それはいいとして
お前の言いたいこともわかるけどよ。いくら女子だからといって？
たいていお料理ができるわけでもなく？ だからといって何かの
家事を引き受けようとかそんな姿勢もなく？ のうのうと共同生活
を決め込もうって腹なのは。だって何もしないんじゃない、何もで
きなないんだものねえ」

「なあにいをおおっ！ 陽……あんたいい度胸してるじゃない。い
いわよ。わかったわよ。見てなさい。この私が、料理だってその気
になればできることくらい、いくらでも証明してあげるから！」

「ほーう。ようゆうたなあ。ほな自分、何ができるゆうねん？」

「あ、あの……陽も、キャラが変わってるけど……」

「なんだってできるわよ！ 私をなめないでちょうだい！ 炒め物
だろうが煮物だろうが揚げ物だろうが焼物やきものだろうが、なんだってや
ってやるわよ！」

「ち、智里ちゃん！ 落ち着いて！ 焼物は食べられないから！
正しくは焼き物だから！」

「一週間！ そんなだけ時間やるわ。その間に……お料理修業でも積
んでもらいましょうか。自分が何を作るつもりなんかよう知らんけど、

それだけあれば十分やる」

「上等よ！ あんたのその鼻！ 真っ赤なトナカイにしてあげるから！」

「楽しそー！ 頑張ってね、智里ちゃん！」

「ちょ、ちょっと！ って……………はあ……………どうなっちゃうのかな……………」

24話・先行き不安（後書き）

今回は後書きができませんでしたNOTEです。

お久しぶりの投稿だということにご挨拶もできないでいて申し訳ありません。

さて、二人が帰ってきてからのことです。

何やら、彩の楽しそうな雰囲気とは逆に、賢の内心に嫌な予感が溜まっている様子です。その理由は……次回で紹介できたらいいんですけれど（できるかなあ）。

何せ計画性のない作者なもので、このような結末に至るはずではなかったのですが……会話の流れがそんな方向に向いていたものですから……つい。

すいません。

本当はあれでした。

違う内容をお送りするはずでした。

しかしまあ……この際、智里を差し置いての陽たち（賢や彩）の様子を追ってもいいのでは？　なんて考えている次第ですので、もししたらこの一週間分、智里の出番が激減する可能性が示唆されていますが、そうなくてもご了承ください。

……智里に需要はあるのだろうか？

作者は感想、レビュー、評価、ご意見ご指摘を待っています。思い切って行動を。

妥協なき決断を（国境なき医師団の**バクリ**もじり）。

25話・日曜日の訪問客

日曜日。

朝食を作らなければならない人間にとっては地獄のような日常である。朝早くから起きて全員分を作って待つという重労働だ。

「母親って偉大だなあ……」

平日には、これに加えて弁当も作っているってんだから、ほんと、頭が上がらない。

テレビを見ると、朝の子供向け番組が放送されていた。

アニメ（バトスピって何？）、戦隊もの（カードダスが喋ってる！？）、仮面ライダー（二人で一人は完全に都合悪いだろ）、プリキュア（ナナっほう！）。

小さな子供だったらいいだろうけど、この歳になるとこの時間まで起きられないもんなあ。どうして子供の時にはこの時間帯に起きられたんだろう……。

ま、早く寝てたからだよな。

俺は軽く目玉焼きでも作ってテーブルに置いておいた。

「あれ！？ 日本菜発見が終わってる！」

日曜の朝は石ちゃんのだジャレから始めるのが定石だろうに！

俺がそんな程度のこととて頭を抱えている最中、

ピンポーン

と、響き渡った。

「ん？ 誰だろう？」

俺は駆け足で出ていき、扉を開けた。

「あう。あ、あ、あ、あのあの……」

開けた先にいたのは、隣の部屋に住んでいる女の子だった。

同じクラスじゃなかった気が……。

「あ、私、あのあの……私は……」

「……………」

「あの、私です！」

「いや、そりゃそうでしょうけど……」

あなたが俺だったら大変です。

「とりあえず落ち着いて下さいよ。確かあなた……」

「はいっ。隣に住んでます、九一咲苗（こいちさなえ）って言われてます！」

「じゃあ、俺もそう言います……」

「あ、はい！ ガンガン言っちゃってください！」

「いえ、用事がある時だけにします……」

なんだ、この人？

普段は九一だけど本当は違うみたい……。

まあ、いいか。何やら知らんけど、気が動転してるみたいだし。

言い間違えたってことで。

「あの！ 竜崎賢（りゅうさきけん）さんで、あってますか？」

人違いだった。

「いや、俺は賢じゃないよ」

彼女の言葉を受け、俺は訂正で返した。

この拳動不審けんどうふしんぶりから見ても年上というわけではなさそうだし、

敬語を解く。

すると、急に緊張の糸が解けたように「え？」と首を傾げる咲苗

ちゃん。

ヤバイ、カワイイ……。

小首を傾げた様子がどうにも小鳥のようで愛らしい。

頭頂部から一本、クセ毛のようなものが立ち上がってるから（ア

ホ毛ほけって言うっけ）、更に彼女の小鳥化を促していた。

どこか胸の苦しくなる感覚を抑え、俺は気取られぬように返す。

「賢けんってのは、俺の双子の兄貴のことなんだ……。俺は陽よう。よろし

くな」

「そう……なんですか……」

「ん？ どうした？ 急にうなだれちゃって。具合でも悪くなったのか？」

「い、いえ……別に」

あからさまにテンションが落下している彼女。どうしたんだろう？

「あ、そ、そうだ……。私、その賢さんに用事があって来たんです

……」

見ると咲苗ちゃんは、制服姿だった。私立彩桜学園の女子の制服。彼女は言いながら、鞆の中をまさぐっている。

「これを、賢さんに渡してくれませんか？」

鞆から抜いた手には、大きな封筒が握られていた。A4サイズはあろうかという大きさの封筒だった。

「私立彩桜学園生徒会……って」

封筒の外面に書かれていた文字列を読み上げると同時に、俺の顔は驚きに溢れた。瞬間、顔を上げると……

「はい」

につこりと微笑んだ、咲苗ちゃんがこちらに向いている。

「私は九一咲苗。私立彩桜学園の生徒会執行部に所属しています」

俺は啞然とした。

この子が……この、人見知り系ドギマギ屋さんが……生徒会執行部だなんて……。

でも、賢になんの用なんだろう。

「では、お願い、しましゅ……」

噛んでるし。

25話・日曜日の訪問客（後書き）

お久しぶりです、短い更新ですNOTEです。

今回は凄い期間開けてしまいました。

その結果、今回はだいぶ短い時間で書き上げてしまったという始末……。

自分としては、一話で4000文字程度を目標に書いていたが、関係ないような気がしてきましたね……。

もう好き放題に書きちゃおうかな、みたいに思えてきたので、書きたい時に書きたいくらい書こうと思います。

元々、このお話はそんなコンセプトだったので。

さて、ここまで書くと九一咲苗さんのことに触れることができないで終わってしまいますね。

触れてしまうと、もしかしたら本編よりも長くなる気がするので、「苗が咲くツてなんやねん！」

みたいな突っ込みは今後、たっぷりとしていきたいと思います。

次回はいつに更新できるやら……NOTEでした。

26話・訪問客からの招待

俺はソファに、所在なさに座る。だだっ広い部屋に、他者の姿はない。

「つつか、今日はみんな、また意味もなくお寝坊さんだな……」

いいとも増刊号も始まりそうな頃になっても（チャンネルを変えた）、誰一人、起床してくることはなかった。

あの賢けんでさえも、である。

「せっかく、用事が舞い込んだつてのに……」

意味もなく、先程受け取った封筒を手取る。

あのあたふた娘——九一咲苗いっしゅいちまなえさん、だっけ——が持って来た、大きいサイズの封筒である。生徒会執行部とか言ってたっけ……。

生活部（いわゆる風紀委員だ……改名すりゃいいのに）に所属している賢に用事とは——近々、学校で大きなイベントでもあったかな？

いや、学校行事に生活部の出番はないから、もしかしたら事件でもあったのかも。

「事件ねえ……」

ま、そのことはいいか。俺には関係のない話だ。

封筒をテーブルの上に戻したところで、

ピンポン

と、再びチャイムの音。

「今日は客が多いな……。今度は誰だ？」

また新キャラ登場じゃねえだろうな、などと考えつつ、玄関へと向かう。もしかしたら、あの娘こが戻ってきた可能性も考えられる。封筒以外にも渡すものがあった、とか。ここであの娘が積極的にフラグを立てることもないだろうが……。

ピンポンピンポンピンポン

「あー、はいはい！」

こんなにインターホン連打する人間がいるのか。あの娘ではおおよそ考えられない事態だな。

けたたましく奏でられるチャイムに、スコープを覗く暇もなく、扉を開ける。

「本当に引越してたんだなあ、賢……ん？ ああ、陽ようの方か」

姿を現したのは、スタイリッシュなサングラスをかけた男性だった。髪を赤く染め、無造作に乱している。黒い革ジャンにジーンズ

……いかにも軽薄そうな服装と態度の人間だ。

「利家としやさん！」

見覚えのある人物だった。

始閣しかく利家。

俺の知り合いの中で、一番アクティブでデンジャラスな人間だ。

『人は見た目じゃない』とか言うけど、この人ほどその言葉が適用されない人間はいない。

言うのなら……やんちゃ時代の俺を、一番かわいがってくれていた人、ということだ。

「久しぶりだな、陽。おーおー、まったく丸くなっちまってまあ。

出家でもしたのか？」

「頭を丸めたつもりもないし、仏門に入った記憶もありませんよ」

「いやいや。そんなことになったら、お前ほどの破戒僧DESTROYERもいないだろうよ。なあ、生臭坊主なまぐさ」

「だから、坊主じゃありませんって」

ここに来たということは、一応、客として来たのだろうから、中へと招き入れようとしたところ、

「いや、今日はお邪魔をしに来たわけじゃねえ。ただ、ちょっとドライブといかねえか？」

と、俺を彼の車へと、逆に招待した。

26話・訪問客からの招待（後書き）

文字数を減らしたら結構早く更新できるようになりました、NOTEです。

次々と矢継ぎ早に新キャラが出てくるこの頃ですが、新シリーズへと突入ということなので、結構展開が転々としていきます。

一話を短くしているので、これまで以上に気軽に読んでいただければと思います。

シーンごとに区切るというのもおもしろいものがあると感じてきました。

だからなんだって話ですが。

今回も新キャラに触れずに行こうと思いましたが……

『しかくとしや
始閣利家』

字面から戦国武将を連想する方もいると思いますが、ただのアナグラムで考えた名前です。

視角と視野。

つまんねえ。

よっぽど無駄なことに頭を使っているNOTEでした。

27話・平和ボケ

俺は車について、あまり詳しい方ではない。しかし、クラウンは好きな方に分類できるものだ。クールだし、座り心地がいい。

特に、利家としやさんの『アスリート』はどこか爽快な気分さえした。

まあ、それにはスピードメーターの振り切り具合も加味されていたのだから……。――

俺を乗せた黒塗りの車は、市街地の中心部へと向かった。

久しぶりのシートに腰を埋めうずつつ、車内を満たすビートに耳を傾けていた。

「で、何の用事ですか？ 利家さん。本当に、ただのドライブってわけでもないんでしょう？」

「お、それに気づいた上で同行してくれるってことは、返事いやおうは否応なしにOKだと、そう思ってもいいんだな？」

利家さんはサングラスの奥の目をニヤつかせて言う。

「いやあ、助かったよ。なんせ今回は、俺一人じゃあ面倒なことだったからな」

「いやいや。勝手に話を進めないでください。さっきの利家さんの言葉じゃないですけど、俺だって一応は丸くなったんです。またここいらで弾けるわけにはいきませんよ」

否定の言葉で返した俺に、「ちっ。そうか」と皮肉そうに笑って運転を続ける利家さん。

「ま、そっちの方がいいのかもな、お前にとって。自分じゃわからんかも知れんが……今のお前、楽しそうだし」

「そう……ですかね」

「そうだろ。俺がインターホン連打した時の反応だって、ずっと高校生のガキくさかった。昔と違ってな」

どんな反応だったかなんて覚えてないけど、確かに、昔とは違う

のだろう。違っていないくは困る。

俺は、昔に返るつもりはないのだから。

「——って、そうじゃなくてですね。俺が言いたいのは、手伝うも手伝わないも用件次第ってことですよ。弾けることのない単調作業ルーチンワークなら、俺も手伝いますし」

俺が言つと、運転席ではぽかんと口を開けてこちらを見る大のオトナの姿があつた。

開いた口が塞がらない、って表情でこちらを見ている。

うわー。こんなの初めて見た。人間って本当にこんな顔できるんだ。顎が外れる寸前だ。

「って、利家さん！ 前！ 見てください前！ 信号！ 赤ですつて！」

急ブレーキをかけた車は、停止線をギリギリはみ出して止まった。勢いが止まらずに、俺の上体はかなり前へと押し倒される。シートベルトで腹痛い……。

「何やってんですか！」

「いやー悪い悪い。まさかそこまでふぬけてとは思わなかったからさー」

「はあ………？」

「単調作業をお前に任せる程、俺はサボり魔じゃねえってこつた。ルーチンワークそんな考えにまで及んでる時点で、お前に頭脳戦はやらせらんねえよ」ブレンワーク

結果、かなりなめられているらしい。

俺の頭脳はあてにならないってか。

「まあ、平和ボケしたお前に仕事——いや、頼み事を持ちかけようとした俺も焼きが回ってたかもな」

「ったく、俺を罵倒しに来たんですか？ だったらもつと暇の潰しようもあるでしょうに……」

「悪いな。今の俺、結構暇じゃなかったりする」

青信号に変わったところで、発車する。

どうやら、このまま市街地から出るらしい。

「引き返すのも面倒だし、このまま連れていくことにするけどいいか？」

「どの道、選択権なんかなかったんですね……」

戦力の投入に積極的な人だなあ。昔と変わってない。

「いいんですか？ 利家さんが言うところの平和ボケした今の俺じやあ、足手まといになるかもしれませんよ？」

「まあ、大丈夫だ。そうは言っても、俺でも力バーできるだろ」

自信満々にそう言っ、車を停める利家さん。

彼が停車したそこは、人通りも車通りもない広場だった。元は住宅建設の資材置場だったのか、材木などという建築資材がところどころに置かれている。

「何するんですか？ こんなところで……」

問うと、利家さんは道路を挟んだ少し奥にある廃ビルの方を見つめていた。

いや、見つけていたのは人に忘れ去られたそれなんかじゃないだろう。建物とは地図で目的地を探す為の目印でしかない。そんなところに興味を持つ利家さんではない。

彼が見ていたのは、その廃ビルの入口にたむろしている人物たちだろう。

「早速いたぜ、お目当てさんが」

言うなり、彼はシートベルトを外した。

27話・平和ボケ（後書き）

早いぐらいの更新頻度を誇っていますNOTEです。

ここまで早くしてしまつと、逆に後書きで書く内容が薄くなつてしまつような気がしますね（ってか、そもそもいらんものだよな、一話ごとつて）。

今回の新章は陽の過去がよろつと出てくるようなお話に仕上がる予定かとおもいます。

これを機に一日一更新とかを狙っているわけではないので、今度の更新は遠くなる可能性があります。くれぐれも誤解ないようにお願いします。

1ヶ月開いてしまっていたのですが、変わらず見ていて下さる読者様がいることを信じて……。

NOTEでした。

28話・騙し討ち

裏をかくとはどういうことなのだろう。

騙す。

欺く。

謀る。

嵌める。

隙をつく。

意表をつく。

抜け駆けする。

罠を使うのもいい。

相手がそうだと思った方向とは違う方向に向かうことが、裏をかくということなのだろう。

簡単だ。

それはすなわち常套手段じょうそうしゅんでないということ。

それはすなわち邪道手段であるということ。

自分が常道だと思わない手段を講じればいいということだ。

しかし、それでは裏道を通っただけだ。

舗装された、小奇麗な路地裏を通るだけだ。

簡単過ぎる。

考えた上での行動なのだろうが、相手も思考できる以上、相手が自分の裏を読んで上回る可能性は十分にある。

裏をかくためには、裏口を抜けるだけでは、裏道を通るだけでは駄目だ。

相手を騙すつもりなら、それは近道かつ地下道でなくてはならない。

いかに意外な場所を、速く抜けきることができるか、ということである。

相手の思考を読み、自分の謀略を読んだ相手の思考まで読むことなど、時間をかければ誰でも可能だ。問題は、それをいかに早く考えつくか。

「『天才は、1%のひらめきと99%の努力である』ってな」
それは、本当のことなのだろうと思う。

しかし、裏をかく裏稼業では、そんな悠長に構えていられるものではない。時間の1%を無駄に浪費することで、生命を落としてしまう危険性がある。

一から十まで、直感とひらめきが左右する世界だ。

「俺は、そこで大事なことを学んだ」
賢^{けん}に、そう言った憶えがある。

「相手の考えを読むことは、相手のことを考えるってことで、つまり相手のことを思いやることなんだと思うんだ。いつまでも自分のことばかり考えていると足元をすくわれる。だから、他人を想って自分を救うことが大切なんだよ」

「君は、間違っているよ。君こそ騙されているんだ」
賢は一言でそう言った。感情も欠落したような無表情で。

「第一、相手を騙そうとすることがどうして相手を思いやることに繋がるのかがわからないよ。君の言っていることはおかしい。愚かしいよ、陽」

無表情——いや、当時の俺にはそうとしか映らなかったのかもしれない。けど、今は違う。

あれは、怒りだ。

はつきりとした憤慨の表情が、賢を埋め尽くしていたんだ。

俺は、それに気がつかなかった。自分のことしか、考えられなかった。

何も、学んじやいなかった——。

俺は、バカだ。

「おい、陽^{よう}」

はっと我に返った。

そこは、利家としやさんの車の中だった。

「どうしたよ、ボーっとしちまって。何かあったのか？」

「いえ……」

帰ったら、賢になんて言おう。

また、あの頃のようなことをやっている俺を、許してくれるのだろうか。

「何でもないですよ、利家さん」

俺はごまかすように手を振ってみせる。

「それより、用事があるんじゃないんですか？ あいつらに」

そう言つて、廃ビルの方を指さす。そこでは数人の男たちがたむろしていた。

シートベルトを外したきり、利家さんは考えるようにして顎に手を当てているだけだ。この人が思い悩むところなんて滅多に見られるものではない。

「どうしました？」

「いや、このまま正面から堂々と行こうとも思っただけだなあ……」

……。依頼主クライアントは自分の方でも動く予定があるって言つてたしな。あまり目立つた行動を起こすのも問題かと……」

「はあ……それで？」

「よつて、我々はこれから変装をしようと思います」

「いい加減意味わかんねえよ」

キレてみた。そりやもう現代の若者風にいきなり。

しかし態度一変な俺に構う気配も見せない利家さんは、後部座席に置いてあつた紙袋を持ち出す。

「なんですか？ これ……」

俺・竜崎陽りゅうせきは、この後、今世紀最大のピンチを迎えることになります。

29話・龍と呼ばれたジャージ

「いやいや無理ですやめてください訴えますよもう嫌キヤー！」

利家^{としや}さんが紙袋の中から持ち出したのは、ナース服だった。それを、あろうことかこの俺に着せようと言うのだ。

「なんでそんなもんが必要なんですか!？」

「いやだってほら、お色気作戦つての？ お前が惹きつけてメロメロにしてくれりゃ、こっちも楽になるし」

「純朴な少年に何を求めてるんですか!」

「まあまあ。新しい道が拓けるかもしれないぞ」

「俺に女装なんてさせないでください！ 死んでも嫌です！ ミミズを噛み潰すくらいに気持ち悪いですから!」

「その気持ち悪さは想像したくないな……」

本気で引かれた。いや、むしろ退かれた。

「わかったよ。そんなに言うなら、こっちで我慢してやる」 利家さんは言う（しかも渋々な感じで）、紙袋の中から、また別の服を取り出してくる。

それはジャージだった。

真っ赤なジャージの上下。腕や脚に白いラインが引いてあり、背中には大きく『龍』と書いてある。

ところどころがボロボロのそれは——見覚えのあるジャージだった。

「……まだ持ってたんですか」

「まあな。お前に、いつか必要な時が来るのかもしれないと思って、いりませんよ。しまつて下さい。俺はこのままでいいです」

「そういうわけにもいかんさ。そのままで行くなんてことはやめてくれ。一応、俺の相棒みたいな立ち位置でいてくれないとな、困るんだ」

「俺をまた、その世界に引き込むつもりですか。それだけは嫌です。」

あの暴力の世界にはもう、二度と戻りたくはないんです」

銃弾を——その軌道を見たことがあるだろうか。

俺は、無い。

いや、発砲の瞬間を見たことがある。

正確には、飛行する弾を見たことがないということ。

発射点から着弾点までの距離を高速で移動する弾丸を、見ることはできない。目で追うには不可能なスピードなのだ。

しかし、硝煙を上げる銃口と、地面に穿たれた弾痕は、今でも目に焼きついているのだ。

「俺からは——そんな世界に戻る度胸なんて失せました」

「わかってる。これを機に——なんてことは考えちゃいない。だから、これつきりだ。もうお前に無茶はさせないさ。だが、今日だけは、お願いできないだろうか」

「……………」

わかっていた。

利家さんが玄関の前に立っていたその時から。

このような事態になるんじゃないかってことは。十中八九、そうなるのだろうと考えていた。

じゃあ、なぜ俺はここまでついてきた？

利家さんが車から降ろしてくれなかったからか？

違うだろ。

俺が自分の意思で、彼の車に乗り込んだんだ。

「だから——本当にこれつきりですよ」

俺は彼の取り出したジャージに手をかけることもなく、車のドアを開けた。

29話・龍と呼ばれたジャージ（後書き）

はよ外出ろや、って感じですよNOTEです。

いやー特に前回が意味分からなかったと思いますが、今回も今回で意味分かりませんよね。

裏をかく？

ジャージ？

龍？

は？

みたいに思う皆さんも多いことでしょう。そんな気がいたします。その点については、今は特に言及も追求もいたしませんので、ご了承ください……。

30話・侵入

「結局、そこに落ち着くわけか」

歩きながら、利家^{とじや}さんは言う。

俺は着替えなかった。家から来た格好そのままにいる。

なんで今まで俺の服装を描写しなかったかって？

簡単だ。描写するほどの価値がないから。普通の服だもん、仕方ない。

黒のTシャツに腕まくりをしたパーカー。下にはジーンズを穿いている。

な？ 普通だろ？

俺と利家さんは車から降り、廃ビルへと向かった。

何やら不穏な雰囲気漂う男たちのいる入口は避け、裏口を探した。

「今回の依頼は隠密性を重んじたいんだよな。だからこそそしちまうけど我慢してくれ」

それに関しては俺も望むところだ。

派手に暴れて顔が晒されるのも嫌だからな。

廃ビルの中は、意外に荒れている様子はなかった。

ガラスは割れ、ところどころコンクリートがむき出しになっているところもあるが、どうにも掃除したように見受けられる。廊下の端に集められているのだ。歩道の空き缶や吸い殻なんかも、掃き掃除をされていればこんなものなのかもしれない。1階の廊下を歩く2人だったが、どこかに向かうような明確な目的地があるようではなく、俺は相変わらず利家さんについていくのみで、肝心の利家さんは何かを探すようにいろんな部屋を覗いて回っていた。

ドアを開け放ち、その反対側のドアも開け、どんどん部屋の中身を見て回る。

「何か探すことが、今回の依頼なんですか？ 利家さん」

「ああ。まあ、物じゃないけどな。人だ。この廃ビルの中に人間が

捕らわれているんだよ。それを助け出すのが俺の仕事ってわけ」

「そうですか。っていうか、そんな人質が、こんな1階みたいなさなところに閉じ込められてるんですか？ もっと階を重ねたところとか、あるいはボスの近くとかじゃ……」

「大事なものはその捕らわれのお姫様に逃げ出されないことと、俺みたいに助け出しに来た人間に見つからないことだから、階数は関係ないんだけどな。しかし、その通り。ボスの近くとはいかないが、監視しやすい場所に閉じ込めておくのがベストだな」

お姫様と言ったか？

ならば依頼主はその女性なのだろうか。いや、人質の身で、敵地から連絡をとれるとは考えがたい。やはりその女性の関係者といったところだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいいんだろうけど。

「じゃあ、こんなところでうるちよろしてる場合じゃあ……」

「まあそうなんだけど……あ、おい陽、入ってみるよ」

話を逸らされ、言われるまま呼ばれるままに入ってみると、そこには豪華な作りの調度品が並べられていた。これまで見てきた部屋には調度品すらない悲惨なものばかりだったためか、ここだけかなんとか異様な空間のように思える。

「テーブルに椅子、花はないが花瓶や書棚しょだなまで……結構な御趣味なことと、これは。このビルの持ち主の趣味なのかな」

高そうなテーブルをバンバンと乱暴に叩きながら嘆息する利家さん。

この人は他人の物を大切にするとか、高いものには気をつけようという気遣いがないのか。はなはだ疑問である。

しかし、入った瞬間からおかしな部屋だと思った。なんだか異様な雰囲気かとわりついている。

今までの部屋は、捨てられてから誰も立ち入っていないような、忘れ去られたような感覚があったが……。

「ほら、見てみるよ」

そういうと、利家さんはテーブルの上に指を置き、スーツと這わせて、その指の腹をこちらに向ける。

「いくら高そうだとはいえ、ホコリ1つないってのはどうなんだろうな」

そうか。

この部屋の異様さはそこか。

他の部屋は、人間が使った気配すら認めることができなかった。どこもずさんで、悲惨で、凄惨なものだった。

人間がほったらかしにしたものだった。

しかし――

「ここは、最近に人間が使った形跡がある」

この廃ビルには珍しいことだ。

ということとは、この部屋には、この廃ビルに溜まっている連中の内、誰かが普段使っているということになるのだろう（下っ端か、幹部か、ボスかはわからないが）。

「まあ、それはまたこれから調べていけばわかることだけだな」

言いながら、利家さんは部屋から出ていこうとする。

だが俺は、立ち止まったままだ。

ザコキャラや幹部連中が、こんな物を使うだろうか。偉そうにふんぞり返っているやつにこそ、この家具は合うのではないか。

ボスカ……。

しかし、人が使った形跡があるとはいえ、さほど頻繁に出入りしているわけでもなさそうだし。

と、そこで……

「お前！　そこで何やってる！」

扉の外から荒々しい声が聞こえた。

これは、利家さんのものじゃない！

「利家さん！」

俺は室内から出入り口へと駆け出す。

利家さんは見つかったのだろう。だとしたら彼は、隠密性を期す

ために相手を制しにかかるはずだ。

その拳をもってして。

本意ではないが、俺も加勢しなければ！

俺は出入り口まで駆け寄る。

が。

瞬間、この部屋からの脱出路を絶たれた。外側からバタンツと、扉を閉じられてしまったのだ。

「と、とし——！」

叫ぼうとすると、扉のすりガラスに影がぶつかった。利家さんだ。俺は扉を思い切り押して開放を試みるが、それは、利家さんの声によって遮断された。

「陽——お前、このまま別ルートを行け」

「え？」

普段よりも抑えられた利家さんの声。

そのトーンが、俺を落ち着かせる。

「二手に別れるぞ。そこにはもう一つ、扉があるはずだ。そこから出る」

「でも、利家さん——」

「あいつのこと、頼んだぞ……」

それっきり、利家さんの声は俺へと向けられなかった。

30話・侵入（後書き）

ご無沙汰しています、NOTEです。

個人的に忙しい日が続いてしまつて、あまり更新できずにいました（知らねーよつて感じですが）。

さて、今回になってやっと動き出した2人ですが、いきなり別れてしまいました。

漢字としては「分かれた」が適切なのでしょうけど。

同じと言えば同じですね。

言葉遊びが好きな本人ですが、そこは割とズボラです。

さて、次回予告というかこれからの予定なのですが……
あの人が出ます。

閑話・お待ちどう

「ねえ陽ちゃん。こっち向いて」

この21世紀に入ってから恐らく初めてであろうムーミンのよ
うな呼ばれ方をした俺だったが、しかし素直に振り向いて見る。す
るとそこにいたのは、くりくりおめめのツインテ・姫宮彩ひめみやさやだった。

休日のある日。

トイレから自分の部屋に戻ろうとしたところで呼ばれたのだ。

自分の部屋に戻るためにはどうしても共用スペースであるリビング
グを通らなくてはならないので、それはいいにしても。

彩はソファに寝転がって、頭を手すり部分からぶら下げてこちら
を見ていた。頭を逆さまにして向いてるので、彼女ご自慢のツイン
テールが床まで垂れ下がっていた。

「……………」

こんな妖怪いそうだな。

女子高生を見た際の感想としてはいかなものだが、気味の悪さ
で言ったら妖怪に引けを取らないだろう。2本の髪の毛が脚部みた
いにひよこひよこしている。

気持ち悪い。

「なんだよ、彩」

別にどうとでもなさそうに、ただ呼ばれたから返事をしただけ、
というように言葉を出した。

すると彩は、

「どこに言ってたのさ」

どことなく強い口調で、どこか俺を非難しているような顔つきで
返してきた。

……いやいや。

逆さまの顔でそんな顔されてもちっとも怖くないというか。

逆に愉快なだけの顔になってるぞ。

そろそろ顔も赤くなってきたいるし。

「あの……そんな20世紀の不良娘みたいな喋り方だっけ？ お前」
「そんなことはどうでもいいよ！。それより、どこに言つてたのかを訊いてるんだよ」

「どこって……今さっきトイレから出てきたばかりじゃんか。汚い話で申し訳ないけど」

「違う！ 違う違うよ。全然違うよ。勘違いしないでよね」

ツンデレ風な台詞を挟む要素がどこにあった。

「私が言いたいのは、この一ヶ月間、どこで何をやっていて、どうしてこの閑話まで1話も進んでいないのかってことだよ」

「……………」

……………。

……………。
いや、俺（竜崎陽）に言われても……。

「三点リーダーで返したって納得しないよ。私はその理由を聞くまで、頑としてここから動かないよ」

そう言いつつ、仰向けでソファに寝たまま、頭をだらんと垂れてこちらを見る。

強そうにでも見せたいつもりなのか、腕組みもしていた。

全然強そうじゃない。

つつか、その状態のまましていると、頭に血が上って死ぬぞお前。

だんだん顔色が青くなってきたてんじゃん。

「そんなん、理由なんかないだろ。ただサボりがちだったただけなんじゃねえのか？」

「こちらとしての文句を言わせてもらうとだね、前シリーズなんか露原つゆはらさんの話でさ、私の出番がまったく言っていないほどなかったじゃない？ だから今回は、と思って気合入れたのに、未だ出演なし。新キャラが湯水のように出てきたのにさあ、私の出番はやっぱりなし。何これ。いじめ？」

知るか。

俺に言われても困るわ。

「新キャラわんさかパラダイスの最中、私たちメインキャラは『それは置いて』の対象ですか」

「仕方ないだろ。話の進行上、新キャラの登場は避けられないことなんだから」

「陽ちゃんはそれでもいいよ。モノローグ担当なんだからいらなんてことがないもん。常に語り部なんだから必要なことでしょ」

「でも、俺はお前たちが必要ないなんて言ったことないだろ」

「え……？」

急に強い口調で言った俺に対し、彩が少し目を見開いた。

ああそうかよ。

聞こえなかったってんなら何度でも言ってる。

こういうとけしかけられたことに対しての逆ギレみたいに取られるかもしれないけれどな、そんな格好いいとか性格悪いとかそんなもん関係ない。

必要か必要じゃないか。

俺の周りで、そんなことで悩まれる筋合いなんかない。

だって、俺は一度だってお前や他のやつら。

賢^{けん}だって智^ち里^りだって、露原^{ろげん}だって、これからどんどん出てくるであろっ新キャラの面々だって。

誰一人いらんないやつなんかいないんだからな。

「俺はお前が必要なんだ。これまでだってこれからだって、いらなくなるなんてことはないし、ずっとそばにいて欲しいんだ」

「よ、陽ちゃん……」

「だから……だから、俺は……」

しかし、言葉の続きを紡ぐことはできなかった。

ボタン、と。

彩がソファの上から、床へと落ちたのである。

ソファの上で一旦転がったときは、まるで自分の力で動いたかの

ように見えたが、そこからはただの落下だった。
物理現象にのっとった自由落下である。

「さ、彩！」

思わず叫んで、俺は彩のもとへと駆け寄った。
そして、彼女の上体を抱きかかえる。

軽い。

まるで体重を感じさせないほどに軽い矮わいく躯。

抱き上げた彼女の顔はぐったりしていて、とても直視できないよ
うな、普段から見せる女子高生のかawaiiそれとは遠くかけ離れて
しまっていたが、それでも、俺は呼びかける。

「どうした？ 落ちた時に頭でも打ったか！？」 彩。俺がわかるか
？ 彩！？

「よ、陽ちゃん……」

薄く開けた、とろんとした目で、彩はこちらを見た。

力なんてこもっていない。

こめられない何かが、今の一瞬の内に、彼女の身に遭ったという
のか。

「気持ち悪い……」

まあ、あんなだけ頭を逆さまにしてたらねえ。
血も上るわな。

「もういらねーよ。こんなオチ」

閑話・お待ちどう（後書き）

ご無沙汰とか言っている期間かはわかりませんが、結構な月日を開けてしまいましたNOTEです。

意味のない話から入りますと、どこかに『セレナさん』と『キューブさん』がないかな、ツて思ってます。

「セレナです」

「NOTEです」

「キューブです」

とか、

一度やってみたい感じで。

.....。

すいません。

現実逃避をしてしまいました。

実際にいろいろ忙しかったというのもあるのですが、一時期はスランプ状態にも似たことがあったので、これだけご無沙汰してしまいました。

元々あまりいい文章じゃないのにスランプも何もないとは思っておりすけれども、そこはそこで、寛大な皆様のご評価にお任せしたいと思います。

さて、今回は閑話ということでお届けしましたが、近いうちに本編の方もお届けしたい次第ですので、できればご一読ください。

この空白期間内、見限らずにお気に入り登録してくれていた皆さんに感謝の念をこめつつ。

NOTE
でした。

31話・不測の再会

利家^{としや}さんは言った。

「あいつのこと、頼んだぞ」

あいつというのは、恐らくこの建物内に捕らえられているという女の子のことだろう。それ以外には考えられない。

彼は廊下に飛び出でて、俺をある一室に閉じ込めたきり帰っていない。まだ戦っているのだろうか……戦いを忘れた俺をかばって。

それとも、単に『これからは別行動だ』とでも言いたいのだろうか。

わからない。

あの人が持ち込んできた厄介事を処理するのはこれが初めてではないのだけれど、前に参加したのは随分と昔のことだ。

俺が変わった（それが単なる『変化』なのか『進化』なのかはともかく）、境界を越えた遙か昔。境界を越えたことそれ自体は昔のことではないが、俺からしてみれば、それは生まれ変わりとも黄泉還りとも言えることだった。

だから、頭の奥底にしまっている記憶だ。

部屋を見渡す。

確かに、ここは最近、誰かに使われた形跡がある。

埃^{ほこり}が積もっていないだけじゃない。何か……そう、人の気配——人がいた気配がする。残り香というか……なんというか。

いや、そんなことは関係ないか。使っていたからといってお目当ての女の子がいたとは限らない。

そう。女の子、だ。

まずは女の子を探さないとな。俺はその為にこんなところまで来たんだから。

そこで。

ふと気付いた。

「つて、待てよ？」

逆に、ここまで気付かなかったのがおかしいくらいの疑問を、俺の頭は思いつくことになる。

「俺、助ける女の子の名前も顔もわかんねえじゃん……」

相手がわからなければ、助けようがない。

俺は一体誰を助けようというのか。

「利家さんという時は利家さんに任せとけばいいと思ったけど、これじゃマズいな。俺はあの子を確認する方法がない」

愕然とした。

じゃあ今の俺、完全に役に立たない存在じゃん。

俺は近くにある椅子に座った。こんなビルには不釣り合いなほどふかふかで高級感溢れるものだ。何これ、腰が沈む。すげー気持ちいい。

「しかしまあ、どうしようかな」

解雇を言い渡されたサラリーマンの気分だった。心の中が空っぽになった感じ。何も考えられない。

お先真っ暗、頭真っ白。

みたいな。

つまんねえ。そんな言葉で遊ぶしかないのか俺は。

「何しに来たんだ、ほんと」

自分に呆れてものも言えない。こんなことだったら、先に彼女の情報でも聞いとくんだった。どうやら、俺は要領が悪くなったらしいな。まるつきり丸くなっちまった。

本当、馬鹿みたいだ。

「あら？」

その時——俺が椅子に座って頭を抱えていたその時、ふと声がした。

「ま、まさか……。竜崎さん、ですか？」

「は？」

名前を呼ばれたことに驚き、顔を上げる。

二回目の驚きが、直後に来た。

おいおい。

嘘だろ。

声がした方向には、俺の学校の制服を着た女の子が立っていた。

どうやら、俺が入ってきたところとは違う扉から入ってきたらしい。

いや、そんなことに驚いたんじゃない。

俺は、ゆっくり、彼女の名前を呼ぶ。

「九一……さん？」
このいち

すると彼女は、

「はい！ こ、こ、こここの、この、九一です！」

（元気に、しかし異常なほどの戸惑いように答えたのは——
間違いなく、今朝会ったばかりの九一咲苗さんだった。）
さなえ

31話・不測の再会（後書き）

お久しぶりですNOTEです。

一週間ほどでしょうか、ご無沙汰していました。

はつきり言って忙しいとは言い難いのですが（問題発言）、なぜ更新できないんでしょうか。やる気がないんでしょうか。やらない気があるんでしょうか。

どうでもいいですよ。

結局は「書けや」って話ですから。

こんな夜分遅くに失礼します。

NOTEでした。

短い方がいいんでしょうか、これ……。

32話・出会い×別れ

「なんで……君がこんなところに……」

おかしい。

なんだ、この奇妙な光景は。

利家としやさんの仕事でこんな廃ビルに潜り込んで、女の子を連れ出す予定だったのに。

この廃ビルには、他にも血気盛んなお兄さんたちが山ほどいるのに。

なんで、そんなところに。

九一咲苗このいちさなえさんがいるんだ？

「いやー驚きましたあ。偶然ってあるものですねえ。こんなところで竜崎りゅうさきさんに会えるとは思ってもみませんでしたよ」

危険な場所にいることなど忘れてしまいそうなほどに、彼女は陽気に笑っていた。

まるで危機察知能力のない子供だ。

「そ、それは、俺も同じだけど……」

「あ、そうだ。この間はお世話になりましたあ」

「は？」

「竜崎さんのおかげで随分と早く済んだんですよ、仕事。もう、委員長の人使いの荒さには参りましたよねえ」

何を言っているんだ？ この人は。この間って……俺たちは今朝初めて会ったばかりじゃあ。

あ、まさか。

「あの、俺を賢けんと勘違いしてる？」

「はい？ 俺？ ってことは……」

そこまで言うと、彼女は間違えて飴でも飲み込んでしまったかのように目を見開いた。

「もしかして……竜崎、陽さん、ですか……？」

「……ああ」

「ご、ごめんなさい。私、勘違いしちゃったみたいで」

「いや、いいんだけど」

なんだろう。

勘違いされていたせいなのか、彼女とは、これが初めての会話だと感じてしまう。

そんな馬鹿な。

「ということは、今朝会ったばかりですよね？」

「そうだね。あの時も、咲苗さんは俺のことを賢と間違えた」

そんなに賢と仲がいいのだろうか。

仕事上の関係？ それとも……。

まあ、関係ないけど。

「ええ、重ね重ねごめんなさい。それで」

彼女は、言葉を紡ぐ。

「あなたは、どうしてこんなところに？」

「俺は、ちよつと用事でね」

こんなところでごまかすのもおかしいとは思ったのだが、どこか彼女に違和感を覚えずにはいられないためか、はぐらかした。

「こんな虎穴に用事だなんて、やんちゃさんなんですネ」

フツツと笑う。

普通の女の子の仕草だ。どこにもおかしい箇所なんてない。

こんなビルにいること以外は。

でも――

「虎穴ね」

確かに、虎子を得るためには虎穴に入るのが教科書通りか。

「そうだな。ここは、立派な虎穴だ」

「はいッ。ライオンズマンションです！」

「何がそんなに嬉しいのか知らないけど、虎穴とライオンズマンションは類義語じゃないし」

ライオンズマンションに失礼だ。

住民が運動を起こすぞ。

「ペット禁止、ただしライオン以外は——みたいな感じでしょうかねッ」

「おちおち寝てらんねえ！」

「つかこのくんだり引つ張るの!？」

「そんなことより……君は？ どうしてこんなところに」
「……………」

俺の質問に、咲苗さんは答えない。

彼女は近くの長テーブルに座り、脚を投げ出した。

「……大切な人に、会いに来たんです」
脚をぶらぶらさせる彼女。

「この廃ビルの上階は、元々マンションだったんです。安いんですけど。それが、少し前に、文字通り潰れてしまったみたいで」

「潰れた？」

「少し前に？」

「でも、この荒廃具合は……………」

どう見ても、最近潰れましたたって感じじゃない。

「おかしいと思いませんか？ この部屋」
そう問われて、思いかえる。

「ビルの外装に合わない照明器具、カーテン、調度品……。ここは、隠れた賭博場だったんです、違法の」

賭博場？ こんな場所に？

「一階部分はバーで、その奥につくっていたらしいんです。でも、それも見つかって、踏み込まれたのだとか」

「……踏み込まれた」

「その踏み込んだ人たちというのが誰かはわかりません。警察がもしれませんか、他の……暴力を行使する人たちだったのかもしれない。何せ、働いていたのは違法行為ですからね」

最近。

今までバーとして装っていた外見そとみから、中身なかみがばれてしまった。
もしかしたら暴力団絡みの仕業なのかもしれない。違法な賭博場だ、
そりゃトラブルだって起きるだろう。

それで踏み込まれて——結局は潰れた。

人為的に、潰された。

「その時に、マンションも……」

「ええ。終わっちゃいました。だから、警察の行動ではないのかも
しれませんね」

「その、大切に会いに来たら、こんなことに？」

「知りませんでした。こんなことになっているだなんて……」
うつむく彼女に、俺は、かける言葉がなかった。

大切な人を失った——。

死んだわけではないだろうが、消息不明だって似たようなものだ。
会える可能性は激減する。ほとんど皆無だろう。

「……………」

思い当たる節が、ないでもなかった。

俺には両親がいる。賢だっているし。彩さやも、智里ちさとだって……。

だから、俺は立ち直ることができた。

更正することができた。

今、こうして生きていられる。

「大切な人に会えない悲しみは、わかるつもりだ」

「え……？」

「俺も、昔……」

そう、あれは。

——雨の強い日だった。

「誰だお前ら！」

俺が過去を語ろうと、咲苗さんの前に立った時。
やばい。

見つかっちゃったか！？

32話・出会い×別れ（後書き）

久方ぶりですNOTEです。

早めに更新することができました。

さて、今回登場した九一咲苗さんなのですが、皆さん覚えていてでしょうか。覚えてねーよだって随分と久しぶりなもの、とおっしゃる方々。気持ちはわかります。そんなときは読み返そう！

面倒っすけど。

こんなに期間を空けてしまいましたからね（一ヶ月……ありえねえ）、少しは違和感くらいあると思いますが割愛よろしく願います。

それでは、ご挨拶もほどほどに失礼しますNOTEでした。

33話・弱さ

『偽りとは誰かを犠牲にした真実である』

そんなことを言っていたのは……誰だったか。

偉人じゃない。

だとすると身内か。とんでもなく変質な身内もいたものである。要するに。

真実を隠す為につく言葉は、必ず誰か犠牲を伴うって話だ。

それが——時に自分でも。

そして、その偽りが誰か一人のためのものだとして、その人が真実だと認識した時、それは真実となる。その人にとっては、少なくともそれだけが（嘘だという可能性があることを考えなければ）、確かな情報として認知されるわけだから。

嘘も、偽り続ければ真実になる。

でも、嘘なんてすぐばれるよな。

俺は、拘束された。

壁に沿ったパイプに後ろ手で縛られ、自身は床にあぐらをかいている。

手首を縛っているものは……ロープか。まあ、解けないこともないけど、粗い繊維だしな、無理をすると痛い。ナイフもないし、まいったな。

結局、九一咲苗さん（このいちさなえ）と話していた俺は、あの後発見された奴らに
対し、対抗することも抵抗することもできなかった。

結果、拘束である。

面目ないことこの上ない。馬鹿ですらある。

「はあ」

やっぱり、咲苗さんが救うべき女の子だったか。

俺が発見された際、俺は即刻縛りあげられたというのに、彼女はさっきの部屋に置いてきたまんまである。この場合、彼女があの部屋に閉じ込められていたのだろうと考えるのが自然だ。

でも……。

なんで咲苗さんは軟禁で、俺は緊縛なんだろう。

いや、俺の不憫な扱いに納得がいかないとかではなく。

もしや、彼女は何か大事な用事があつて捕らえられているのだろうか。人質や交渉に使われる、とか。まあ、それにしたって両手の自由を奪うくらいはするだろう。

彼女は乱暴をされた風でもなければ、縛られてすらなかった。

それに、わざわざあの高級な内装の部屋に置いた理由がわからない。あんな部屋なら、せめてボスなりリーダー^{だいい}なりが使うだろう。もしかすれば、彼女は奴らにとって、かなりVIP^{だいい}な捕虜だったりするのだろうか。

いやいや、だから、本当に俺だけがこんな不遇な扱いを受けることに不満を覚えているわけではなく……。

あの、だって、男女差別ですか？ この男女共同参画社会であるこのご時世に。

女の子はあんなにふかふかな椅子で、男の俺は地べたですか。

コンクリートですよ。

冷たいですよ。

あなたたちの気遣いくらいに冷たいですよ。

「つつか、これからどうするかだよなあ……」

まったく、ヘマして捕まったのはいいとしても、このまじやあどっうにもしようがない。本来の目的である『女の子の救出』もできっこないじゃん。

他人よりも自分の心配が先、って感じた。

「はあ……。なんでこんなこと引き受けたんだろうな、俺。別に昔のツケも何も気にすることなんてないんだから、車に残ってればよかったんだ……。わざわざあんな……」

あんな……。

——昔の知人なんかに。

「恩人とはいえ、俺の中ではばをきかせ過ぎなんじゃないのかな、利家さん」

俺の中には、今も、俺の大切な人たちがいるってのに。こんなところにとっ捕まって。

本当に俺は心が弱くて……。

「馬鹿みたいだな」

「恩人と慕っている人間に対して、馬鹿とは……ご挨拶なんじゃないの？」

ビクツと、背筋に悪寒が走った。

頭をぶんぶんと振りながら声の出所を探す。どちらかというと首で頭を振り回している感じた。

「何してんだよ。ここだよ、ここ」

言われて、頭上を見る。

「あ……」

天井の、通風孔。

網目状のそれから顔を覗かせる利家さんの姿があった。嵌め殺しなのだろう、彼ははずすこともなくそこから声を送る。

「早々に捕まるとはな。まったく、そこまでお前の腕が鈍つてとは思わなかったぜ、正直」

「利家さん、俺は——」

やっぱり、もうこの手は、拳は……。

「まあまあ、陽を巻き込んだのは俺だし、今助けに行くさ。ちょっと迷っちゃってな、少し時間はかかるだろうけど」

「迷ってたんですか……」

「ああ。進んでたらどんどん道が狭くなっていった。俺の人生かと

思ったぜ」

「あんたの人生観とか知りませんよ」

そして悲しいな、利家さんの未来。狭くなってるんだ。

「おいいたぞ！　ここだ！　通風孔だ！」

「なんでこんな狭いところに！」

「馬鹿じゃねえのあいつ！」

利家さんの奥から、凄まじい怒気を帯びた声が聞こえてきた。まるで指名手配犯を追いつめるべく奮闘する刑事が如く。　ま

って、見つかってんじゃない。

「……。まあ、なんだ。すぐそっちに行くからよ。待ってる」

「わかりました……」

……。気長に待ってます。

ろくろっ首になるかもな、俺。

「……………」

グダグダじゃん。

34話・脱出

「あの、もう一人の方は大丈夫なんですか？」

「ああ、あの人は平気だろ。なんせ、警察の目すらかくぐつて生きてる人だから」

「え、え？」

「シートベルト、ちゃんと締めてくれよ。直進できる保証はねえから」

目を白黒させる九一咲苗さんへの言葉もそこそこに、『アスリート』のエンジンキーを回す。

静かな、しかし重厚な振動を感じつつ、メーターがゼロに戻ったのを確認する。

「行くぞ」

ギアをチェンジしてサイドブレーキを下ろすと、廃ビルから3、4人の男たちが出てきた。どうやら俺たちを追ってきたらしい。

俺を救い出してくれたのは九一さんだった。ドアノブを捻る音が聞こえて振り向くと、そこに九一さんはいた。

「ここにいたんですか。逃げてください」

彼女は俺のそばで屈み、ロープをほどいた。随分とあっさりほどいたな。

「ってゆーか切ったか？」

助けてくれたからいいけど。

「ありがとう。よくここがわかったね。ビルの構造には詳しいのか？」

「そんな話は後です。さあ早く」

そんなこんなで脱出しちゃったとき。

明らかに殺気立った目つきで近づいてくるお兄様がた。ありや簡単に帰してくれそうにないな。

んーやばくないかなー。もしかして利家さん、捕まったかもな。
「まあ、待つつもりはないけどな」

アクセルを踏み込む。エンジンの回転数が急上昇すると同時に、車体は一気に加速した。スポーツカーとかじゃないから、あまり派手な音はならないけど。向かってくる男たちが慌てる。ザマミロ。アクセルを緩めるつもりはない。俺はハンドルをとられないよう用心しながら、男たちの方へ突っ込んだ。

わーはえー。

唸りを上げた闘牛にでも見えたのだろうか。

男たちは情けない悲鳴を上げて散り散りに避けた。そりゃ恐いよな。車が急スピードで突進してきたら。

男たちの間を高速で抜け、そのまま車道へと飛び出す。アクセルワークをコントロール……そして、ブレーキを駆使しながらハンドルを回す、と。そんなこといちいち考える暇なんかない。なぜか勝手に身体が動いていた。

しばらく走行すると交差点にぶつかった。そこから大きな通りへ出て、車線の流れに乗った。

穏やかな速度でのドライブを心がける。

少しすると赤信号に引つかかった。

止まる。

「……………」

車内の『どうにかこうにか落ち着いた感』が沈黙へ誘う。けど、その沈黙がどうも落ち着かない。

変に落ち着く作用でもあんのかこの車種は。座り心地抜群だし。ってか、なんでそもそもあの人、こんな高級車なんか乗ってんだよ。絶対に正規のお仕事や手続きで手に入れたもんじゃねえだろ。汚い金でも使ってるのか。汚い仕事でも扱ってるのかなあの人。最近会ってなかったから詳細がつかめない。

ミラーで背後を確認する。

追手は来ないだろう、たぶん。じゃなきゃ利家さんを置き去りにしてきた意味がない。せいぜい時間稼ぎになつてくれ。

そして沈黙。

とにかく、沈黙。

どうしょ。

音楽でもかけようか。いやいくらなんでもそれはなー、とか思いつつ、HDDの音楽を聞こうとスイッチを押すと、

「ダダダッダッダッダ！　ダダダダダダダダダ！　ダダダダダッダッダ！　ダダダダダダダダ！　ッダーダダダダ！」

超大音量の音楽が流れた。俺も九一さんも身体をビクッと、一瞬間に浮かせた。いやマジで。

耳を抑えながら慌てて音楽を消す。その後は言わずもがな、痛いほどの無音が、壮絶な疲労感と共に流れ込んできた。

おいおい利家さん、なんでこんな車の中でRock'n'Rollしてんだよ。

「……あの」

沈黙に耐えかねたか、九一さんが口を開いた。

信号が青になる。

返事をしつつ、発車する。

「竜崎さんって、確か同じ学年ですよね？」

「そうだろうよ。九一さんは賢けんと一緒に生徒会してんだろ？　賢は九一さんと同じ学年。そして俺は賢の双子なんだから、同学年で間違いない」

「ってことは、高校二年生」

「わかりやすい解説ありがとう」

これを見る誰もが設定なんて忘れてるから助かる。何カ月ぶりの更新なのに一切そこに触れないとはどういうことだと、ずっと思ってたからな（更新サボりをいじるネタも飽きたのだろうかこの作者）。

「竜崎さん。なんで運転できるんですか？」

「ん？ ああ」

そこつつこむの遅くね？

乗り込む時に指摘してもよさそうなもんだけど。そんな心理状態じゃなかったか、その時は。

「昔ね、あらかた教わったんだよ、色々なことを。それこそさっきの利家さんとか、いろんな大人に。どの車種が気持ちよくかつ飛ばせるとか、どの銘柄がうまいとか、ストレートとかロックとか」

「あの、ごめんなさい。理解力が足りなくて……」

「ん？ なんで謝ってんの？」

っていうかこの車どうしよう。停めておくところなんかねーぞ。

まあそこら辺の路肩に停めとけばいいか。そのうち優しいお兄さんがしかるべき場所へレッカー移動してくれるさ。

俺はもと来た道を逆走しつつ、自分の居住地へと向かった。九一さんもお隣さんのはずだから、このまま送っても問題ないだろう。

このタイミングで本来行くべきは警察なんだろうけど……俺にはそんな選択肢、とうの昔になくなって。利家さんが絡むできごとに警察を介入させたらまずいだろうし。

あの人はそういう世界で生きてる人だ。巻き込むなよなー。こちらとら平和に過ごしたいんだから。

このお話が始まった時の「日常的なゆるい感じをのほほんと書いていきまーす」ってコンセプトはどうした。バトルやら事件やらのテコ入れなんかいらねーんだよ。

1年近くほったらかしのストーリーに読者数なんか稼ごうとしてんなよなー。

「そういえばさ、九一さん」

「はい？」

俺の声に小首を傾げる九一さん。かわいいー。

「朝の封筒さ、賢に渡すって頼まれたやつ。あれ、なんだったんだ？ 俺あの後すぐ拉致られたから、賢に内容聞くこともできなかった

たし」

「え？ えーと……なんでしたっけね」

「あれ、もしかして極秘ってやつ？ 実はあの中に賢へのラブレターが入ってたりにして……」

「えと。あの、うー……」

なに、その表情。

いやいや、いやいやいやいや、何をマジになってんですか。

んなわけねーじゃん。

だってA4サイズの茶封筒だよ？

生徒会執行部って書かれてあったんだよ？

そんなのにラブレターなんか入ってるはず……なきにしもあらず、いやいやないって。

賢に恋人って。

そんなのありえねえよ。だって、俺だっていないもの。賢にいて俺にいないとかはありえないじゃん？（誰に語りかけているのだ俺は）

あの弱気な賢ちゃんが女の子と二人きりで歩いたり手を握ったり
××××××××なんてそんなそんな……。

「実は……そうなんです」

「うそだあああああ！」

叫んじゃった。

うん、叫んじゃった。

走行中の車中で今までの人生をすべて覆すくらい大きな声で叫んじゃった。

「……っていうのは冗談にしてもだ、九一さん」

一変して冷静な声で告げる。

「そのスカートの裏に隠し持ってるもの、危ないから捨てれば？」
と言った。

いや、言おうとした。

言葉としては半分以上を紡いだらうか、とにかく俺が何を言おう

うといているのか察知できるところまではいったのだろう。そのタ
イミングで。

俺の喉元には、ダガーナイフが突きつけられていた。
シルバーの装飾を施された柄には、九一さんのしなやかな指が絡
みついている。

彼女は俺にナイフを向けながら、微かに笑っていた。

34話・脱出（後書き）

一年くらい空いてしまいました。これを投稿したところで一体何人が見てくれるやら。

後書きの書き方も投稿の仕方でも忘れていたNOTEです。

一年ぶりってことは少しは成長したのかと思いきや、ですよ。それが全然なもんで。

相変わらずの急展開を描いてしまいました。

ナイフって……。

これからまた更新できるときが来ることを願って締めさせていただきます。

「やべえ、なんだこの暑さ」が最近の口癖のNOTEでした。

35話・九一菊花

「よくわかったね、竜崎陽さん」

喉元に突きつけられたダガーナイフ。その刃先よりも鋭い目つきだった。

俺は車を走らせながら彼女を見る。

このいちぢなえ
九一咲苗を。

小さな女の子だ。同い年だろうか。一つ学年が下と言われても納得できそうな矮躯。

そんな彼女が……どうしてこんな……。

「彼女、じゃないよ。もうこんなことする必要もない」

すると九一さんは自分の髪を掴み、一気に引つ張った。髪の毛が抜ける。いや、脱毛進行中というわけではなく、カツラを脱いだだけだった。

それはウィッグじゃない。そんなおしゃれのためにつけてあるわけじゃなくて、それは――

「変装……か」

「その通り。まあ誰でも見りやわかるでしょ、そんなの」

九一さんの下から出てきたのは、男の子だった。九一さんに瓜二つの少年。カツラを被るだけで十分本人だと思える顔立ちだった。見てみるとかわいらしく思うが、その顔は、歪んだ笑いに染まっている。

「お前、誰だよ……」

「そうだね。活殺自在な相手の名前も知らないんじゃない、死んでも死にきれないよね」

彼はダガーナイフを構えたままで名乗った。

「僕の名前は九一。九一菊花だ」

「九一？」

「さっきまで名乗っていた九一咲苗。僕はその弟だよ。双子のね」
「な、なんだって」

「君たちと同じさ。君たちと違って、僕たちは二卵性双生児だけど、それでも昔からよく言われたよ。咲苗に男のこの服を着せれば菊花みたいで、菊花に女の子の服を着せたら咲苗そっくりだってね。僕たちは、世界一似ている二卵性だよ」

「へえ。性格の方は全然似てないみたいだけだな」

「というか、今まで双子という設定が活かされていなかったこのストーリーについて、他の双子が、主人公よりも早くその設定を活かし始めたのが驚きだよ。」

「で、お前は何者なワケ？　なんで俺、切っ先を向けられてんだよ」
ただナイフを捨てるよう勧告しただけだろ。こんなバトル展開に発展するようなんてなかったはずだ。少なくとも、俺には戦う意思がないからな。

「君がナイフに気づいたからさ、竜崎陽。ただそれだけだ」

「それだけって……」

「僕たちは君のことを知っているよ。君の過去も、交友関係も、弟の竜崎賢のことだね」

「へえ、そりゃ光栄だな」

とんだ有名人になったもんだ。

「けど、だからなんだってんだよ。俺のことを知ってりや^{どっかつ}恫喝していい法令でもあるのか？　それに僕たちってなんだよ。まるでお前がどこかの組織に属してるような言い方——」

「生徒会だよ、僕も咲苗もね」

「生徒会？」

「そして生徒会は君を危険視している。君の経歴を知っていれば当然だと思っけ——」

「ちょ、ちよつと待ってくれよ」

何言っただこいつ？　さっきから抽象的な表現ばかりで大事なことがほとんど読み取れない。俺はそれ程頭がいいわけじゃない

んだぞ。

まずは順番に、こいつに話を確認しながら質問していこう。

「最初に。お前は九一菊花。九一咲苗さんの弟なんだな？ 双子の」

「そんなところから確認するの？」

「いいから答えろよ。こっちは頭の整理で忙しいんだ」

オートマチックとはいえ運転中だしな。菊花は面倒くさそうに肩をすくめる。

「わかったよ。その通りだ。そして二人とも生徒会執行部に所属している」

「その生徒会のあんたが、なんであんなところに囚われてたんだ？」

「僕は囚われていたわけじゃない。むしろあそこを仕切っていたんだ」

「……？ どういうことだ？」

菊花はやれやれ、と頭を振ってから答えた。

「君を追いかけてきたやつら。あれはみんな生徒会の息がかかった者たちだ。ちよっと人相は悪いが、従順なやつらだよ」

「おいおい。じゃあお前がいたあの場所は独房の役割をしてたんじやなく、お前が居座るためのボス部屋だったってわけかよ」

「そうだよ」と微笑む菊花。

なるほど。そう考えればあの部屋の豪華さにも納得がいく。それに、『捕まっている』という同じ待遇のはずだった俺と別々の部屋だったことにもな。

一人をVIPルームに、一人をあんなコンクリートの部屋に置いとくことないもんな。二人ともあの冷たい部屋においときゃいいはずだ。

けどこいつは捕まっていたんじゃない。こいつ自身があいつらに指示を出してたんだ。俺をあんな部屋に縛り付けておくことを。アイコンタクトかなんかだな。

「で、生徒会があんな廃ビルでなにしてたんだよ」

「そんなことを君に話す必要はない」

「そうかよ」

即答しやがった。なんかむかつく。

「なんだその目は。僕に挑発してるのか？」

ナイフを俺の首につけるな。こっちだって死ぬのは怖いんだよ。

気を取り直して、質問を続ける。

「じゃあ次だ。俺の過去を知ってたんだな？ だからってなんでこんなこと……」

「このナイフは一応、だよ。君の過去を知っていれば当然の処置さ。一瞬で僕を倒さないとも限らないからね」

「そんなことしねーよ。俺はもうケン力はしないうって誓ったんだ」

「でも、君の力は十分、生徒会の邪魔になり得る。少しでも首を突っ込むようなら、ここで排除しておこうと思ってるね」

「物騒な言葉を使うなよ」

ますます似てねーぜ、あんたらきょうだいご姉弟。

生徒会の邪魔、ねえ。どうせその生徒会の活動内容も教えてくれないんだろーし……。

「それより、このまま帰ってもいいのか？ 俺は今自宅に向かってっけど」

「いや、学校に向かえ。僕はそっちで降りる。君がこれ以上首を突っ込まないと誓うなら、このまま帰してやるよ」

「何やってんのかも知らねえのに、俺が何をしようってんだよ。それに、そのナイフをそろそろ下ろしてくれ。このままじゃまるでバスジャックだ」

ふん、と悪態をつきつつ、彼はナイフを下ろした。張り詰めた糸が緩んだように、首元の力が抜けていく。もうちょいでつるところだ。

自宅に向かっていた車を学校の方向に合わせる。ってか、簡単に了承してよかったのか？ 学校関係者に俺が運転してんの見つかったらまずいдар。それ以前に、菊花がこの事を生徒会に報告しないとも限らない。

ヤバくね？ 二年生に進級して何日もしない内に退学とかありえねえよ。

すると、俺の心中を見通したのか菊花は、

「心配するな。ちくるつもりはないさ。一緒に乗った僕まで同罪だ」と言ってくれた。

なんだ。

こうして見ると意外とかわいいところがあるんじゃないか。素直に生活してれば、こいつだって異性同性かわらず好かれると思う。「勘違いするな。慣れ合うつもりはない。貴様が身を引かないなら、いつでもその身体を引き切ってやるからな」

「……………」

素直な殺意を向けられました。

前言撤回。

まったくかわいくねえ。貴様とか言ってたぜ、今。

校門が見えてきたところで、俺は速度を緩めた。

「そつえば」

菊花がそう言ったのは、そんな頃だった。

「竜崎賢は風紀委員だったね」

「ん？ ああ。ってあれ？ 確か生活委員じゃなかったっけ。やることは風紀委員と変わらないけど」

「そつか、変わったんだったね」

「変わった？」

既に止まった車はアイドリングを続ける。俺はやっと、ちゃんと菊花の方を見た。こう見ると、ますます似てるな、九一咲苗さんと俺たちもこうなんだろうかと思いつながら、話を続ける。

「前は違う名前だったのか？」

「ああ、君は知らないんだ。以前はね、『風紀委員』って名前だったんだよ。それが、ある時から名前を変更させられた」

「変更させられたって……。まるで罰を受けたみたいに」

俺はまったく意識しない形で口走っただけだった。

が、彼は口元に笑みを浮かべた。ナイフを構えた時のような、凄惨な笑みを。

「そつだよ、罰を受けたんだ。僕ら生徒会の手によってね」

「せ、生徒会が！？　なんで！？」

「邪魔をしたからさ。名前を奪われるというのはそのものの否定だ。道場破りが看板をいただいていくのと一緒にさ。名前がなければ名誉も奪われる。この名称変更には、それだけ重い意味があるんだ」

名前を奪った？

名誉……いや、もつといえば存在を奪ったのと同じだ。単なる名前の変更じゃないのか。その裏にどんなやりとりがあったってんだ？　どうしてこいつはこんなにも、愉快そうに笑うんだ？

「まあ、その頃には僕もこの学園にはいない。訊くなら、にひまる せいじ鈍丸清司を訪ねるといいよ。生活委員がまだ『風紀委員』だった時代の、最後のメンバーだからね」

「鈍丸、清司……？」

「そつ。現・生活委員長だ」

35話・九一菊花（後書き）

解説の回でした。

会話劇ですね。モノログもあまり挟むことなく。ずっと車内でした。

無理やり作った設定じゃないですよ。以前からこういう話にする予定でしたからね。一年も置いてしまったのは……まあ……なあなあになってたつていうか……。

まあ、これからはできるだけ続けていけるようにしたいと思います。

コメディ的なやりとりも積極的に交えたいので、どうか見届けてくださるようお願いします。

あ、冒頭の「NOTEです」を忘れました。NOTEでした。

閑話・結局、ヒロイン的立ち位置ってどうやって決まるのかな？作者の意思かな

「日常じゃねえ！」

俺の部屋のパソコンを見ながら、彩さいが発狂した。

「なんだこの展開は！ おかしいだろ！ これまでの『日常的な日々』が完全に消え去ってるじゃねえか！ 何あの凶悪な生徒会！ 何この高校の黒歴史！ 今後の展開はどうなんの！？ 気になる！ 続きはまだか！」

頭を抱えて身悶えしている。それはもう猛ったバイソンかと思うほどに。ツインタールが荒々しく振れる角にも尻尾しっぽにも見えた。

！マークの連射が痛々しいです。スネークさんだってこんなに浴びることないだろうに。

「って、人の部屋で何やってんだよ。ずかずか入り込んで我が物顔でパソコン開いたかと思いきや、急に絶叫しやがって。それ以前にキャラが崩壊してんのは大丈夫なのか」

「知るかボケ！ 最近私の出番が少なくなってきたと思ったら一年もストーリーほっぽり出しやがって。番外編で出したからってごますれると思うなよアホンダラあ！」

「ちよつと待って！ もうフォロー不可能な領域に来てるよ！？ あんまり汚い言葉を吐くのはどうかと思うな。言葉を選ぼうぜ、言葉」

これじゃ本編に影響を及ぼすぞ。実はこんなキャラを隠しながら生活してる、みたいになったら見方がまったく変わってくるじゃないか。

そうして見てみるとなんか納得いくじゃないか。今日はなんか赤いワンピース着てるし（その設定生きてたんだ）。

最初から暴れる気満々だったのかも。

「っていうか何？ あの新キャラ。双子とかキャラ被りじゃん。男

の子なのにかわいい顔しちゃって。ヒロイン的立ち位置の私がかすんでいくのが見えてるよ」

「いや、かすんでいく原因はお前の言動の数々だと思う」
立ち位置とか言うな。

つつか、お前ヒロインを気取ってたのか？

甘いわ幼児体型が。

「ヒロインってのはな、元気があって少しばかり厳しい態度をとるけど、心の奥では主人公のことを思っていて……。そうだな、成績は優秀な方がいいな。若くして赤服を着られるくらいの。のちのちインパルスを任されるなんてのは、恋人としては誇りだよな。出撃前にこう、口づけなんかしちゃって」

「確実にルナじゃん」

「名前出すなよ……」

「あんなのがいいの！？　じゃあこの作品は今後どうなっていくの！　DNAいじったりなんかしないよね？　髪とか目の色がカラフルになったりするの？　あんなの反則じゃん！　あれだけすれば誰でもかわいくなるよ！　不死身の主人公くらいで上がるよ」

「反則とか言うな！　それがいいんだろ。あの紅の髪色が美しいんだ。そこは譲れないね！　第二世代コーディネーター舐めんな」

不死身の主人公に関してはノーコメントだ。俺も彩の意見に賛成なもので。

「そんなこといったら私だって、シンミたいな人がよかったもん！　ひたむきに頑張る姿と、一番最初の悲鳴がなんとも言えなかったもん！　そうじゃなければ黒桐幹也でもいいけどね」

「なんでそこまで鈴村ボイス推し？」

結婚おめでとうございます、鈴村さんに坂本さん。

いやいや、話がずれすぎ……。

「それより陽ちゃん、前と好み変わったんだね。大人のお姉さん、って小学生の頃は言ってたのに」

彩はそこでさすがに冷静になってたようで、声のトーンとツイン

テールが下がってきた（生きてんのかあれ……）。

っつか、小学生の俺はそんなこと言ってたのか。どんだけマセてんだよ。

「へ！ 見くびってくれるなよ。俺だって成長してるんだ。昔と今じゃ人間の『質』ってもんが違うんだ」

なぜか胸を張る俺。

好みのタイプが変わるのに成長も何もないと思うが。

「そうだよな。ウィキペディアの知識を丸暗記してた時代とは違ふよね」

「やめろ！ 俺の恥ずかしい過去を露呈すんな！」

そりゃウィキペディアが教科書であり聖書マニユアルであつた時期もあつたよ。

「ああ、俺が小学生の頃に知ってれば、ウィキペディアの内容をまる写しした自由研究ができる」と思つてた時期もあつたよ。

しかし、今は違ふ！

そんなことをするような、思ふような俺ではない！

「俺は試験問題をネットに質問するようないさ！」

「でも隣の智里ちゃんちさとに質問するのも問題じゃないかな」

…… なんて知ってたんだよ。

智里のやつか。あいつ俺の悪事に関しては口軽いからな。お目付役かよ。

「智里ちゃんが見張ってくれるなら、私としても安心だよ。陽ちゃんくらいのおてんばだと、いつ腐海に潜り込んでいくかわかったもんじゃないからね」

「さっきまで警戒色を露わにしてたお前に言われたくねえよ」

せめてワンパクって言ってくれ。おてんばって…… どこぞの姫様じゃないんだから。

「それより、お前は昔とちつとも変わんないな、彩。ちゃんと年齢は進んでんだろうな」

「当たり前じゃない。これでも2センチ伸びたんだよ」

「そのワンピースも、いつ買ったやつだよ。だらしくなってるわ

けでも色褪せてるわけでもないけど、だいぶ前から見たことあるぞ」

「これだって、小学生の時にはぶかぶかだったもん」

「お前本当に高校生かよ！」

いくらワンピースがあまりサイズを気にしなくていいからって……

。小学生と大差ない体型の高校生がいていいのか。

なんかいたたまれなくなってきた。

俺はゆっくりとした動作で彩の両肩に手を置いた。

「お前にヒロイン役は回ってこないよ。でも安心してくれ。俺はお前のこと、妹のように大切に思ってるからな」

目を瞑って頷く俺。やっぱり、気の回し方がさすがだな。悩んでいる子を見たら励ましてあげる。これこそが紳士たる竜崎陽の真価だ。これは決まった。

瞬間——轟音と共に、まぶた瞼の裏に火花が散った。

おでこに受けた衝撃で、俺の頭は後ろに飛んでいく。ぎりぎりのところで首が頑張ってくれたから良かったものの、危うく頭部と胴体が分裂するところだった。

「つてえ！ 何すんだよお前！ ヘッドバットの威力にも程があるぞ！ 全盛期の清原か！ 場外まで吹っ飛ぶところだ！」

「陽ちゃんにはわかんないよッ。小さいのだってステータスなんだよ。手に入れようと思ってもできないチャームポイントだよ。最近じゃ、街中でワンピースみたいな薄着していると視線を感じて恥ずかしいんだから」

「お前そりや被害妄想、いや誇大妄想だって。実際にはそんなことねえよ。お前が望んでる世界を脳内で創り上げてただけだ。少なくとも俺はチビペったんに興味はな——げぶあ！」

ヘッドバット二回目だった。二打数二安打だ。

「それ以上言わないで陽ちゃん。さもないとツインテールで首締めるよ」

「手の形にでもトランスできんのか！？」

どこの金色の闇だ。トラブルなんて言葉じゃ済まない事件だ。

「そんなに言うなら触りなさい！　そうすれば私の魅力にもちよつとは気づくはずだよ陽ちゃん！」

そんなことを言いつつ、彩は俺を押し倒してきた。俺の上に乗っかり、手首をがっしり掴んでくる。自分の胸元に持っていく気だろ

「やめるバカ野郎！俺は番外編でこんなことしたくない！せめて本編でやれよ！」

本編が見向きもされなくなったらどうすんだ。

暴走する彩に抵抗する俺。上から抑えられると案外強いんだな、女の子でも。

「いいよ。こうなったら番外編の女王とでも呼ばれてみせるから！」

「どこまで貪欲だお前！」

バタバタと響く戦鬨音(?)の中、部屋の扉が開いた。

俺と彩はいつ
ぺんにそち
らを向く。

そこには智里が立っていた。仁王立ちで眉をつり上げてるけど、
なんでだろう。

しんと静まり返った空気に、智里の声が反響する。

「うるさい！ もうちょっと静かにできないの、二人とも！」

-
-
-
-
-
-

⌈
⋮
⌋

.....

気づけば、俺と彩はいつの間にか並んで土下座していた。やろう
と思ったわけでもないのに、身体が勝手に動いていた。

「ごめんなさい」……「」

まさかこの歳になつて夜までお説教されるとは思わなかった。全然成長してませんでした。

閑話・結局、ヒロイン的立ち位置ってどうやって決まるのかな？作者の意思かな

なんとか書いてますNOTEです。

このお話の更新を再開してから新たにお気軽に入り登録していただいた方がいるみたいです。本当にありがとうございます。

というより、一年も忘れ去っていたこの作品の設定を、思ったよりも自分が覚えていたことに驚きでした。それほど思い入れが強かったんでしょうか。それはわかりません。

しかし、この話が少しでも多くみなさまのお気に入りになってくれれば幸いです。

個人的かつ適当な思いで始めたこの話ですが、これからもどうぞよろしく願っています。

それでは、NOTEでした。

36話・やっと学園モノらしく

私立彩桜学園の日常的な日々。

特に面白そうな気配のするタイトルではない。

その上、最近では『日常的な』ものではなくってきているし、なおかつ『学園』の部分までもがないがしろにされている。

こんな状況でいいのであろうか。いや、作品そのものがおもしろいならいいのかもしれない。しかし正直、この作品には奥深さもなければ爆笑できる箇所もない。つか主人公がモノログとはいえここまでストーリーにダメ出ししてる時点で間違っている（感想には個人差があります）。楽しく見てくれている読者に申し訳ない。

「ということで、今回は我がクラスメイトを紹介したいと思う」「陽ちゃん、急にどうしたの？」

週が明けての月曜日、俺こと竜崎陽は登校中に幼馴染から心配された。

ルームシェアリングという読者に忘れられているであろう設定上、登下校は嫌でも一緒に歩くことになる。今日は四人仲良くの登校だった。

まあ、智里とは土曜日から口をきいてないんだけど……。ケンカ中である（これも忘れ去られつつある設定）。賢から俺や智里へ仲裁なり仲介なりが入ったが、俺は怒っていないのだからどうすることもできない。智里が勝手に怒っているだけだ。

俺がからかったのが悪いんだろうけど。

そんなわけで、智里は賢と共に俺や彩の後ろを歩いている。

「なんか、久し振りに学校へ行く感覚があるな……」

「え？ いつも通りに週末を過ごしただけじゃん。陽ちゃん、そんなに濃い時間を過ごしたわけ？」

日曜日に俺がどんな目に遭ったか、彩たちには話していない。あ

んなバトル展開や車で脱出なんてことがあったんだ（車は適当な無料駐車場に置いていた。今頃レッカー移動されてるかも）。

いらぬ心配をかけさせたくないし、あらぬ誤解を受けない。それに、昔つるんでいた利家^{としゃ}さんのことを、こいつらは快く思っていないからな。

なにか特別な用件でもない限り、俺とあの人は、今後会うことはないだろうと思う。

「いやー。登校の時間って長いようで、案外短いよね。だるうい気持ちで起きたのがついさっきのような気がするよ」

彩が言う。

「そうだな。楽しい時間は早く過ぎるっていうけど、朝の爽やかさがそうさせるのかもな」

後列は重苦しい雰囲気だけど。

俺たち四人は教室に入った。そこには去年から一緒の人間、あるいはクラス替えにて幸運にも俺と同じクラスになった人間もちらほら。

「陽ちゃんと同じクラスになるのは幸運なの？」

「黙っとけい、彩ちゃん。俺のモノローグに口を出すな。久し振りの更新なんだから、このお話」

つつか、やっぱ閑話でのペースが本編にも引きずられてるな。

悪い傾向だ。

気を取り直そう。

ともかく、俺たちは二年生の教室に到着したのだ。

これで予告通り、俺のクラスメイトを紹介できるってもんだ。

さて、誰から紹介したものかって……あれ？

俺は教室をざっと見渡したあとで、横にいるツインテール少女を見る。

「なんでお前がこの教室にいんだよ!？」

「そうなんだよ、陽ちゃん」

俺が渾身のつつこみ（絶叫Ver.）をかましたにもかかわらず、彩は腕組みをして神妙な顔をする。

「よく考えたら、この生活がずっと続くんだよ、これから。朝、みんなで楽しく登校したっていうのに、生まれたのが一年遅いつていう理不尽な理由で三人と離ればなれになっちゃうんだよ！　こんな悲劇の別れが毎朝繰り広げられるんだよ！」

「オーバーに両腕を広げるな。必死そうな顔をするな。毎日の放課後には感動の再会があるんだから」

「放課後は必ず会えるって限らないじゃない。用事があつたら下校時間がずれるんだから」

「そうだけどな……」

「というわけで、私はこの教室で授業を受けます」

「はあ！？」

どんな急展開だ！

そんなとなりのトトロみたいな画ヅラに耐えられるか！

このツインテ、この話を崩壊させる気か！？

「俺は賛成だぞ、陽！」

彩へ抗議しようとする、違う方向から声が飛んできた。

「俺の名前は長内深黒だ。おさないみくろよろしく、お譲ちゃん」

「は、はあ……」

突然寄ってきた俺のクラスメイトは彩に手を伸ばす。彩もそれに応えようと手を握ろうとするが、それより前に俺が彼の手をペシント払った。

「俺の幼馴染に触れるな、変態が」

「な、なんと！」

深黒は心外だ、とても言いたげなオーバーアクションをした。

いや、こいつは常にオーバーアクションだけどな。

「一年からの付き合いじゃないか。変態なんておかしい言いがかりはよしてくれよ、陽くん」

「黙れスーパード変態・ザ・カスタムめ。彩がお前を知らないのいいことに近寄ったりしてんじゃ……」

人差し指をつきつけて堂々とキメたつもりが、そこに深黒の姿はない。

……あれ？

どこいった？

「あなたは魅力に満ちている。そのあどけない瞳、清浄な心。この世に舞い降りた天使か、はたまた男を魅了してしまう女神か……」

「は、はあ……」

背後で気持ちの悪い口説き文句と困惑のあいづちが聞こえた。深黒のやつ、俺では話が通らないと思って彩へ直接話しかけやがって、なんとしても近づけてはならない。

「あのなあ」

振り返り、再び口を挟むことにする俺。

「陽ちゃん、なんでそんなに必死なの？」

彩が疑問を呈す。不思議そうに小首を傾げていた。

でもそこは彩。少しだけ笑っているように見える。空前のモテ期到来に、俺が止めるものだから、その様子がおもしろいのだろう。

恋愛感情うんぬんよりも、俺の焦っている姿そのものがおもしろいのだろう。案外、腹黒いやつなのだ。

だが違う！

これには厳然たるワケがある。

別に、彩に男が言い寄ろうが知ったことじゃない。彩がどんな男と好き合おうが付き合おうが知ったことじゃない。

俺の見えないところで育めばいいし、俺の知らないところで展開されるべきだ。

けど彩には、間違った道に踏み入ってほしくはないんだ。

長内深黒などと付き合ってしまったては、彩の人生が破滅する。

「その男はな、ロリコンなんだよ」

「え？」

「ちょ、おいバカ！」

放心する彩。

慌てる深黒。

まあ、予想通りの反応だな。

「俺は断じてロリコンなどではない！ 確かに女子や女兒は好きだ。だがそれは彼女たちをロリータと見ているわけではない。彼女たちはあの幼年にして既に立派なレディなのだ！ 女子高生などはもう熟女と断定して構わないんだ！」

「ご高説の最中悪いが、俺の背中が妙に痛いんだけど」

おそらく、クラスの女子たちの鋭い視線が深黒を射抜いているんだろう。とんだ流れ弾をくらったもんだ。

この場にいるのが恥ずかしい。

「な。こいつはこういうやつだ」

俺は彩の肩に手を置いた。もう一方で指差す先には、女子たちの視線にビビった深黒があとずさっている。

「女子中学生を見ればケータイで写真を撮ろうとするし、女子小学生を見れば口説こうとし、幼稚園児を見れば仲良くなって家までついていこうとする。その都度、止めに入るのは大変なんだぜ」

恐ろしいことに、年齢が下がるほど接触レベルが上がっている。

「本当にいたんだ、ロリコンって……」

「ああ。傷んでるよ、あいつは」

あるいは病んでるのか。

「おい貴様！ どさくさにまぎれて何をその子と話し込んでいるのだ！」

顔中にたんこぶや青アザを増やした深黒が叫ぶ。

「いや、お前。その『どさくさ』の間に女子たちとどんなことがあったんだよ……」

紅の豚のラストシーンみたいになってんぞ。

「ともかく！ その子がこのクラスに来るといふなら、俺は喜んで迎えるぞ！」

「俺も賛成！」

「あ、俺も俺も！」

なぜか男子陣は盛り上がっていた。長内深黒の横にはいつの間にか彼の支援者となっていている数人の男子の姿が。

なんだ、この形勢逆転。

幾年前の自民党の気分。

主人公交代とかあんのかな。嫌だなそんな小説。せいけん

いや今はこの状況を打破せねば。このままでは俺のクラスに彩が加入してしまう（ありえねーけど、なんでもアリだからこの話）。どうしよう。

なにか手を打たねば。

と――俺がお圧され気味になっていると、

「朝から騒ぐなあ！」

甲高い声が空気を引き裂いた。

シンと静まる教室。

声のした方を振り返ると、そこには学級委員副委員長・河原志保かはらしほ美が仁王立ちを決め込んでいた。

今更ながら登場。

河原志保美。

彼女が今回メインとなる人物である。

36話・やつと学園モノらしく（後書き）

更新遅くなりましたねNOTEです。

はじめに断っておきますと、冒頭の陽の語りはあくまで主人公である彼の思いですので、本作を楽しみに読んでくださってる方々、これからも自分の感想に自信を持ってご覧になってください。

これからも本作をよろしく願います。

さて。

はい、そうです。

河原志保美の登場です。

やつとまともなクラスメイトです。

やつとまともな学園モノです。

つゆはらみなと このいちさなえ

きくか

露原湊、九一咲苗・菊花きくかに続いて、第三章（？）のヒロイン（？

？）的な立場です。まあ、ボンドガールみたいなのと捉えていただければ……。

あ、それにもう一つ。今までサブキャラが何人か出てきましたーとしや利家さんとか、深黒とかーが、今後も登場するかどうかは不明です。名前だけ出てきた現・生活委員長ですら登場未定です。

作者のまとめ方に期待しても無駄ですのであしからず。（最終回で全員出てくるとか、そんなのは実現不能でしょうねー）

あとがきに書いてあることなんて読み流してくださいって結構です
ので、どれが本当でどれが冗談なのか判然としませんが。

とにかく。

やつと新たな展開を迎えるということです。

ちなみに、前回はあれで終了です。消化不良ぎみでも終わりは
終わりです。また別の章で前回のに関連させられたらいいなーとは

思いますけどね。

更新の間隔が長かったのがきも長くなりましたNOTEでしたー。

37話・優等生Ⅱ説教？

河原志保美^{かはら しほみ}。

俺はクラスの子と話す方ではないから彼女の詳細については全くの無知と言って差し支えない。それでもエキストラとは違う、彼女は印象が深い部分がある。

彼女は学級委員である。

しかも副会長という高位についてらっしゃる。

そしてその座に違わぬ真面目さをもっている。やや堅物なきらいがあるくらいだ。

そんな近寄りがたい印象を持っている彼女には、当然なのかどうなのか、親しくしている人間は限られているようだ。とはいっても他の生徒のように何人かのグループでいつも行動しているのだが。嫌われているというわけではない。ルールに厳しい彼女は頼りになるし、なにかを教えてくれる時も懇切丁寧だ。

不良生徒には口うるさい女かもしれないが、一般にはきりつとして頼もしい女の子として支持を得ている。

しなやかな黒髪を首筋でまとめている彼女は、整った容姿をしている。

高嶺の花ともいえる彼女は一部の男子からは憧れの対象として見られているらしい。

すれ違つとかすかに、爽やかなコロンの匂いが流れるというのも、そんな野獣どもを虜にさせる所以なのかもしれない^{ゆえん}。

そんな彼女に言われたのだ。

朝は確かに騒ぎ過ぎたかもしれない。

俺と深黒^{みくろ}は素直に謝った。

そりゃそうだろ。なにか言い返せる雰囲気じゃねえよ。空氣がし

んと静まってましたもの。

申し訳ない気持ちでいっぱいだっただ俺がふと振り向くと。

彩はいつの間にか消えていた。

あいつ。

怒られるのが人一倍嫌いな彩ちゃん。

あとでおしおきたる。

「俺なんで怒られたのかなー」

授業中、ポロつと出した言葉。

「別に授業中じゃないんだからさー、あそこまで騒がなくてもよくない？」

「僕に言われても……」

もちろん、話し相手は我が兄弟、竜崎賢である。

「つか、怒鳴り方が番長だったよね？ 優等生って怒り方じゃなかったよ？ 優等生って語尾の方に小さい文字付けないもの。『騒ぐなあ！』ってさあ」

「あ、あの……」

「別に怒られたことにへこんでんじゃないよ？ 違うよ？ 俺子供じゃないもの。そんなことでぶーぶー文句言うようなお年頃じゃないもん。けどさあ、不満ぐらい言わせてくれてもいいやなあ」

「あの、陽……」

「俺もそう思ったぜ」

どこからか深黒の声も聞こえてきた。

あれ、席近くだっけ？ と思い振り向くと、このヤロー、俺の机の隣にしゃがみ込んでやがる。

せめて授業聞けよ。

「それにしても彩ちゃん……ドストライク！ マジで嫁にしたい。それにしても、あれだよな。あのロリイなボディが最高だよな。それにあのツインテールが童顔によく似合っただけで映えるぜ。抱きしめてそのままあんなことやこんなことへと発展出来たらどんなに——」

「いいから帰れ。でないとお前の顔面を抉るぞ」
なんかめっちゃめっちゃイラつく。

このままこいつを放置しておく、彩が危ない。
なんとかこの穢れた男から遠ざけなければ。
野生の長内深黒は手強いからな。

「なんだよー。俺と彩ちゃんの結婚を認めてくれよ、お父さん」
「誰がお父さんだボケ」

「まあ、いつか俺と彩ちゃんが手を取り合える日がくることは確定してるんだ。なんとしてもモノにしてみせる」

「お前はまず彩に触れられないように手を斬り落とす必要があるな」
「ははは。コワイ冗談だ」

冗談なら俺もナタの代金を家計簿に書かなくて済むんだがな。
残念。俺の脳内ではもう放課後ホームセンターに行くことが決まってる。

「まあ、なんだ。陽に知られずにいつのまにか近づくよ。お互いの距離は、案外遠くないぜ？　なんせ相手は敬語で話してくれてるんだ」

「今まで歳下にタメ口きかれてたのか……」
なんと危険な人種だ。

こいつがあの子に歩み寄れないよう、足も斬り落とす必要があるな。

今の内に手足にお別れと感謝と謝罪をしておくんだな。

「ちよつと、陽……」

「賢、止めるな。俺はやらなければいけない。世界中の子供たちのためにもな」

「そうじゃなくてさ」

不安そうに言葉を挟む賢だが、深黒もヒートアップしてきた。

いつの間にか立ち上がってやがる。

「いやいや陽、俺が必ず、彩ちゃんを幸せにしてみせる。いつか賞味期限が切れるその日までな！」

「てめえそこに直れ！ 世界が直視できないように血の涙を流すがいい！」

「やってみろ！ 眼潰しごときで俺が諦めると思っなよ？ 彩ちゃん、の匂いは既に覚えている！」

「じゃあ記憶ごと吹き飛ばしてやるよ。人間の形すら忘れるほどにな！」

「よ、陽うゝ……」

賢が俺のジャケットを引っ張る。なんだよ、と振りかえると……指差してる？ どこを？

目で追う。見つけた。

賢が指差した先には……。

「ねえ、あなたたち」

河原志保美が立っていた。

俺と深黒のすぐ近くに。

腕組みして。

仁王立ちしている。

「あ」

「あ」

俺と深黒の息があつた。本当は死にたいほど嫌な現象だが、『死』という言葉はここで使うにはあまりにもシャレにならない。

なぜなら、優等生が立っているのだから。

授業中にもかかわらず。

そして私語をする二人を見ている。

教師でさえ生唾を飲み込んでいる事態だ。

いや、手に汗握ってんじゃねえよ先生。スポーツ観戦じゃねえんだから。

これから起こることなんかわかってるだろ？

予測済みの事態だろ。

そして数十分後。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴っている中でも、彼女のお説教タイムと俺たちの土下座ラッシュは続いていた。

他の生徒はそそくさと移動教室に向かっているというのに……。

37話・優等生〃説教？（後書き）

少し更新が遅れましたNOTEです。

このまま、去年のように一年の間をあける時期がくるかもしれない恐怖と戦っています。それで困るのは読者の方なのに。

面目ございません。

さてさて仁王立ちキャラを確立しつつある志保美さんですが、

なんだろう、仁王立ちキャラって……。

なんにしても深黒はこれからも関わってくるようですので、温かい目で見てあげて下さい。

子供たちに危険が迫っている時は遠慮なく通報してあげて下さい。
あなたが世界を救うのです。

。なにが言いたいのかわからないNOTEでした（深夜だからかな）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1614i/>

私立彩桜学園の日常的な日々

2011年10月9日03時12分発行